

那 珂 34

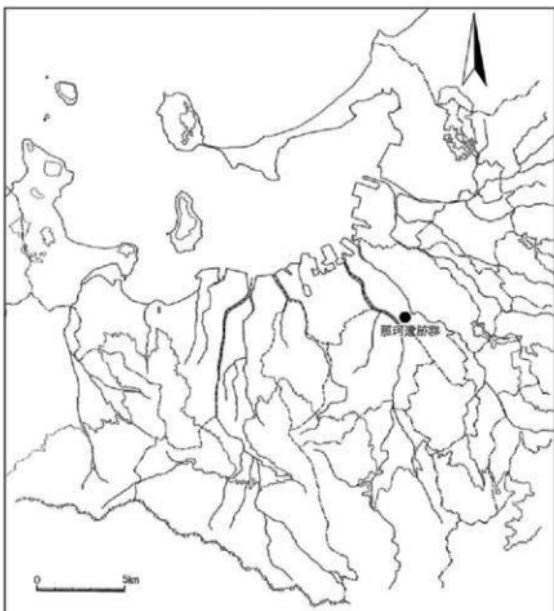
—那珂遺跡群第69次調査報告—

2004

福岡市教育委員会

NA KA
那 珂 34

—那珂遺跡群第69次調査報告—



遺跡略号 NAK-69
遺跡調査番号 9905

2004

福岡市教育委員会



巻頭図版1 調査区南東部分全景（北から）



巻頭図版2 調査区北半全景（東から）



卷頭圖版3 SC041出土內行花文鏡



138



139



141



142



144



145

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第69次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで株式会社権丈建設をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　言

- 本書は福岡市教育委員会が平成11年度に博多区那珂1丁目590-1、602-1、605-1において実施した那珂遺跡群第69次調査の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測は長家伸、高橋健治、佐藤信、大濱菜緒、伊藤健太、坂本真一、坂元雄紀が行った。
- 遺物の実測は長家、林田憲三、坂本、坂元が行った。
- 製図は長家、坂本、坂元が行った。
- 写真是長家が撮影した。また巻頭の鏡については比佐陽一郎が撮影した。
- 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から 6° 西偏し、真北から $6^{\circ}18'$ 西偏する。また座標は日本測地系を使用している。
- 本書で用いる遺構番号は各調査で通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（S B）、竪穴住居跡（S C）、土坑（S K）、溝（S D）、井戸（S E）、ピット（S P）である。
- 付録1として前東京国立文化財研究所平尾良光（現別府大学）・鈴木浩子氏により出土内行花文鏡鉛銅位体比の分析報告をいただいている。
- 付録2として、福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎氏により出土内行花文鏡の保存科学的処理について報告をいただいている。
- 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
- 本書の執筆はS C041出土青銅鏡についての報告を宮井善朗（福岡市博物館）が行い、他の執筆と編集を長家が行った。

遺跡調査番号	9905		遺跡略号	NAK-69	
所在地	博多区那珂1丁目590-1、602-1、605-1		分布地図記号	37-0085	
開発面積	1,400m ²	調査対象面積	1,400m ²	調査面積	1,088m ²
調査期間	平成11年4月8日～平成11年6月28日		事前審査番号	10-2-462	

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	5
1	遺跡の立地と周辺の調査	5
2	調査の経過	6
3	調査の記録	6
1)	掘立柱建物	6
2)	竪穴住居跡	14
3)	土坑	42
4)	井戸	44
5)	溝	52
6)	その他の遺物	56
7)	小結	56
付編 1	福岡市那珂遺跡から出土した内行花文鏡の鉛同位体比（平尾良光・鈴木浩子）	73
付編 2	福岡市那珂遺跡から出土した内行花文鏡の保存科学的処置について（比佐陽一郎）	79

挿図目次

第1図	調査区位置図 1 (1/50,000)	2
第2図	調査区位置図 2 (1/4,000)	3
第3図	調査区位置図 3 (1/500)	4
第4図	調査区全体図 (1/200)	折り込み
第5図	掘立柱建物・竪穴住居跡配置図 (1/300)	7
第6図	S B018・019及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)	8
第7図	S B028実測図 (1/60)	9
第8図	S B028出土遺物実測図 (1/3)	10
第9図	S B1012・1013及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)	10
第10図	S B1014・1015及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)	12
第11図	S B1016・1017及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)	13
第12図	S C003・005及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	15
第13図	S C006・010・011及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	16
第14図	S C013及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	18
第15図	S C031及び出土遺物実測図 (1/50, 1/4)	19
第16図	S C032及び出土遺物実測図 1 (1/50, 1/3)	20
第17図	S C032出土遺物実測図 2 (1/8)	21
第18図	S C033・034・035及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	22
第19図	S C040及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	23
第20図	S C041実測図 (1/50, 1/30)	24

第21図	S C041出土遺物実測図 1 (1/3)	25
第22図	S C041出土遺物実測図 2 (1/1)	26
第23図	S C042・1007・1010実測図 (1/50)	29
第24図	S C042・1007出土遺物実測図 (1/3)	30
第25図	S C043及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	31
第26図	S C045及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	31
第27図	S C046及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	32
第28図	S C048及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	33
第29図	S C049及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 1/3)	34
第30図	S C050・1003及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	35
第31図	S C1006及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	36
第32図	S C1008及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 1/3)	38
第33図	S C1009及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 1/3, 1/4)	39
第34図	土坑・井戸・溝配置図 (1/300)	40
第35図	S K007・008・014・016・017・030・039実測図 (1/30)	41
第36図	S K014・017出土遺物実測図 (1/3, 2/3)	42
第37図	S K044及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	43
第38図	S E1001・1002実測図 (1/30)	44
第39図	S E1001出土遺物実測図 1 (1/3)	45
第40図	S E1001出土遺物実測図 2 (1/3, 1/8)	46
第41図	S E1001出土遺物実測図 3 (1/3)	48
第42図	S E1001出土遺物実測図 4 (1/3)	49
第43図	S E1002出土遺物実測図 (1/3)	49
第44図	S E038及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	50
第45図	S D001土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	51
第46図	S D002及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	52
第47図	S D029及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	53
第48図	S D036土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	54
第49図	S D037土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	55
第50図	その他の出土遺物 (1/3)	56

写真目次

卷頭図版 1	調査区南東部分全景（北から）	
卷頭図版 2	調査区北半全景（東から）	
卷頭図版 3	S C 041出土内行花文鏡	
卷頭図版 4	S E 1001出土遺物	
写真 1	調査区より南を望む（上方は那珂八幡古墳）	57
写真 2	調査区南東部分全景（北から）	58
写真 3	調査区南西部全景（北から）	58
写真 4	調査区北半全景（東から）	59
写真 5	調査区北西部竪穴住居跡群（東から）	59
写真 6	S B 018（西から）	60
写真 7	S B 019（西から）	60
写真 8	S B 028（北から）	60
写真 9	S B 028—S P 022（北から）	60
写真 10	S B 028—S P 023（北から）	60
写真 11	S B 028—S P 023土層	60
写真 12	S B 028—S P 024土層	61
写真 13	S B 028—S P 025土層	61
写真 14	S B 028—S P 026（西から）	61
写真 15	S B 028—S P 027（北から）	61
写真 16	S B 1012（北から）	61
写真 17	S B 028・1012全景（北から）	61
写真 18	S B 1014（東から）	62
写真 19	S B 1015～1017（北から）	62
写真 20	調査区北端部掘立柱建物群（東から）	62
写真 21	S C 005（北から）	62
写真 22	S C 005上層貼り床除去後（北から）	62
写真 23	S C 005階段状遺構（東から）	62
写真 24	S C 005階段状遺構下層貼り床除去後（北から）	63
写真 25	S C 005階段状遺構下層貼り床除去後（東から）	63
写真 26	S C 010（南から）	63
写真 27	S C 011（東から）	63
写真 28	S C 013（東から）	63
写真 29	調査区南端部（北から）	63
写真 30	S C 031（東から）	64
写真 31	S C 031貼り床除去後（北から）	64
写真 32	S C 032（北から）	64
写真 33	S C 032内甕棺破片出土状況（北から）	64
写真 34	S C 032土層	64
写真 35	S C 033～035（南から）	64
写真 36	S C 040（南から）	65

写真37	S C041（北東から）	65
写真38	S C041貼り床除去後（北東から）	65
写真39	S C041床面遺物出土状況（西から）	65
写真40	S C041内S P1011（北から）	65
写真41	S C041内S P1011（西から）	65
写真42	S C042（西から）	66
写真43	S C042内竈跡（西から）	66
写真44	S C1007（北から）	66
写真45	S C043（南東から）	66
写真46	S C045（南から）	66
写真47	S C046・1009（東から）	66
写真48	S C048・049（西から）	67
写真49	S C049（西から）	67
写真50	S C049竈跡（西から）	67
写真51	S C050（東から）	67
写真52	S C1003（東から）	67
写真53	S C1006（東から）	67
写真54	S C1008（南から）	68
写真55	S C1008竈跡（東から）	68
写真56	S C046・1009（南から）	68
写真57	S C1009竈跡（東から）	68
写真58	S K007（西から）	68
写真59	S K008（東から）	68
写真60	S K016（東から）	69
写真61	S K017（北から）	69
写真62	S K017貼り床除去後（東から）	69
写真63	S K030（東から）	69
写真64	S K039（西から）	69
写真65	S K044（西から）	69
写真66	S E1001出土状況（東から）	70
写真67	S E1001（南から）	70
写真68	S E1002（東から）	70
写真69	S E038（東から）	70
写真70	S D001土層1	70
写真71	S D001土層2	70
写真72	S D036土層	71
写真73	S D036（北から）	71
写真74	S D037土層	71
写真75	S D037（東から）	71
写真76	出土遺物	72

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成10年12月14日付けで山浦ユキノ氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区那珂1丁目590-1、602-1、605-1の物件に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号10-2-462）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK）に含まれているところである。申請者と協議の上平成11年1月12日に申請地内の試掘調査を行い、現況から20cmほどで鳥栖ローム面に至り、溝・柱穴を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。なお協議途中で事業主体が山浦ユキノ氏から株式会社権丈建設に変更となった。協議の結果共同住宅建設による遺構の破壊が避けられないため、平成11年度に発掘調査、平成12年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお諸般の事情により資料整理の一部と報告書作成は平成13年度以降に繰り越している。

調査期間は平成11年4月8日～平成11年6月28日である（調査番号9905）。発掘調査は当初共同住宅建設予定地の1,040.67m²を対象としたが、調査中の協議の結果申請地全体1,400m²を調査対象とすることとした。安全上の残地をとったため実際の調査面積は1,088m²である。遺物はコンテナ32箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社権丈建設をはじめとして調査地点周辺の皆様から発掘調査についてご理解を得るとともに多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 株式会社権丈建設

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文課財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

調査担当 調査第2係 長家伸

調査・整理作業

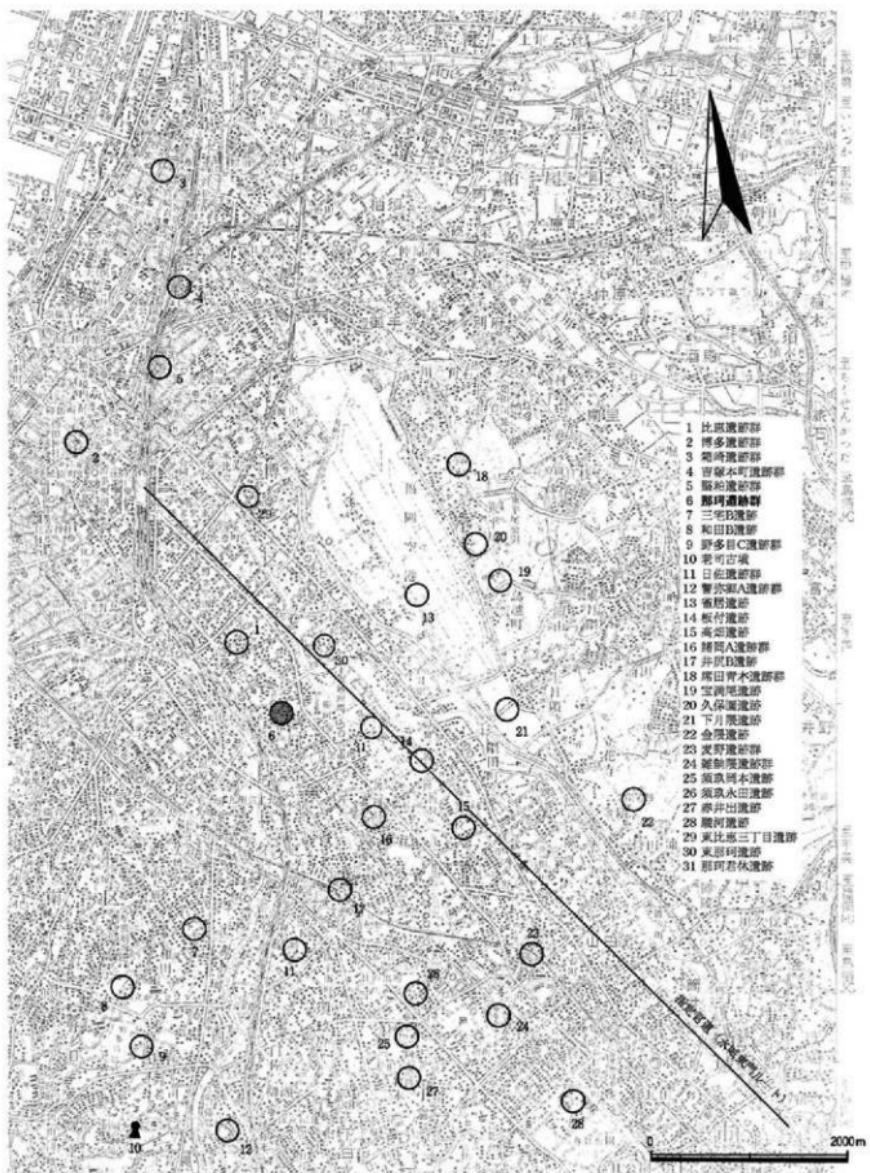
江越初代 関加代子 曽根崎昭子 野口ミヨ 村崎祐子 森垣隆視 能丸勢津子

石川君子 井口正愛 大久保学 清水明 郡野浩之 永隈和代 長田嘉造 早川浩

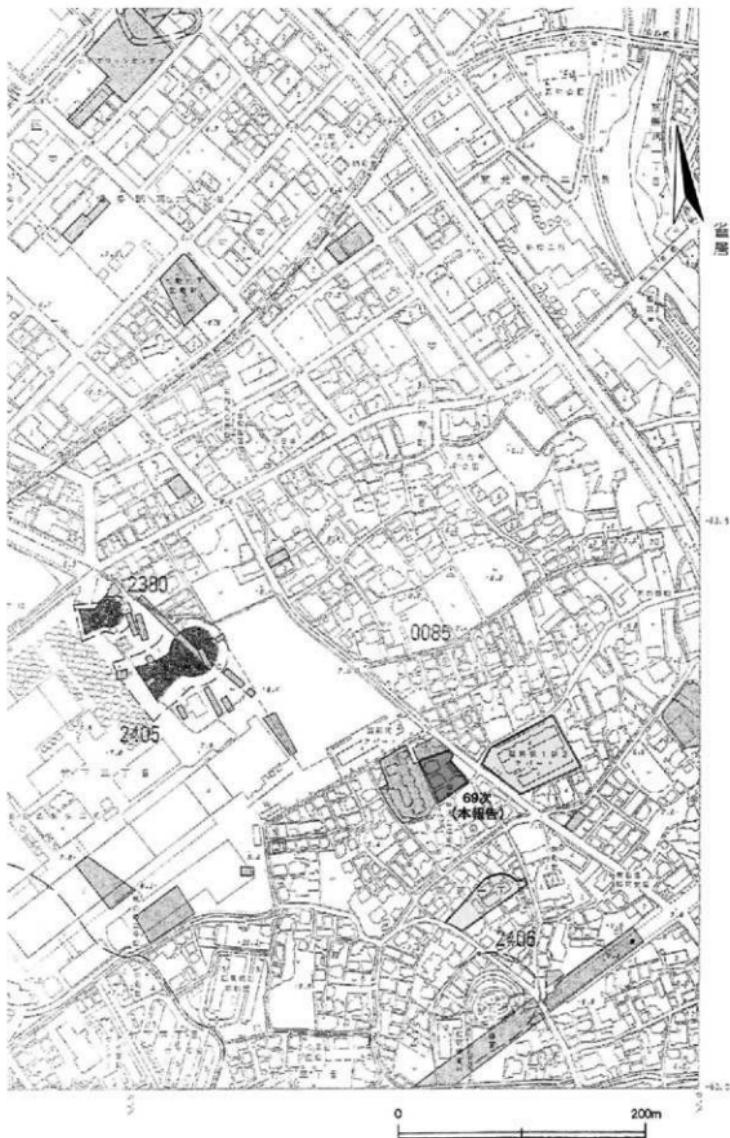
吉田清 宮崎タマ子 山内恵 沼田昌信 吉田昌敏 川崎良 藤本成邦 野村道夫

中野裕子 浦伸英 園部保寿 大浦成子 井口麻美 川上藤幸 高橋健治 佐藤信

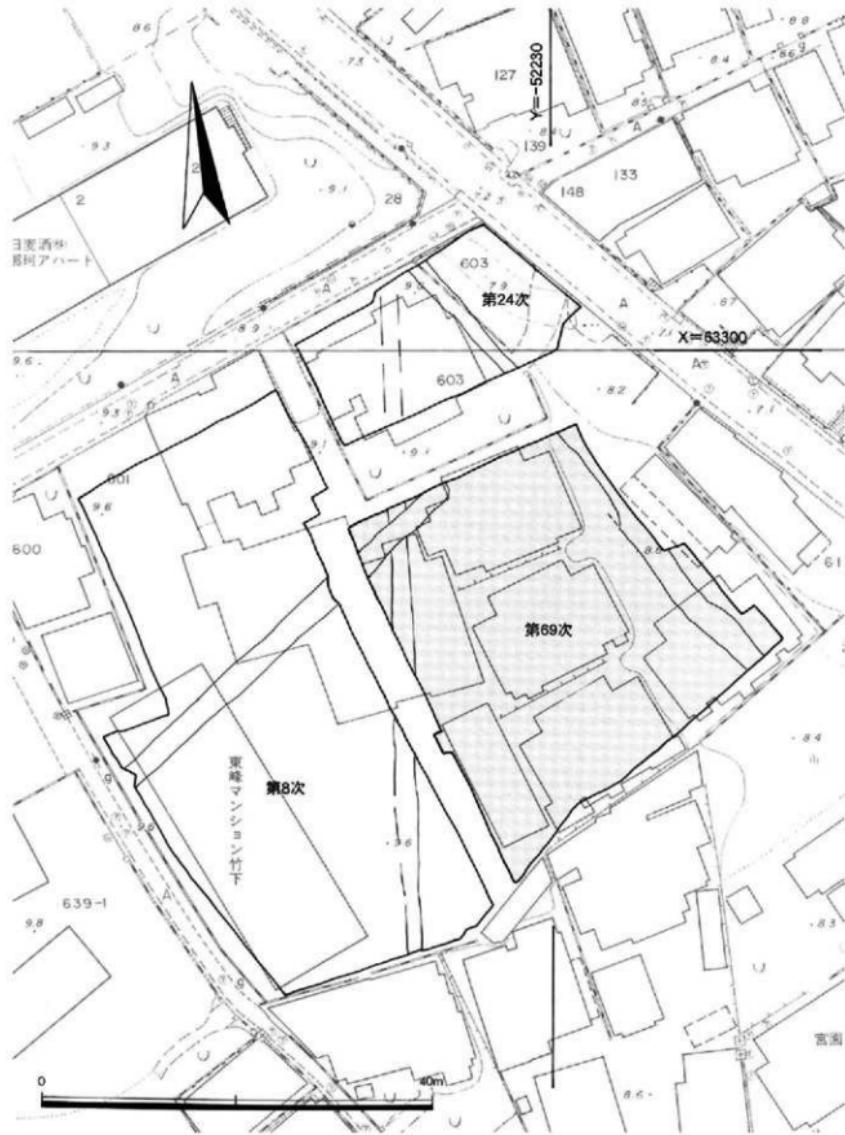
大演菜緒 伊藤健太 坂本真一 坂元雄紀



第1図 調査区位置図1 (1 / 50,000)



第2図 調査区位置図2 (1/4,000)



第3図 調査区位置図 3 (1/500)

II 調査の記録

1 遺跡の立地と周辺の調査

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは丘陵鞍部を挟んで一連の遺跡群を構成するものと考えられ、あわせるとその範囲は南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。遺跡内は現状では宅地開発等により旧地形は失われているが、本来は樹状の複雑なアップダウンを有しているものと考えられる。ここでは第69次調査周辺の調査事例について簡単にまとめておきたい。

本調査地点は比恵・那珂遺跡群が立地する丘陵のほぼ中央部分に位置する。50m南側には那珂川番托井堰から御笠川を結ぶ水路が流れている。この水路は丘陵を横断して掘削されているが、本来の丘陵鞍部を利用して造られているものと考えられ、現状で高位面との比高差2m以上を測る。この鞍部内で行われた第58次調査では、八女粘土が露出する丘陵低位部に少數であるが弥生時代中期の井戸のほか土坑・建物・樅状遺構等が検出されている。また遺構面直上には包含層が形成され弥生時代～中世の遺物が多く出土している。中でも弥生時代中期後半及び飛鳥時代の遺物が主体を占めている。またこの鞍部を隔てて更に南側には古式の前方後円墳である那珂八幡古墳が調査地点から150mの所に位置している。那珂八幡古墳周辺の調査では弥生時代後期及び古墳時代後期の生活遺構・古墳時代前期の方形周溝墓群、7・8世紀代の官衙関連と考えられる掘立柱建物・溝の遺構及び瓦・硯等の遺物が確認されている。このうち7世紀後半～9世紀初頭に位置付けられ、ほぼ真北の主軸をとって直進する溝は前述の丘陵鞍部を横断して、第8次と本調査地点で延伸部分が確認されている。更に調査地点東側に隣接して、丘陵の継続方向に切り通しとなる旧道が延びている。丁度調査地点周辺が最も比高差が著しく2m程を測る。旧道を挟んで相対する第67次調査地点では落ち込みは確認されておらず、切り通しの幅は10m強となろう。現状ではこの部分に関する掘削時期・旧地形等は不明である。この第67次調査では弥生時代は前期後半～中期中頃の環濠、前期の貯蔵穴14基以上、環濠掘削以前の土坑墓8基、環濠埋没以後の造墓となる要棺墓17基を確認している。古墳時代では竪穴住居跡12棟、掘立柱建物3棟の他土坑・溝・ピット等を確認しており、後期の遺構が大半を占める。

本調査地点が位置する、前述の鞍部と切り通しで画された丘陵高所部分はまとまった調査区が比較的疎らな地点である。北側に位置するアサヒビル工場内の調査では弥生時代前期～中世に至る遺構・遺物を確認している。弥生時代には竪穴住居跡・井戸・貯蔵穴等の生活遺構及び大規模な要棺墓群が確認されている。この後古墳時代前期を経て、古墳時代後期には東光寺剣塚古墳・剣塚北古墳が築造されている。なお剣塚古墳は本調査地点から北西200mの地点に位置している。また古墳築造以降竪穴住居跡群、掘立柱建物群（大型のものを含む）が形成される。更に古代には建物・井戸が確認され、円面硯・初期貿易陶磁器・瓦などが出土しており、周辺に官衙的施設の展開が想定できる。また本地点の西側に隣接する第8次調査では本調査地点と一連の遺構群が確認されている。ここでは弥生時代中期後半～末の竪穴住居跡・掘立柱建物が調査の主体となっている。特に青銅器鑄造関連の取瓶・中子・鋳型状石製品等が注目される。古墳時代後期には竪穴住居跡3棟が検出される。また飛鳥～奈良時代では前述の真北方位の溝・井戸があり、瓦と共に井戸からは「寺」と刻書された土器器坏が出土している。中世には大溝が開削されている。調査地点の字名は「堀ノ内」であり、中世居館の可能性も考えられる。北側に隣接する第24次調査では弥生時代中期後半の井戸及び中世後半の溝が確認されている。

2 調査の経過

調査地点は調査以前には宅地として使用されており標高約9m前後を測るほぼ平坦な敷地であった。1の項で述べたように調査地点南側は丘陵鞍部低位面となり、東側は丘陵を南北に継続する切り通しとなっている。共に調査地点からの比高差は約2m以上である。

調査は重機による表土除去から行ったが、廃土を場内処理する必要から対象地の南半部分の調査を行った後、北半部分の調査を行うこととした。遺構は表土直下の鳥栖ローム層上面で検出した。遺構面標高は調査区北西隅がもっとも高く8.8mを測る。南端が8.5mで緩やかに傾斜し、東側は7.8mで切り通しに向かって傾斜が比較的強くなっている。

検出遺構は掘立柱建物、竪穴住居跡、溝、土坑、井戸、ピットがあり、時期的には弥生時代中期後半～中世後半までの遺構・遺物を検出している。大まかに傾向をとると、弥生時代中期後半には1間×2間の掘立柱建物で構成されていた集落が、弥生時代後期にはベッド状遺構を有する竪穴住居跡群にかわる。この時期の住居貼り床内土坑から内行花文鏡の破鏡が1個体出土している。この後弥生時代終末～古墳時代中期までは遺物もほとんど見られない。古墳時代後期になると竈を有し4本主柱による竪穴住居跡が調査区北側に偏って確認される。古代に属する遺構は調査区西隅の溝(S D036)のみで、丘陵をほぼ真北に継続する溝である。出土遺物には瓦が含まれており注目される。またS E 038が平安時代前期に位置付けられる。中世に位置付けられるのはS D002、S D037である。S D 037は調査区北端中央部分で立ち上がり、居宅を区画する溝の可能性が考えられる。なお調査区内に中世に位置付けられるピット・土坑等はほとんど認められない。

3 調査の記録

1) 掘立柱建物 (S B)

本調査では9棟の掘立柱建物を確認している。この他にも掘り方のしっかりした柱穴も検出しているが、建物としてまとめきれていない。また土坑の項で報告するものの中にも建物を構成していた柱穴の可能性を有する遺構がある。時期的には竪穴住居跡に先行する弥生時代中期後半に位置付けられる1間×2間の建物が主体となっている。

S B018 (第6図)

調査区東側で検出する1間×2間の建物である。西側コーナーの柱穴をS K017によって削平されている。主軸方位をN-55°-Eにとり、建物規模は梁行3.1m、桁行4.7mで身合面積は約14.57m²を測る。柱穴掘り方は一辺50～70cmの(長)方形で埋土はおむね黒色土を主体とする。掘り方内に柱痕跡は認められなかった。出土遺物はいずれも小破片のみで図示し得るのは1点のみである。弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第6図 1) 1はS P138出土遺物である。甕の口縁部破片である。端部を欠失するが断面鋸形を呈し、上部はほぼ水平となる。胸部は外面縦刷毛、内面ナデを行う。

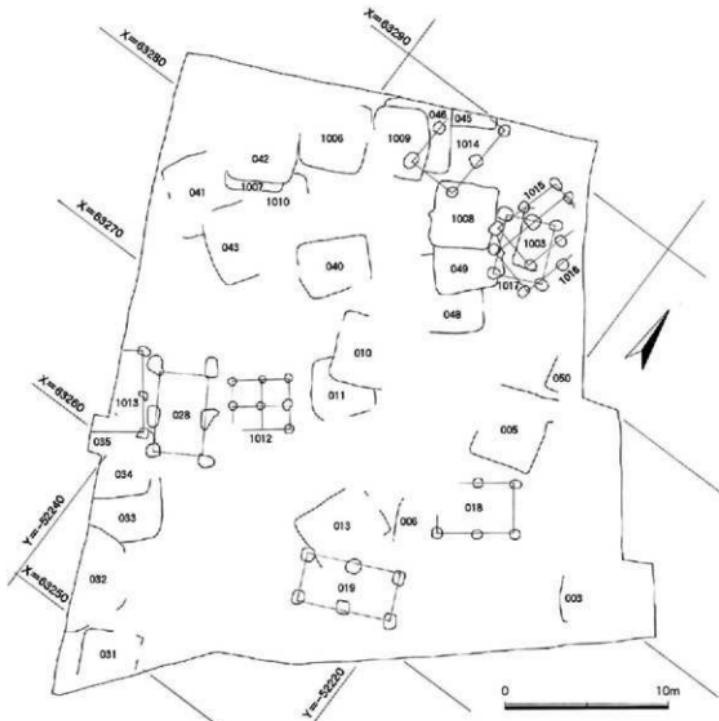
S B019 (第6図)

調査区南東端で検出する1間×2間の建物である。調査時にはS C013を切る遺構と考えたが、遺物整理の過程で切り合いが逆であることが判明した。主軸方位をN-70°-Eにとり、建物規模は梁行3m、桁行5.8mで身合面積は約17.4m²を測る。柱穴掘り方は一辺80～95cmの(長)方形で埋土は黒色土が主体となる。確認できた柱痕跡は径20cm程度である。出土遺物は弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第6図 2～6) 2～4はS P148出土の甕口縁部である。いずれも断面鋸形を呈し、



第4図 調査区全体図 (1/200)



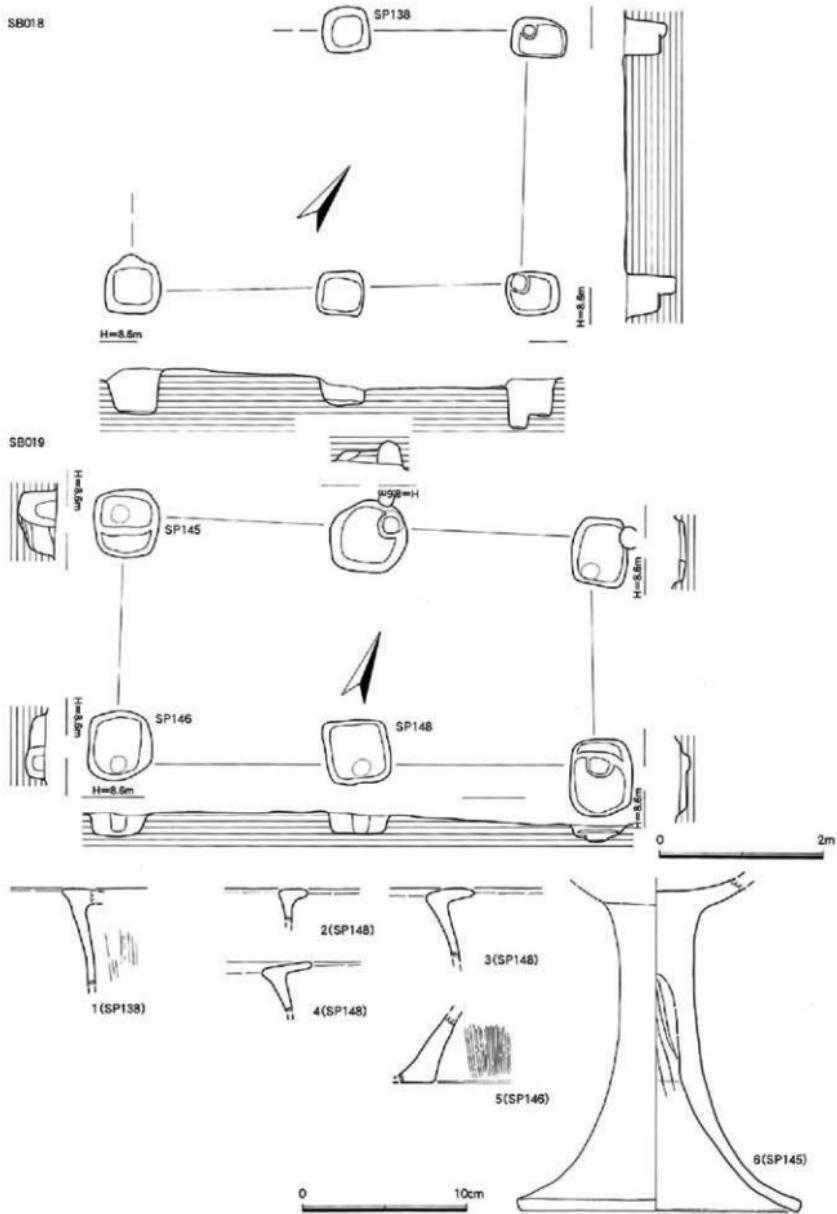
第5図 挿立柱建物・竪穴住居跡配置図 (1/300)

上部はほぼ水平もしくはやや内傾する。調整は磨滅のため不明瞭である。5はS P 146出土甕底部である。外面に縦刷毛を施す。6はS P 145出土高坏である。坏部を欠失するが筒部内面にしづり痕が残り、裾はラッパ状に広がる。器面は磨滅が著しい。

S B028 (第7図)

調査区南西端で検出する1間×2間の建物である。主軸方位をN-28°-Wにとり、建物規模は梁行3.1m、桁行4.9mで身舎面積は約15.19m²を測る。柱穴掘り方は基本的に(長)方形で、確認できた柱痕跡は径25~30cmを測る。また土層から版築状の埋土が観察できる。出土遺物から弥生時代中期後半~後期に位置付けられる。

出土遺物 (第8図) 7は器台の裾部分破片である。内外面なでによる調整を行なう。8~10は甕の口縁部である。8は断面勧形を呈する。9・10は断面を逆L字に屈曲させる。いずれも口縁上面は水平となっている。外面には縦刷毛を行なう。11は平底の甕底部である。外面に縦刷毛を施す。12は蓋である。器面の磨滅が進んでおり調整は不明瞭である。13は胴部破片である。内外面共に縦



第6図 SB018・019及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

026

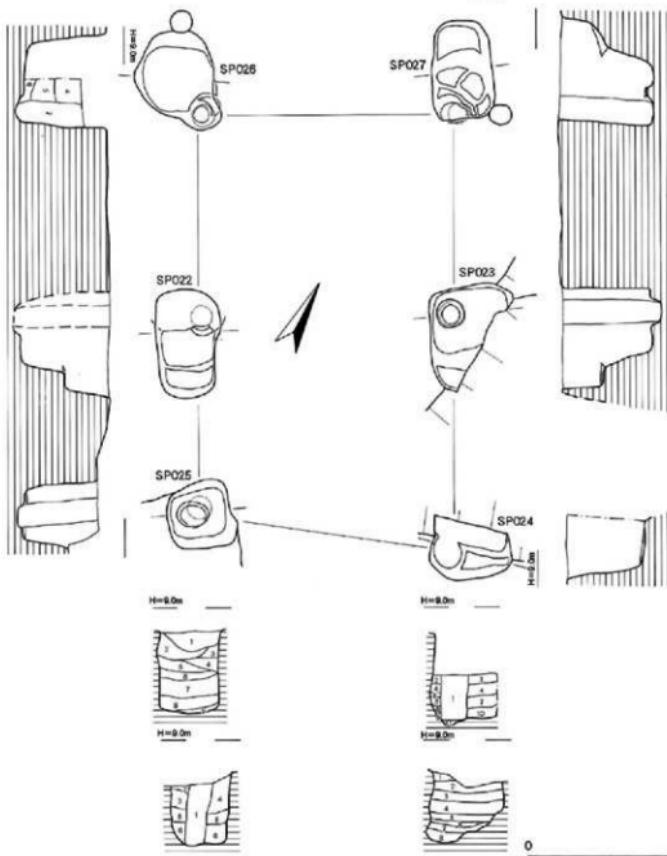
- 暗褐色土(ピット)
- ロームブロックを含む暗褐色土
- ロームブロックを含む黒褐色土
- 暗褐色土
(あまり混合せず均質である)
- 黒褐色土
- 黒褐色土
- 暗褐色土(柱状)



027

- 暗褐色土
- 黒褐色土と黒褐色土混合(1:1)
- 黒褐色土
- 暗褐色土
- 暗褐色土

H=0.5m



028

- 柱状ローム小粒を含む黒褐色土
- 暗褐色土
- 黒褐色土
- 黄白色土
- 今や蒸発した黒褐色土
- 暗褐色土
- 黒褐色土
- 暗褐色土
- 暗褐色土
- 黒褐色土

023

- 暗褐色土(柱状)
- 黒褐色土
- 黄白色土と黒褐色土混合(2:1)
- 黄白色土と黒褐色土混合(3:1)
- 暗褐色土
- 暗褐色土
- 暗褐色土
- 黄白色土
- 黄白色土
- 黄白色土
- 黄白色土

H=0.5m

024

- 黒褐色土
- 黒褐色土(軟性漂土)
- 黄白色土と黒褐色土混合(2:1)
- 黄白色土と黒褐色土混合(1:2)
- 暗褐色土
- 暗褐色土
- 黄白色土
- 黄白色土
- 黄白色土

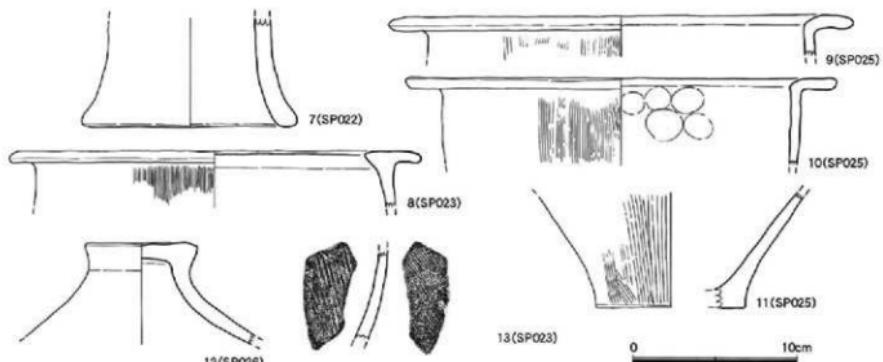
H=0.5m

025

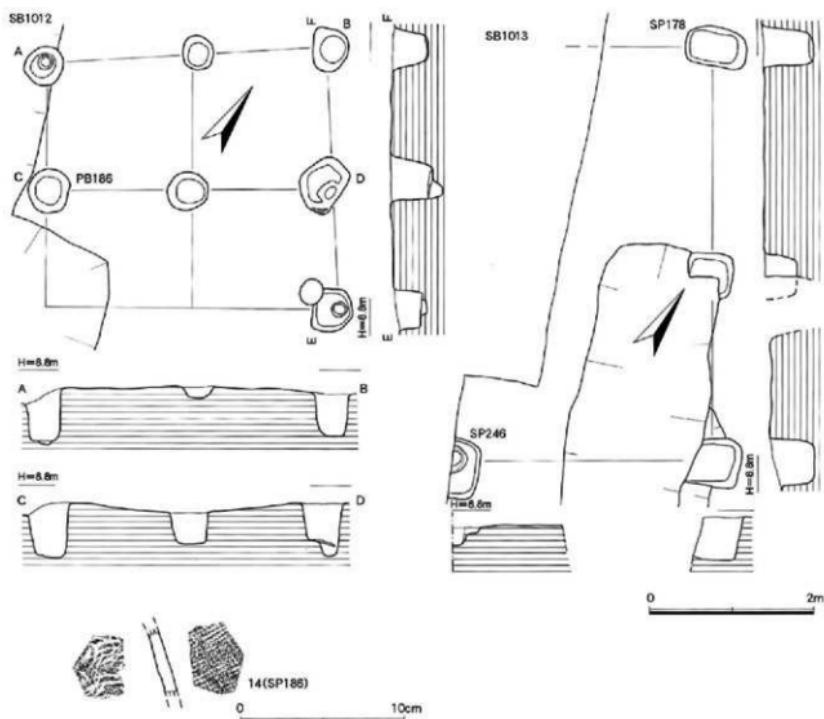
- 暗褐色土(柱状)
- 暗褐色土にロームブロック混合
- 暗褐色土
- 暗褐色土
- 暗褐色土と黄褐色土混合(1:2)
- 今や蒸発した黒褐色土
- 黒褐色土

H=0.5m

第7図 S B028実測図 (1/60)



第8図 S B028出土遺物実測図(1/3)



第9図 S B1012・1013及び出土遺物実測図(1/60, 1/3)

刷毛を行なう。

S B1012 (第9図)

調査区南東側で検出する2間×2間の総柱建物である。本調査地点で唯一の総柱建物で、柱掘り方の形状も円形を主体としており、他の建物とは異なっている。南側柱を擾乱で欠失し、その東側の柱穴はおそらく掘り込みが浅いものと考えられ検出できていない。主軸方位をN-32°-Wにとり、建物規模は梁行3m、桁行3.5mで身舎面積は約10.5m²を測る。柱穴掘り方は径50cm程度の円形を主体とする。埋土は黒褐色～暗褐色土である。出土遺物に須恵器の破片が含まれており、埋土の特徴などから古墳時代後期に位置付けられるものと考えられる。

出土遺物 (第9図 14) 14は須恵器壺の胸部破片である。外面には擬格子の叩き痕跡、内面には青海波文の當て具痕が残る。

S B1013 (第9図)

調査区南東端で検出する。西側を調査区外に延ばし不明確な点もあるが、1間×2間の建物と考えられる。主軸方位をN-33°-Wにとり、建物規模は梁行3.1m、桁行5.1mで身舎面積は約15.81m²を測る。柱穴掘り方は一辺50～60cmの方形で埋土は黒色土が主体となる。確認できた柱痕跡は径30cm程度である。出土遺物小破片のみで図化し得ないが、S P178及びS P246からは須恵器の小破片が出土しているが、埋土・掘り方形状などから須恵器は混入の可能性が高く、弥生時代中期後半に位置付けられる建物の一群に含まれる可能性が高いものと考えられる。

S B1014 (第10図)

調査区北端で検出する。北側を調査区外に延ばし不明確となるが、1間×2間の建物になるとを考えられる。主軸方位をN-9°-Eにとり、建物規模は梁行3.1m、桁行5mで身舎面積は約15.5m²を測る。柱穴掘り方は一辺60～80cmの方形で埋土は黒色土が主体となる。柱痕跡は確認できていない。また豎穴住居跡と切りあう柱穴はいずれも住居埋土除去後に検出している。出土遺物から弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第10図 15～17) 15は甕口縁部である。断面逆L字状を呈し、上面は内傾する。16・17は底部破片である。共に平底で調整は摩滅のため観察できない。

S B1015 (第10図)

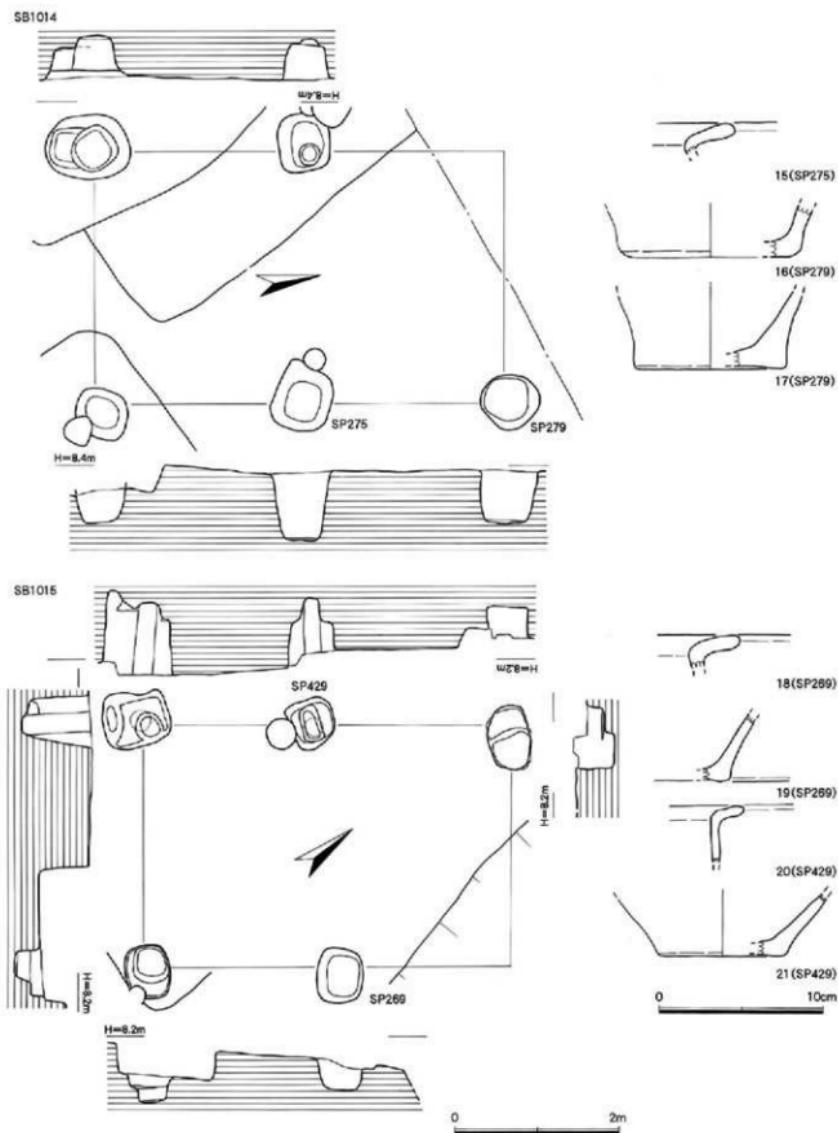
調査区北端で検出する。北側をSD001で削平されるが、1間×2間の建物になるとを考えられる。主軸方位をN-16°-Eにとり、建物規模は梁行3m、桁行4.5mで身舎面積は約13.5m²を測る。柱穴掘り方は一辺50～80cmの（長）方形で埋土は黒色土が主体となる。柱痕跡は確認できたもので径25cmである。S B1016・1017と切りあうが先後関係は不明である。出土遺物から弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第10図 18～21) 18・20は断面逆L字を呈する甕口縁部である。上面はいずれも内傾する。19・21は平底の底部である。調整は摩滅のため不明である。

S B1016 (第11図)

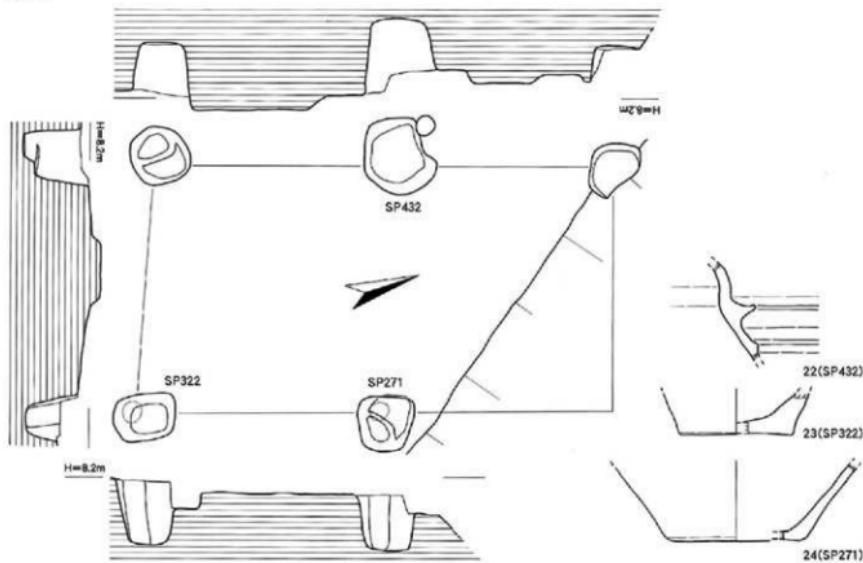
調査区北端で検出する。北側をSD001で削平されるが、1間×2間の建物と考えられる。主軸方位をN-18°-EにとりS B1015とほぼ同じである。建物規模は梁行3m、桁行5.6mで身舎面積は約16.8m²を測る。柱穴掘り方は一辺70cm程度の（長）方形で埋土は黒色土が主体となる。柱痕跡は確認できたもので径25cmである。出土遺物から弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第11図 22～24) 22は瓢形土器の破片である。摩滅のため顔料はほとんどが剥落している。23・24は平底底部の破片である。

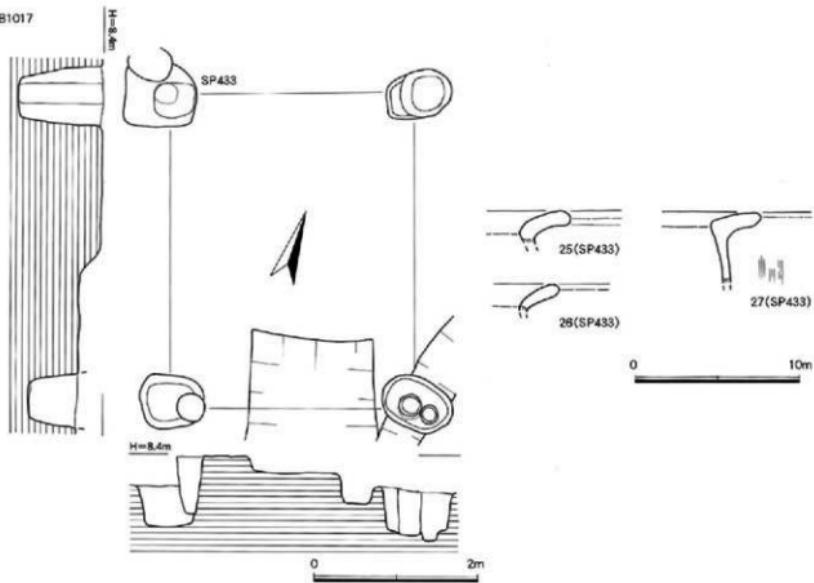


第10図 S B1014・1015及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

SB1016



SB1017



第11図 SB1016・1017及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

S B1017 (第11図)

調査区北端で検出する1間×1間の建物と考えられる。主軸方位をN-20°-Wにとり、建物規模は梁行3m、桁行3.8mで身舎面積は約11.4m²を測る。柱穴掘り方は円形・方形・長方形と不ぞろいである。埋土は黒色土が主体となる。柱痕跡は確認できたもので径30cm程度である。出土遺物は弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第11図 25~27) いずれも甕の口縁部である。断面は逆L字を呈し、27は内側にわずかに張り出す筋形である。また27には外面上に縦刷毛が残る。

S C003 (第12図)

調査区南東隅で検出する。大半をS D001によって削平されており、西壁が残存するのみで主柱穴等は不明である。平面の残存南北長は3m弱で、検出面からの深さ10~20cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は少量で図示し得るものはなく、須恵器は出土していない。

S C005 (第12図)

調査区東側で検出する。配水管等の搅乱及びS D001による削平が進んでいる。3.9×4.7mの平面長方形を呈し、検出面から床面までの深さ25cmを測る。S P135・S P114の2本主柱である。また北側主柱寄り床面に厚さ3cm程の被熱酸化帯が残されており、この部分が炉跡に当たると考えられる。またS P114東側壁際に幅1m、高さ5cm程度のベッド状遺構が残る。埋土は暗褐色土でベッド状遺構は汚れた赤褐色土による盛り土である。また北側短辺添いに幅1m前後の掘り込みが東側屋外に伸びている。埋土は上層ロームブロックを含む黒褐色土、下層汚れた赤褐色土である。S D001の削平を受けており東側端部の状態が不明であるが、掘り方上面に貼り床面を作るように下層土を盛り、底面を階段状に整形している様である。本来住居の東側が斜面となっていると考えられ、この部分から住居内に入るための進入口とも考えられる。またS P135及び炉跡周辺を除いて、貼り床が行われている。西壁・南壁は配水管搅乱のため貼り床土により住居ラインが認定できた。出土遺物は少量・小破片で摩滅が進行している。須恵器破片が混入しており明確な時期を決定しがたいが、S P137出土遺物等より古墳時代初頭~前期を考えておきたい。

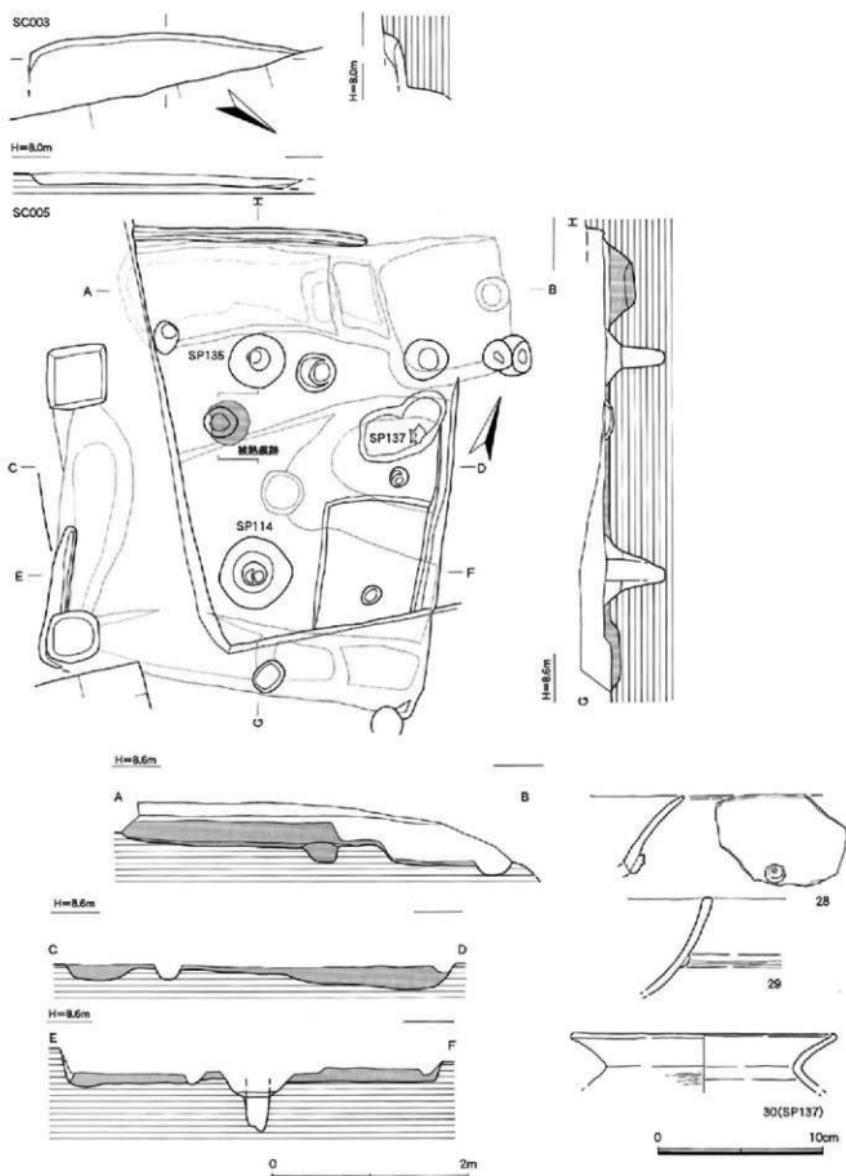
出土遺物 (第12図) 28・29は住居埋土中からの出土である。28は二重口鉢の口縁部破片である。円形文の貼付が行われている。明黄褐色を呈し、胎土は少量の石英砂粒を含むが、全体に精良である。29は鉢であろうか。口縁下に突起を1条はりつける。30はS P137出土の口縁部破片である。摩滅が進んでいるため調整は不明瞭であるが、端部は僅かにつまみ上げが残る。

S C006 (第13図)

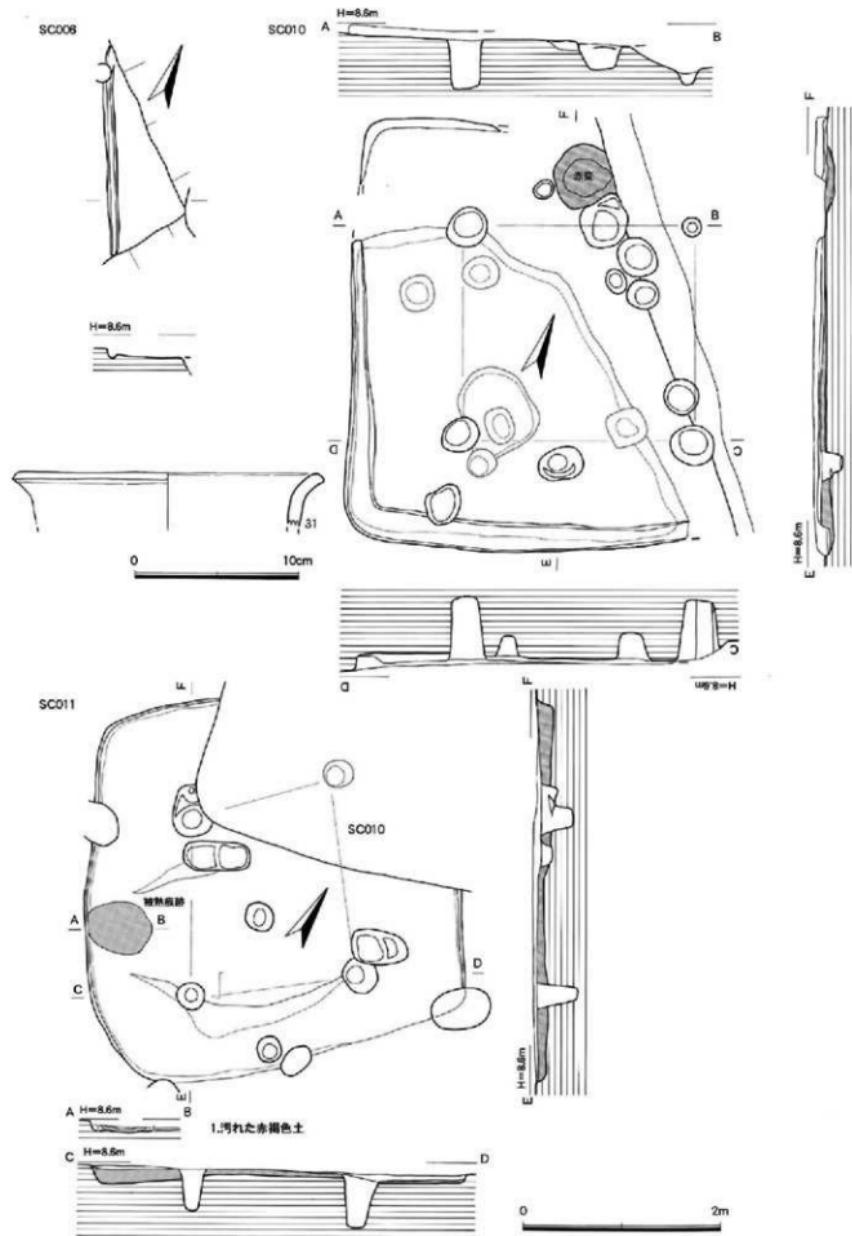
調査区南側で検出する。S D009による搅乱とこれより東側では遺構面が東に傾斜しているため、竪穴住居跡の西壁及び塗溝の一部のみの検出にとどまり、主柱穴も不明である。遺構面からの深さは10cmである。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土である。出土遺物には須恵器は含まれていないが、小破片のみで時期は不明である。

S C010 (第13図)

調査区中央部分で検出する。切りあい関係からS C011→S C010の関係となる。搅乱により東壁



第12図 SC003・005及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第13図 SC 006・010・011及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

を欠失するが、およそ一辺4.5mの方形を呈する。4本主柱で北壁添いに竈を有する。竈は基底面のみで、径60cmの範囲で床面が被熱赤変している。赤変部分の中央が僅かに(3cm)窪んでおり、ここに壁体・焼土が堆積している。床面の南西側2/3程に暗褐色土と赤褐色土の混合土による貼り床が行われている。土師器・須恵器破片が少量出土している。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物(第13図) 図示し得たのは31のみである。土師器甕の口縁部破片である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

S C011(第13図)

調査区中央部分で検出する。切りあい関係からS C011→S C010の関係となる。削平により貼り床部分が露出する部分もあるがおよそ一辺3.8mの方形を呈する。残存状態は不良で、検出面から床面までの深さは5cm弱である。4本主柱で西壁添いに竈を有する。竈はS C010同様基底面のみで本体は全て失われており、径60cmの範囲で床面が被熱赤変する。また床面全体に汚れた赤褐色土による貼り床が行われる。土師器・須恵器破片が少量出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

S C013(第14図)

調査区南側で確認する。東壁を搅乱溝に削平されているが、平面3.7×4.8mの長方形を呈し検出面から床面までの深さは15cm弱である。埋土は暗褐色土である。S P155・153の2本主柱と考えられ、北側には汚れた赤褐色土によりコ字状のベッド状造構を作り出す。S P156は埋土に焼土・炭化物は含まれないが、炉跡と考えられる。またS P157は床面からの深さ80cmを測る。住居の東壁添い中央に位置しており、これに伴う柱穴と考えられる。埋土中からは須恵器蓋壺・高壺、土師器甕・把手等が出土している。またS P156から叩きを有する土師器甕も出土している。造構の切り合い状況等から遺物の混入量はあまり多くなるとは考えられない。このことから本造構は小田編年Ⅲb～Ⅳ期に位置付けられる竪穴住居跡と考えられ、S B019との切り合は逆転する。

出土遺物(第14図) 32～38は住居埋土出土である。32～36は須恵器である。32～34は蓋壺である。比較的大口径で、外面にはヘラ削りが行われる。35は甕である。端部はコ字状を呈し、胴部内外面に叩き及び當て具痕が残る。36は高壺脚部である。37・38は土師器把手である。38は上面に焼成前に切れ込みを入れる。39はS P156出土甕である。内面には當て具痕跡が明瞭に残る。

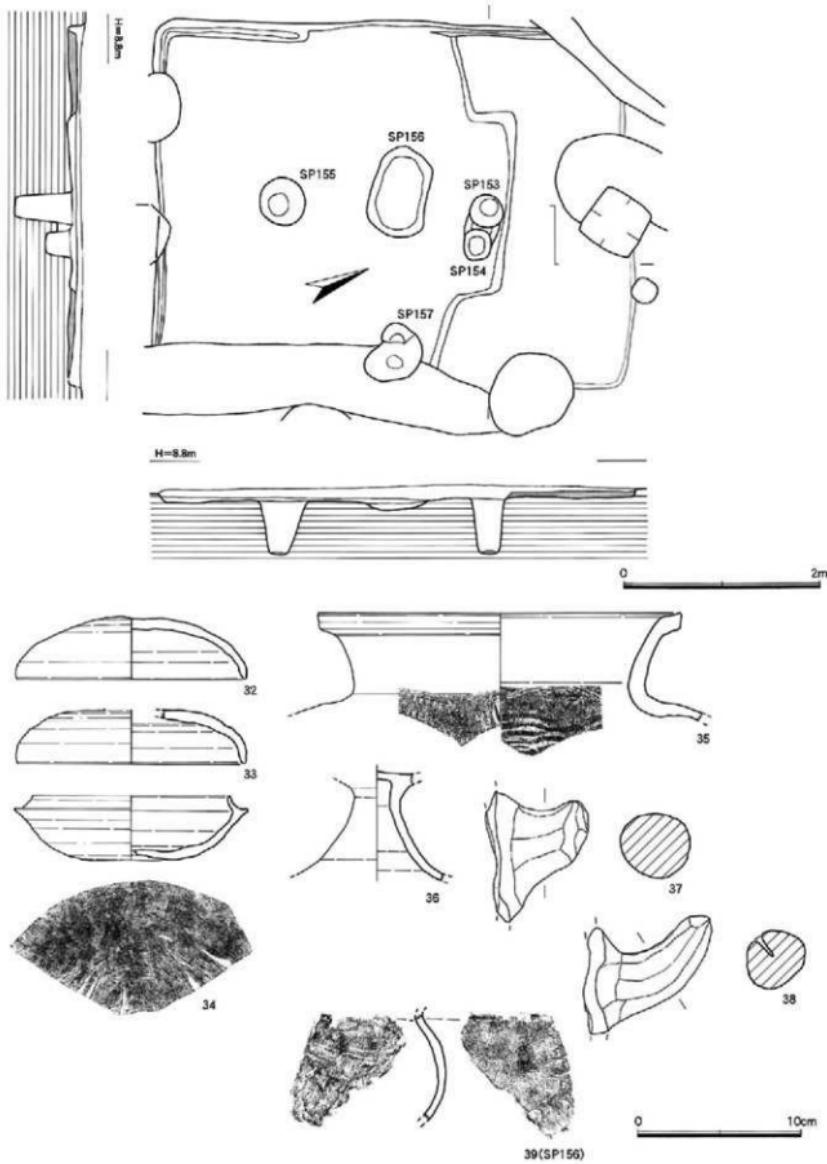
S C031(第15図)

調査区南隅で検出する。造構面上では特に南半部分が大きく削平されていると共にSD029に切られている。貼り床状の掘り込みから想定して平面3.5×3.6+αmの長方形を呈するものと考えられる。埋土は黒褐色である。搅乱溝床面から厚さ3cm程度の被熱痕跡が確認され、この脇から横倒しとなった壺が1個体出土している。3方向の壁際に土坑上の掘り込みを有し、ロームブロックを含む暗褐色土による貼り床が行われている。なお前述の被熱痕跡は貼り床土上面に形成されている。出土遺物より西新式に相当する時期であろう。

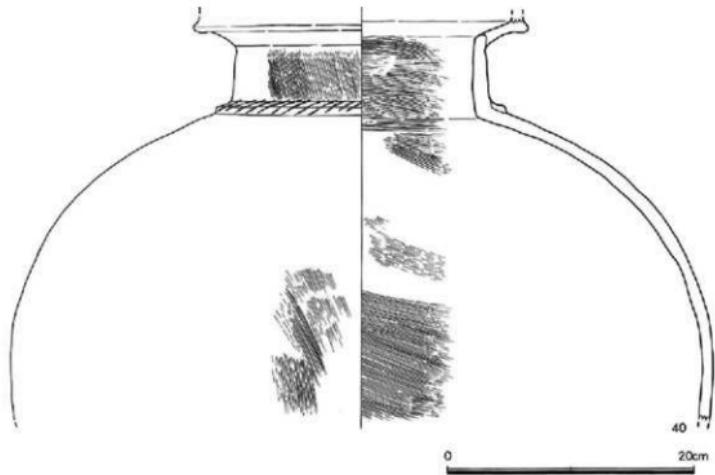
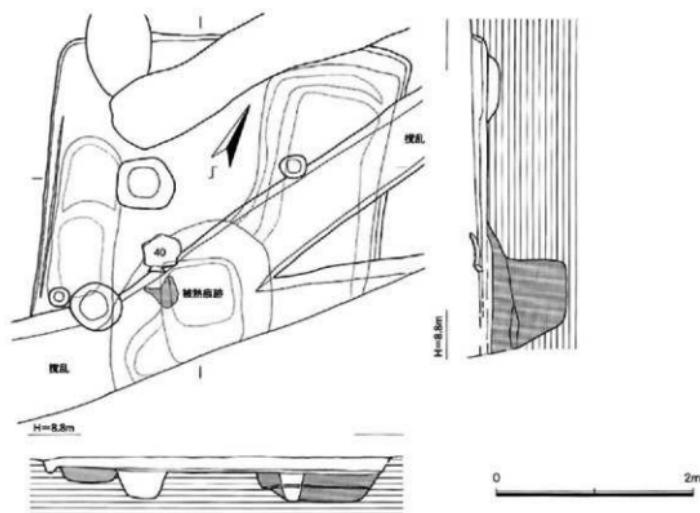
出土遺物(第15図) 40は複合口縁甕である。削平により上半部分しか残っていない。内外面に刷毛目が施される。また胴部と頸部との境には薄帯状の粘土帶が貼付され、刻み目が施される。直立する口縁端部外面から複合部分を貼り付ける。

S C032(第16図)

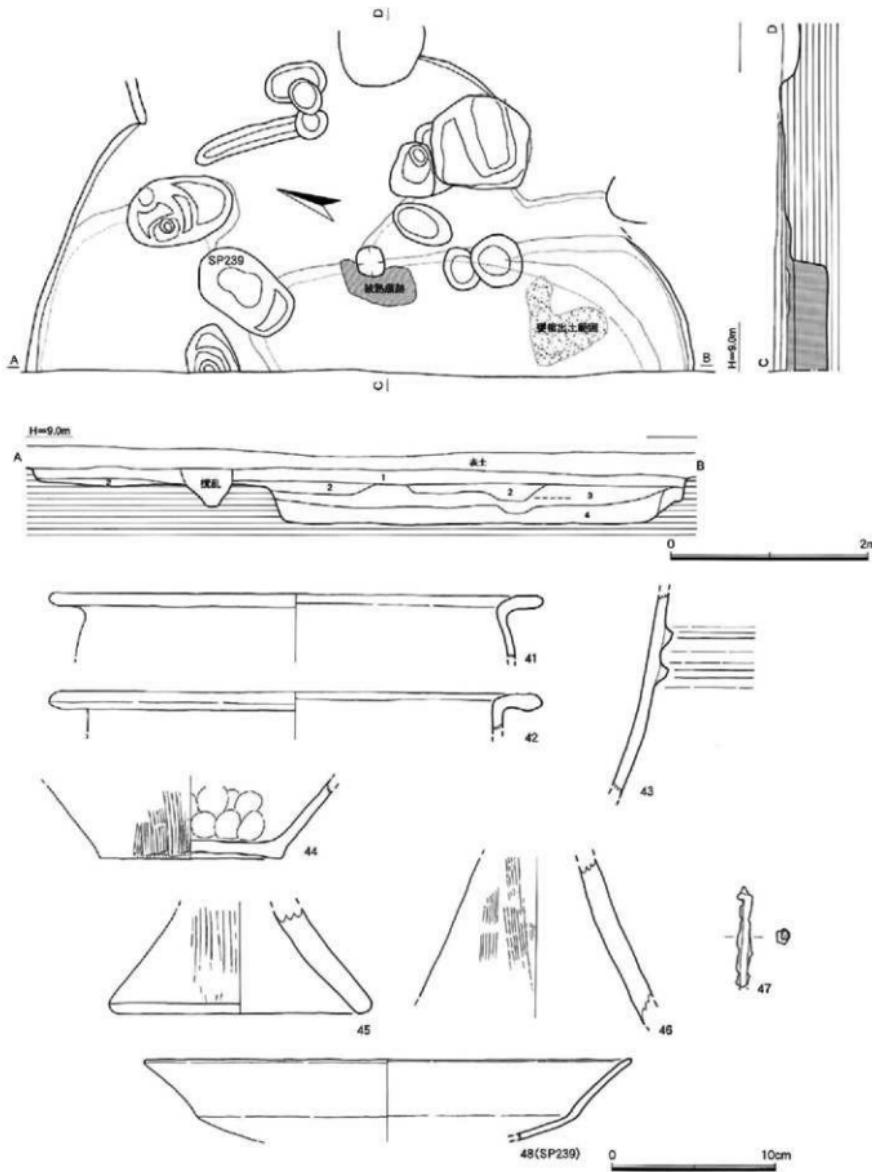
S C031の北側で検出する。西半が調査区外になる上に削平により平面形態が不明瞭であるが、径7m程度の円形を呈するものと考えられる。埋土は1層：暗褐色土、2層：暗褐色土と赤褐色土混合土、3層：黒褐色土(ローム粒を多く含む)、4層：暗黄褐色土で、1層除去後が床面となり、床面上に被熱痕跡が残る。明瞭な主柱は明らかでない。2～3層は貼り床状の埋土であり、3層中から甕



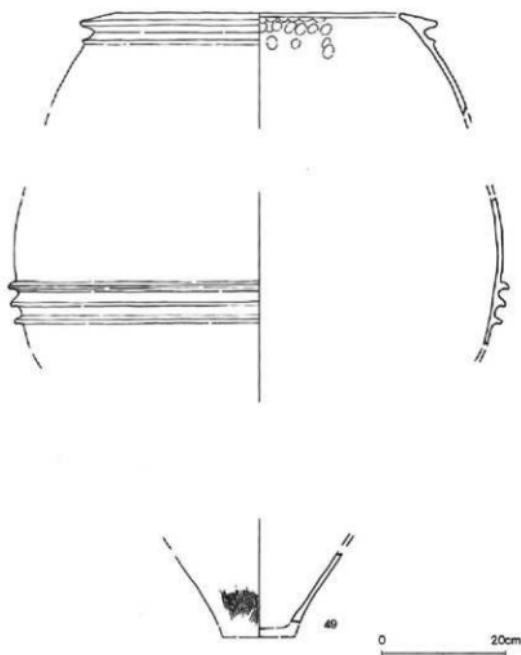
第14図 SC013及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第15図 S C 031及び出土遺物実測図 (1 / 50, 1 / 4)



第16図 S C 032及び出土遺物実測図1 (1/50、1/3)



第17図 S C 032出土遺物実測図 2 (1 / 8)

棺 (49) 破片が敷かれたような状態で出土している（土層図破線レベル）。ピット出土遺物には後期に位置付けられるものも見られるが、中期後半～末の遺物が主体を占めている。

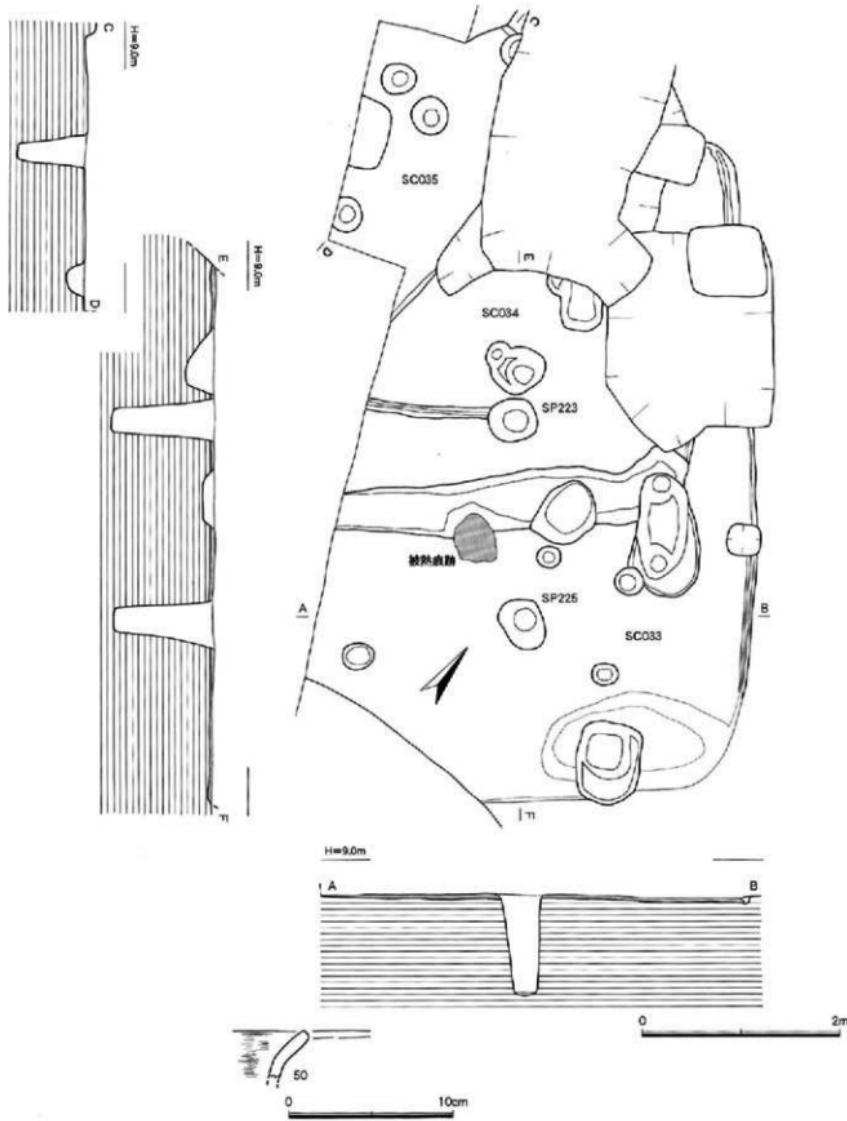
出土遺物 (第16・17図)

41・42は逆L字状を呈する口縁部である。43は胸部破片で断面台形の突帯を2条貼り付ける。44はやや上げ底気味の底部である。外面には縦刷毛を行う。45・46は柵がハ字状に広がる器台である。外面に縦刷毛を行う。47は長さ6cmを測る棒状の鉄製品である。混入の可能性も考えられる。48はS P 239出土の高壺である。屈曲部から短く外反している。49は3層中からまとめて出土した腰棺破片である。出土分布が調査区外に広がっていたものと考えられ、ここでは完形とはなっていない。胸部は丸みを有し、やや腰高の器形に復元できる。胸部に3条の突帯を有する。

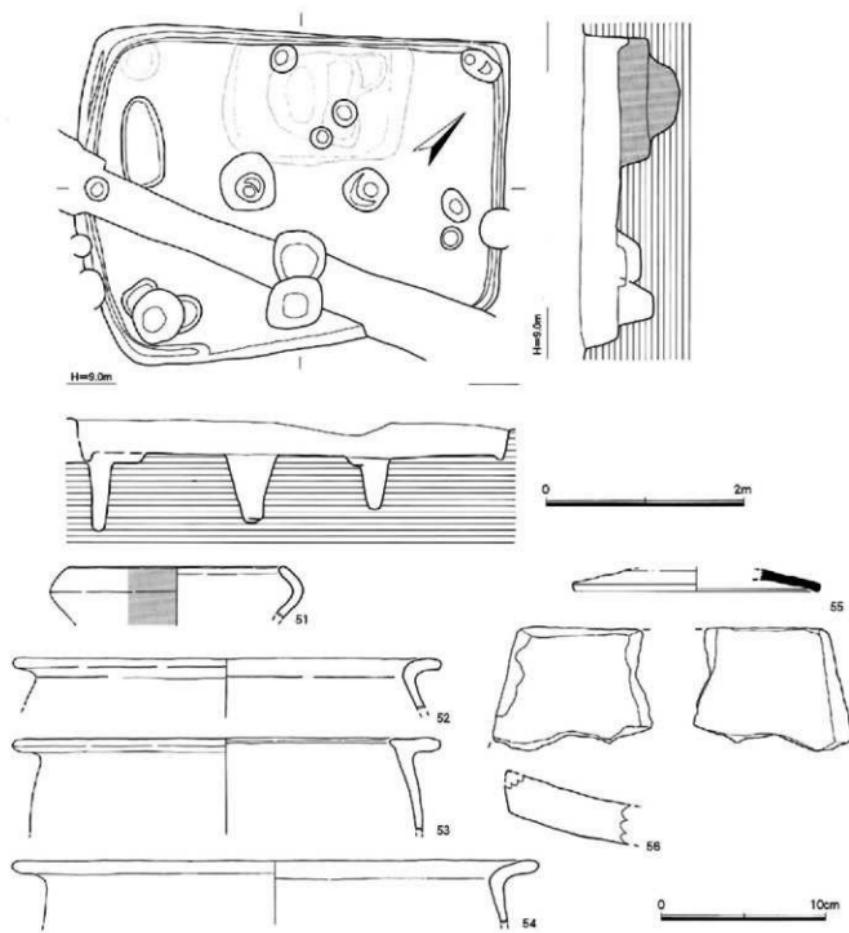
S C 033・034・035 (第18図)

調査区西側壁で検出する。北側が大きく搅乱され、更に削平により遺存状態が悪く形状は不明瞭な点が多い。まずS C 035が北西側に位置する。復元すると（長）方形住居の一部を確認しているものと考えられ、検出面からの深さ10cmを測る。埋土は黒味の強い暗褐色土である。S C 033・034は共に埋土が暗褐色土であるが、削平によりほとんど残っておらず、貼り床状の埋土により住居と認定したものである。S P 223・225が南側のS C 033主柱穴と考え、S P 223南側の幅60cmの溝状掘り込みをS C 034南壁とした。この場合S C 034は南北長4m程度に復元できる。またS C 033は南北長5.5m程度で2本主柱と考えられ、主柱間の床面に被然痕跡が残っている。ただ掘り方のレベルがほとんど変わらないことや、東壁がつながる可能性もあり、この場合主柱位置がやや偏るもの1棟の住居跡となる可能性も残る。出土遺物はいずれも極少量で所属時期は不明瞭である。住居形状等から弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡と考えておきたい。なお切り合い関係は不明である。

出土遺物 (第18図) 50はS C 034埋土中から出土した甕の口縁部破片である。摩滅が進み端部形状等は不明瞭であるが、内面に横方向の刷毛目が残る。



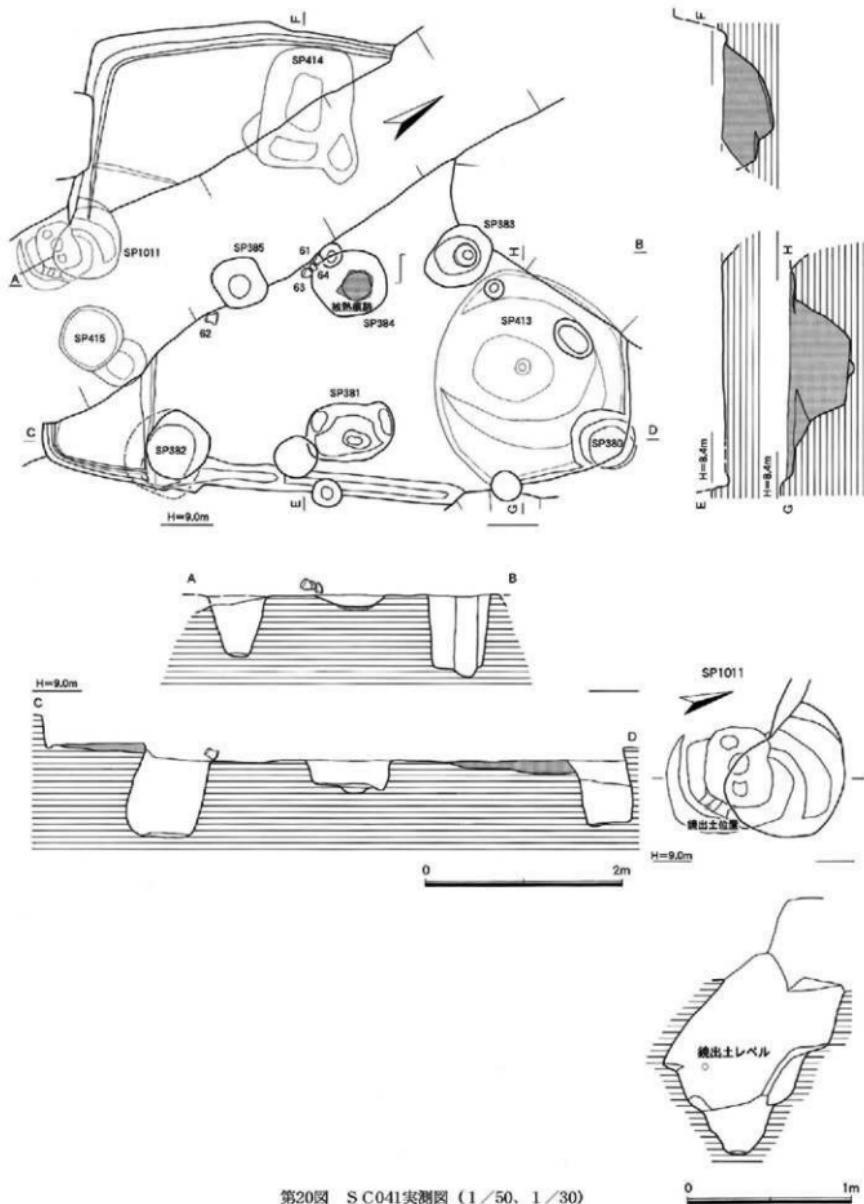
第18図 SC033・034・035及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



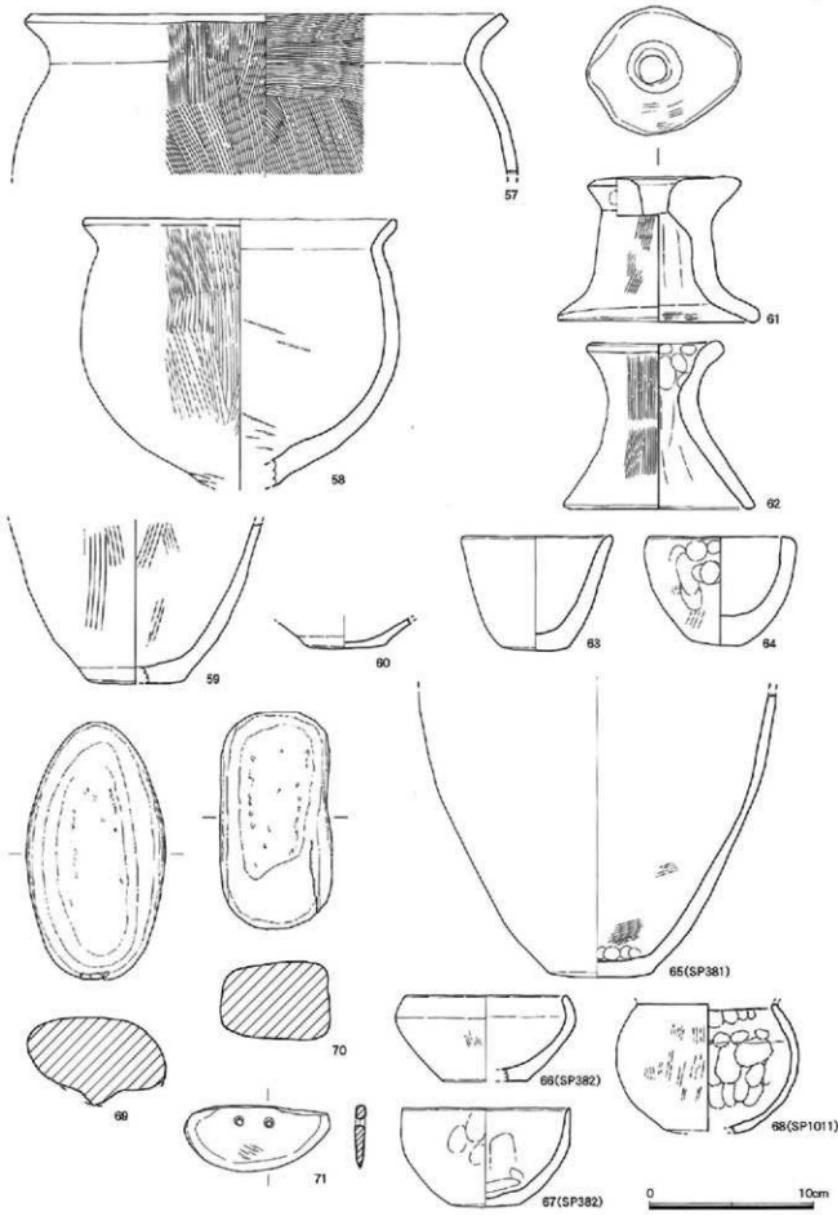
第19図 SC 040及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

SC 040 (第19図)

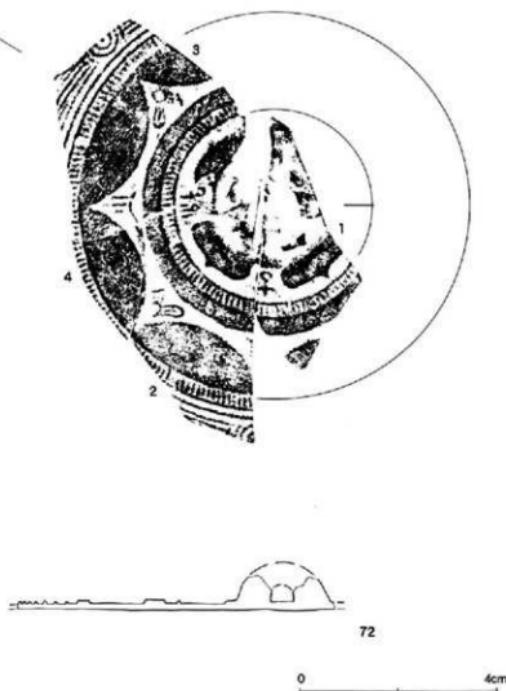
調査区中央北寄りで検出する。平面形はやや歪となるが長軸4.4m、短軸2.8~3.4mを測る略長方形の整穴住居跡である。埋土は黒褐色土で、2本主柱である。壁際3/4程に壁溝を巡らせる。床面



第20図 S C041実測図 (1/50, 1/30)



第21図 S C 041出土遺物実測図 1 (1 / 3)



第22図 SC 041出土遺物実測図2 (1/1)

に被熱痕跡は認められない。北壁添いに長方形土坑が掘削されている。埋土は赤褐色土と黒色土が互層となっており、住居壁溝がこの上面に認められることから、住居使用時にはすでに人為的に埋め立てられていたものと考えられる。遺物の大半は弥生時代中期後半～末に位置付けられるものであるが、須恵器・瓦破片の混入も見られる。

出土遺物（第19図） 51は袋状口縁壺である。剥落が著しいが丹塗りが認められる。52～54の断面はく字～逆L字を呈する壺の口縁部である。53は内面が張り出し鶴状を呈する。55・56は混入と考えられる。55は須恵器蓋、56は平瓦である。瓦は摩滅が著しく調査は不明である。

SC 041 (第20図)

調査区北西部で検出する。SD 036、SC 042・043・1007、SK 039に先行する竪穴住居跡である。

平面 4.8×6 mの長方形を呈し、検出面から床面までの深さ50cmを測る。埋土は検出面から10cm程度は暗褐色土、床面から10cm程度は黒色土、この間はロームブロック混じりの黒褐色土の3層に分かれる。南壁添いに幅1m、高さ15cmのベッド状遺構を有する。これは5cm程度地山を削り出した後に黄褐色土を貼り付けて作っている。S P 383・385の2本主柱で、間に転跡（S P 384）がある。S P 384は底面に焼土が堆積し、この下は地山が被熱赤変している。更にS P 384西脇に器台1個体、椀2個体及びS P 385脇の床面上から器台1個体が完形で出土している。また東壁添いにはS P 380～382が並んでおり、配置より住居に伴う遺構と考えられる。なお他の住居跡に認められるような面的な貼り床は認められないが、床面上にはSP413・414・415・1011が認められる。埋土はいずれも汚れた赤褐色土と黒褐色土混合土（4：1）であり、住居壁面に添うような配置からもこれらの掘り込みは住居に伴うもので、住居使用時には埋め戻されたものと考えられる。この中でS P 1011より雲雷文内行花文鏡が1面出土している。掘り込みは南壁際中央部に位置し、上面70～80cmの円形を呈し、底面は南方向に抉り込むように段状に掘り下げられている。鏡は掘り込み中ほどから鏡面を上にした状態で埋土中より出土している。出土時にはすでに3片に割れた状態であった。埋土の全量を水洗したが外区部分の出土は見られず、廃棄時にすでに外周部分は削り取られていたと考えられる。S P 1011は当初掘り方の形状等から壺枠の抜き跡等の可能性も考えたが、関連遺物が見られないことや、住居内配置、埋土等から住居に伴い削除された掘り込みであり、使用時には人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物から弥生時代後期中頃の遺構と考えられる。

出土遺物（第21・22図） 57・58はく字状の口縁部を呈する甕である。57の端面は横ナデによりやや座んでいる。内外面全体に刷毛目を施す。58は外面綱刷毛、内面は板状工具によるナデを行う。外底面には叩き痕が残る。59・60は僅かにレンズ状を呈する底部である。59は内外面刷毛目が残る。60は内外面ナデであろうか。61～64は床面上から出土した完形品である。61・62は器台である。外面には綱刷毛が行われる。63・64は椀である。65はS P 381出土の甕下半部である。2次的な焼成を強く受け外面は剥落が進んでいる。内面に僅かに横刷毛が残る。66・67はS P 382出土の椀である。66は平底の精製品である。痕跡的に綱刷毛が残る。67は指ナデによる。68はS P 1011出土の小型甕である。外面中位には綱刷毛が残り、下半は板状工具によるナデを行う。底部は僅かにレンズ状を呈する。69～71は住居埋土出土の石製品である。69は玄武岩製で表面に赤褐色土が付着する。70は花崗岩製の擦り石。71は石包丁で孔中心間隔は1.7cmである。

鏡（72） 住居跡S C041内の土壤、S P 1011より出土した漢鏡である。内区部分の破片であるが、内行花文鏡であることが知られる。鉢座と内区の一部が残っているにすぎない。鏡は4片に分かれている。図のように、「子」の字を正位置に置いた状態で、大破片を右回りに1から3とし、破片2と3に接合する小片を破片4とする。

まず遺存状況と文様構成について述べる。鉢は基部しか残っていない。鉢座は高い四葉座鉢である。四葉の間に「子」「孫」の2文字が確認できる。「子」の反対側にも横方向の突線が数条みられ、「長」字の一部と考えられる。いわゆる「長宜子孫」銘であろう。鉢座の外側は櫛目文帶と円闊帶により内区と区分されている。内区は8葉に復元できる内行花文と、その間の葉状文、弧線文からなる。内区の外側には櫛歯文帯を介して雲雷文がみられる。それより外側は残っていないが、櫛歯文帯、平線の鏡線にいたると考えられる。鉢座径が約3.8cm、面径は復元すると15cm前後と考えられる。

文様の特徴をみてみよう。鉢座の四葉座鉢は高くしっかりしている。内区の花文間の文様のうち、葉状文は左側に弧線が明瞭にみられる。しかし、中心部の渦巻きは緩くなり、コンマ形に近い。弧線文の両側には縦突線はみられない。雲雷文の渦巻きは条数の多い同心円文化しているようであるが、

斜線文も条数が多くしっかりしている。これらの特徴から、高橋徹氏の分類によるⅡ式に属すると考えられる。

破片間の接合する破断面（接合破断面とする）と、それ以外の破断面（現存しない部分との接合面、外周破断面とする）の状況は、肉眼で見る限りそれほど違いはない。ただ外周破断面の方が摩滅が進んでおり、とくに破断面の稜角に顕著である。つまり外周破断面の稜角は丸みを帯びており、人為的な研磨の可能性がある。更に、破片4にとりつく接合破断面は、縁青の状況などが他の面と異なる。従って、この住居にはまず原鏡から内区のみの破片が取り出された状態で持ち込まれたものであり、埋納（廃棄）時に3片に分割されたか、埋納後土圧で割れたものであろう。その後ある程度の時間差があって破片4が削れ出たものと考えられる。

このほか、いくつか興味深い特徴がみられる。まず、四葉座に顕著な研磨痕がみられることである。研磨痕は同心円状にみられ、鏡の中心を支点に回転させて研磨したと考えられる。当然削れる前に施された研磨である。こうした特徴を持つ鏡は、今尾文昭、高野陽子氏らによって集成・考察されている（註1）。高野氏の集成によると、こうした研磨は内行花文鏡に多く見られるという。高野氏によれば、内行花文鏡は太陽信仰とかかわりがあり、これを磨く儀礼があったとされる。また、楽浪出土例にも同心円研磨が見られることから、その儀礼は東アジアにひろく行われていたとする。本例の同心円研磨を見ると、類例としてよく挙げられる京都府園都市黒田古墳・長岡京市长法寺南原古墳出土鏡と比べて研磨が極めて丁寧である。むしろ、今尾、高野両氏ともにあげている福岡県前原市平原1号墓の船載、彷彿の両内行花文鏡に見られる研磨に似ている。平原鏡については、柳田康雄氏は二次的なものではなく、製作・整形時の研磨としている（註2）。高野氏の指摘する如く楽浪出土鏡にも見られるのであれば、儀礼とするより、製作技術の面からみたほうが説得的であるようにも思われる。ただし確実な二次の研磨鏡があることも事実なので、これらを峻別しつつ、さらに検討する必要があるだろう。また雲雷文の満巻き部に赤色顔料らしい痕跡がみられる。これについては分析結果を待ちたい。

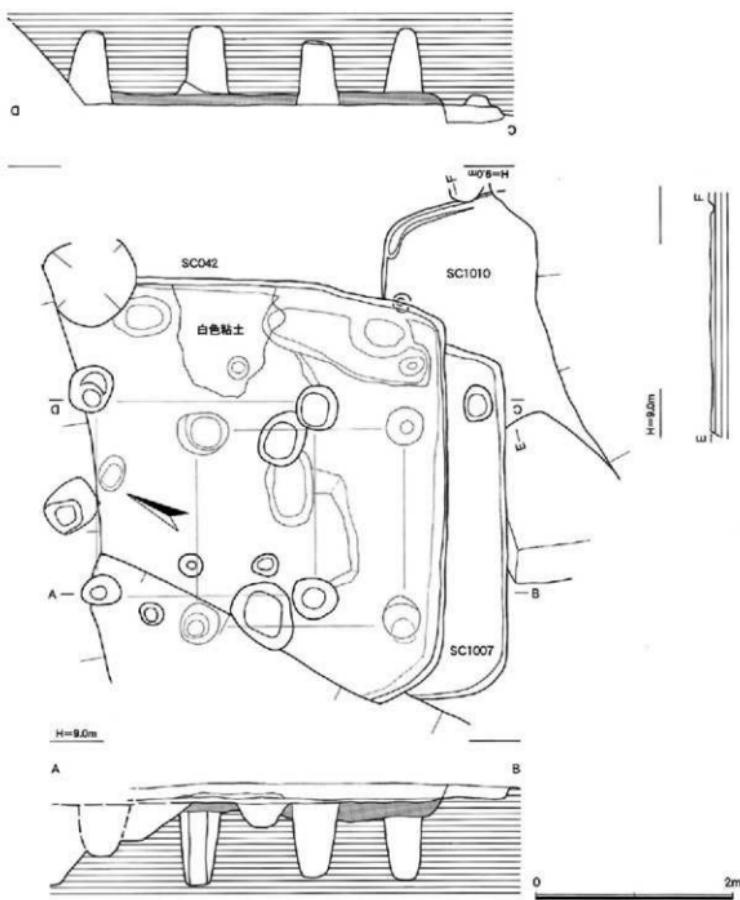
この内行花文鏡の類例を探すと、弥生時代では平原1号墓などでみられるが、市内では飯氏遺跡3次調査2区7号塚棺出土例がある。この塚棺は後期中頃に属し、今回の遺構とほぼ同時期である。日本における内行花文鏡の最古例といえよう。事実今回の鏡が出土した際、最初に注意を引いたのは飯氏鏡との関係であった。飯氏鏡は鏡縁を主とした外区付近の破片で構成されており、唯一残存していた鉢座片は「長」字の部分であった。あたかも那珂鏡と補完関係にあるかのような出土状況であり、そのため期待を持って接合を試みた。仮に同一鏡であることが判明すれば、破鏡作成・配布のプロセス解明に大きく寄与するはずであったが、接合はもとより、その後の詳細な観察により、型式的にもわずかに異なる可能性が高く、残念ながら結果的には別個体と判断された。

（註1）今尾文昭「古墳と鏡」『季刊考古学』第43号 1993 雄山閣 高野陽子「内行花文鏡の性格」森浩一編『同志社大学考古学シリーズIV 考古学と信仰』 1994

（註2）柳田康雄「①崩鏡」柳田康雄・角治行編「平原遺跡」『前原市文化財調査報告書』第70集 2000 前原市教育委員会
（この項 宮井哲郎）

S C042 (第23図)

調査区北西部で検出する。先後関係はS C1007→S C042となり、S C1006に接するような位置にある。S D036・037で北／西の2方向を削平されるが、およそ4.5×5mの方形に近い平面形に復元できる。埋土はやや黒味を帯びた暗褐色土で、全体に10~20cm程の暗赤褐色土による貼り床を行っている。4本主柱で、東壁際に竈を有する。竈は厚さ5cm程の白色粘土の広がりで認識できるのみで、焼土・炭化物・被熱痕跡は見られない。遺物は小破片が大半で、詳細な時期比定は困難である



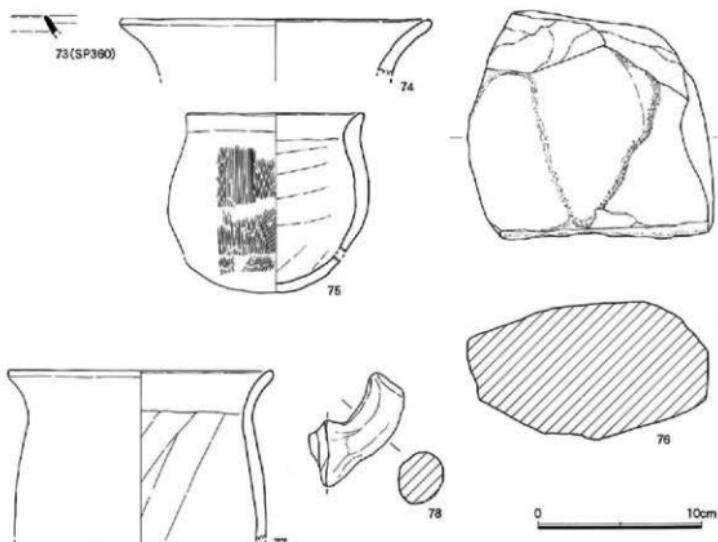
第23図 SC 042・1007・1010実測図 (1/50)

が、古墳時代後期に位置付けられる住居跡である。

出土遺物 (第24図 73~76) 73はS P 360出土の須恵器壺身立ち上がり部分の破片である。74・75は土師器甕である。75は2次的な焼成を受けている。調整は肩部外面縦刷毛、内面斜方向のヘラ削りを行う。76はきめの細かい砥石である。図上上下両方の破面以外は側面まで全て底面とする。

S C 1007 (第23図)

調査区北西部で検出する。床面の大部分をSC 042によって削平されているが、SC 042貼り床除



第24図 S C 042・1007出土遺物実測図 (1/3)

去後に4本の主柱穴を確認した。これから復元できる住居規模は $3.6 \times 4\text{ m}$ である。埋土は暗褐色土で、貼り床は認められない。遺物は少量で土師器壺・把手が出土し、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第24図 77・78) 77は土師器壺である。剥落が進み調整は不明瞭であるが、内面は縦方向のヘラ削りを行う。78はソケット式の土師器把手である。

S C 1010 (第23図)

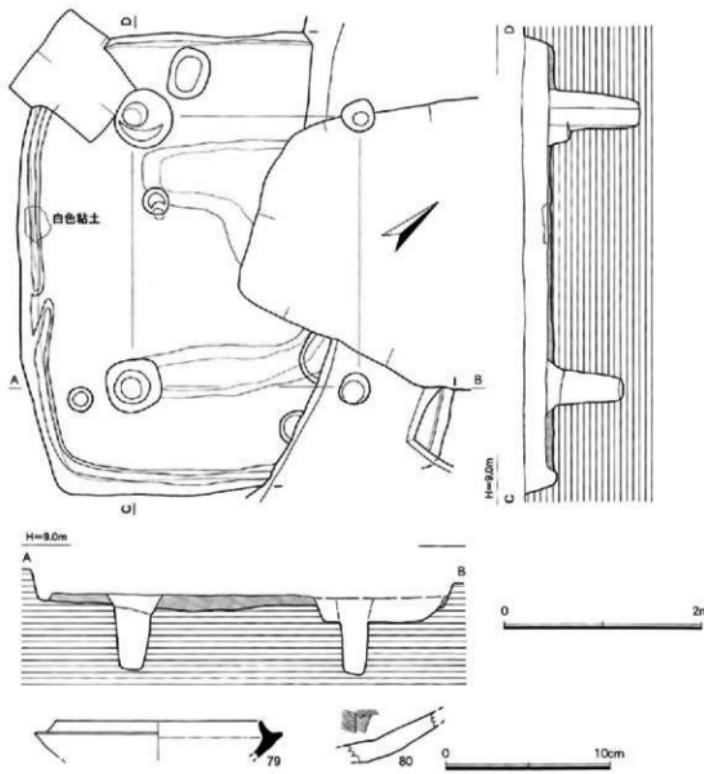
S C 042・1007の南東側で検出する。遺存状況が不良で、北側コーナー部分のみが確認できる。検出面からの深さは2cm程度である。埋土は黒褐色土で、主柱穴は不明である。切り合いを有する住居跡との先後関係は不明であるが、土師器・須恵器の小破片が出土し、古墳時代後期に位置付けられる。図示し得る遺物はないが、須恵器壺は外面回転ヘラ削りを行うものである。

S C 043 (第25図)

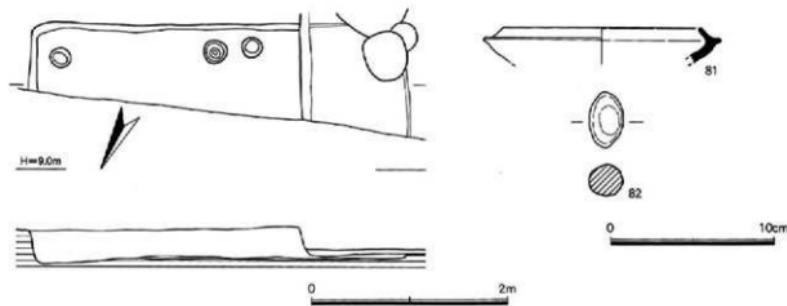
調査区北西部で検出し、S C 041→S C 043となる。およそ一辺4.6mの方形を呈し、4本主柱となる。南北壁際中央の壁溝上に白色粘土が少量広がっている。本来龜を有していた可能性が高く、攪乱を受けている北東壁際に設置されていたと考えられる。埋土は黒味を帯びた暗褐色土である。貼り床は暗赤褐色土で、床面全面に行われている。土師器・須恵器小破片が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第25図) 79は須恵器壺身である。立ち上がりは低く内傾する。80は底部破片である。内面に螺旋状の横刷毛が残る。

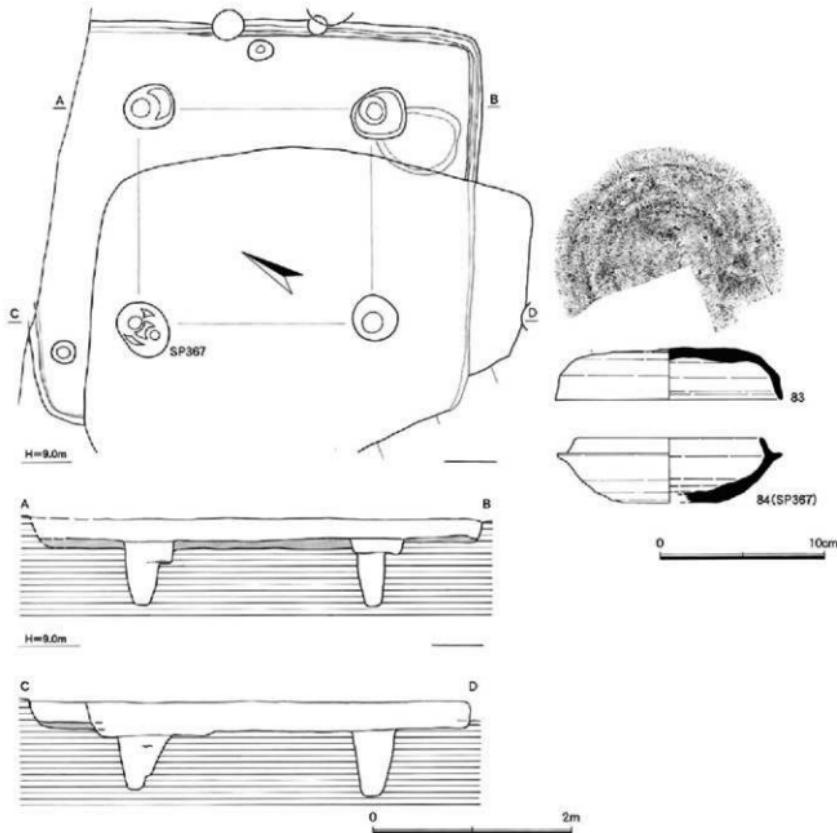
S C 045 (第26図)



第25図 SC043及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第26図 SC045及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



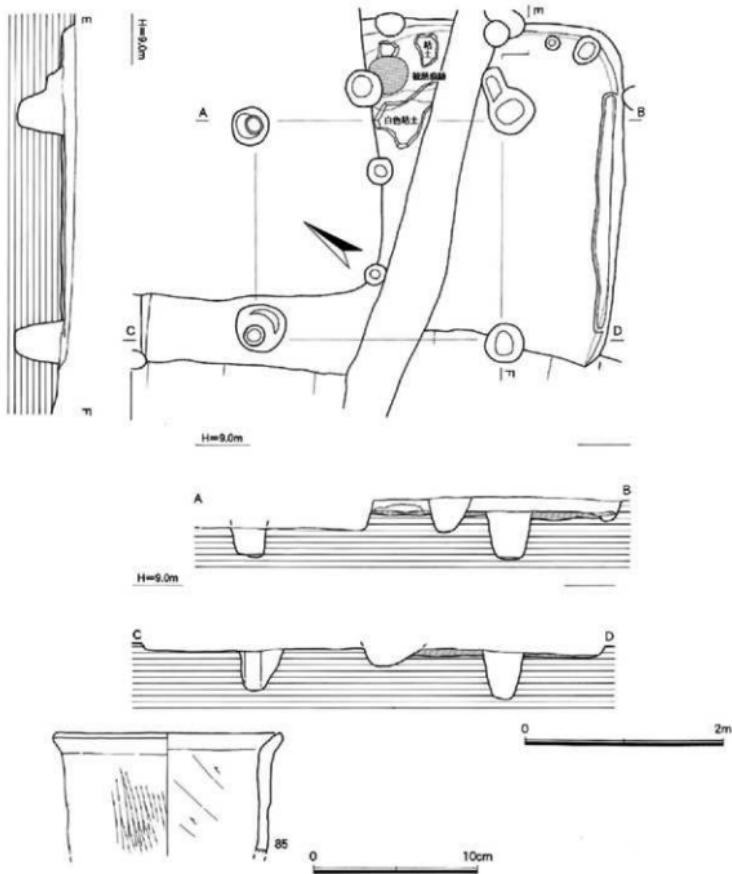
第27図 SC046及び出土遺物実測図（1/50、1/3）

調査区北端部で検出する。SC045→SC046→SC1009となる。埋土はロームブロックを含む暗褐色土である。東西長3.9mを測り、主柱穴・竈等の施設は確認できていない。出土遺物には土師器・須恵器小破片があり、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第26図） 81は須恵器壊身である。立ち上がりは低く内傾する。82は土製投弾である。重量は12gである。

SC046（第27図）

調査区北端部で検出する。南部分をSC1009に削平されている。4.1×4.4mの略方形を呈し、4本主柱となる。埋土はロームを少量含む黒褐色土で、床面全体にはほぼ均等に貼り床を行っている。竈



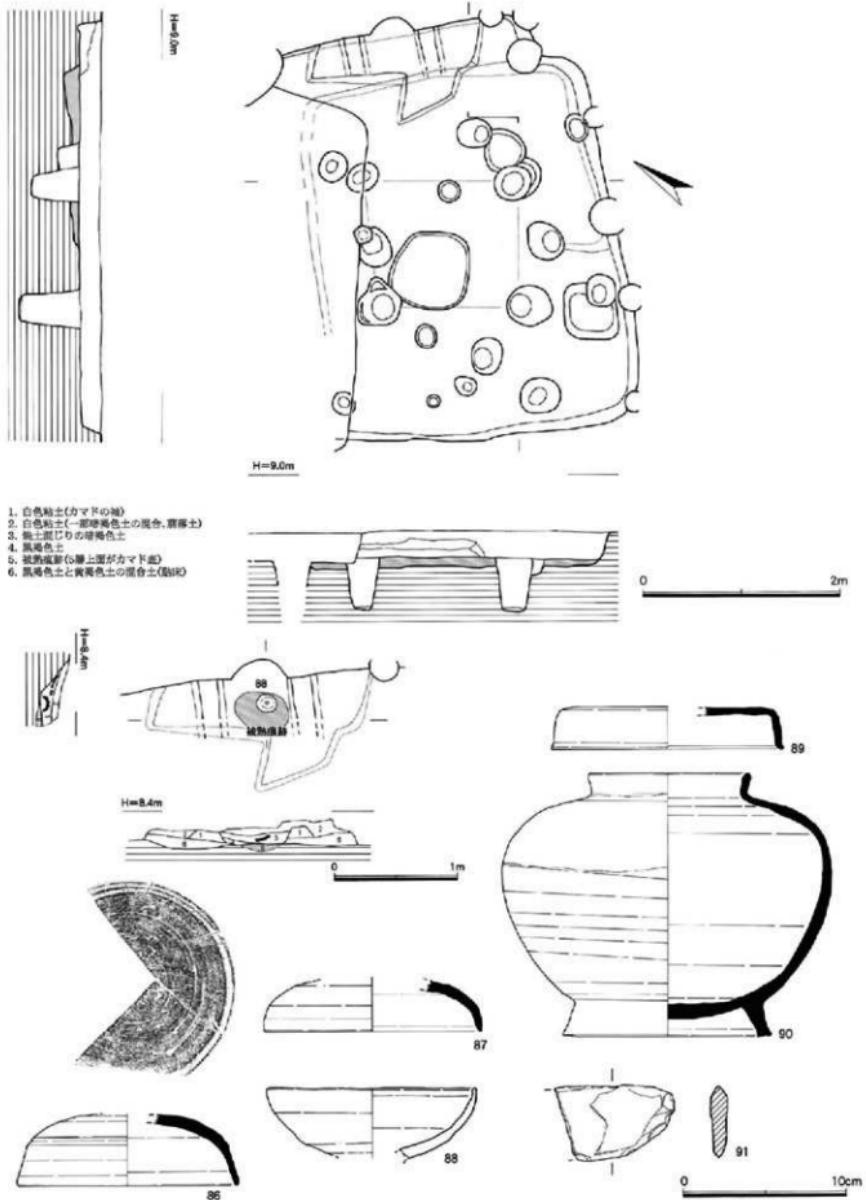
第28図 S C048及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

は確認されていない。土師器・須恵器が出土しており古墳時代後期に位置付けられる。

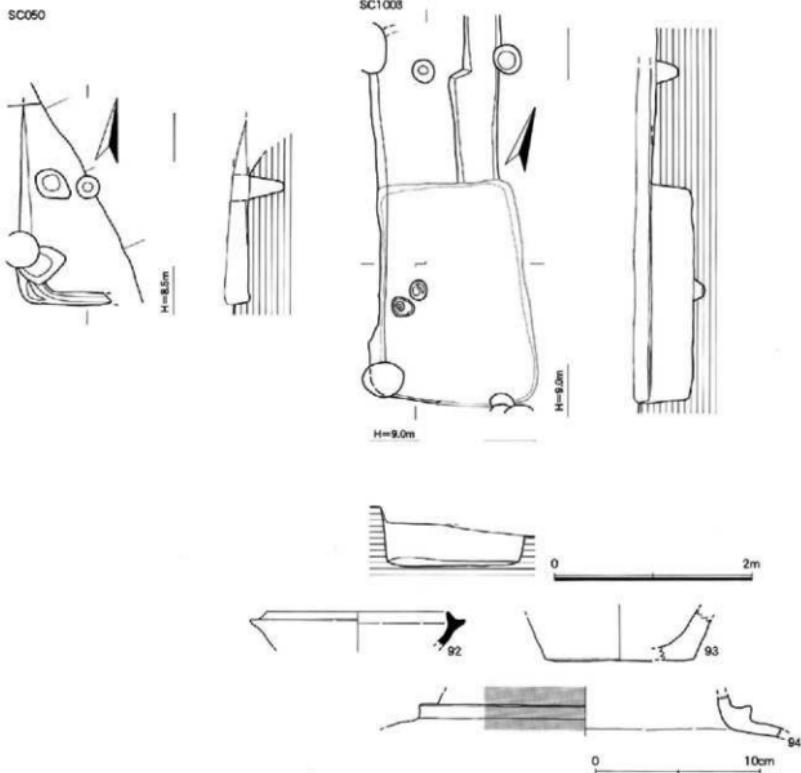
出土遺物 (第27図) 83・84は須恵器蓋坏である。83は天井部外面はヘラ切り未調整で、不明瞭なヘラ記号状の痕跡が残る。84はS P367出土である。外底面は回転ヘラ削りを行う。

S C048 (第28図)

調査区北側で検出する。S C048→S C049→S C1008の関係となる。北及び西側が削平を受けるがおおよそ平面4.3×4.7mに復元できる。4本主柱となり東壁際に竈を設置するが、廃棄時に完全に破壊されており、僅かな白色粘土と径40cmの床面上の被熱赤変部分しか残っていない。埋土は暗褐色



第29図 S C049及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 1/3)



第30図 SC050・1003及び出土遺物実測図(1/50, 1/3)

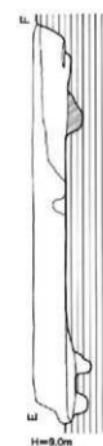
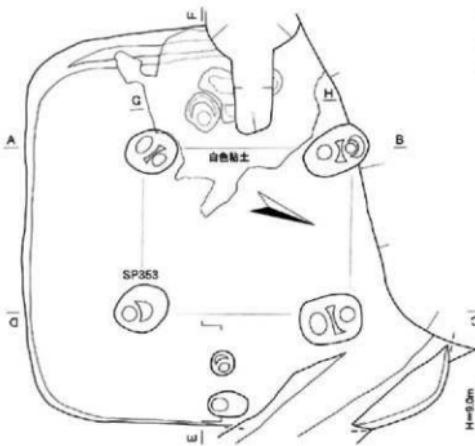
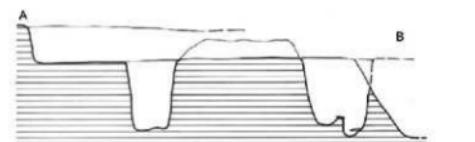
色で床面全体に暗褐色土と黄褐色土による貼り床を行っている。土師器・須恵器小破片が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物(第28図) 85は土師器甕である。小型品で口縁端部は上端近くで外反する。胸部外面は継刷毛、内面はヘラ削りを行う。

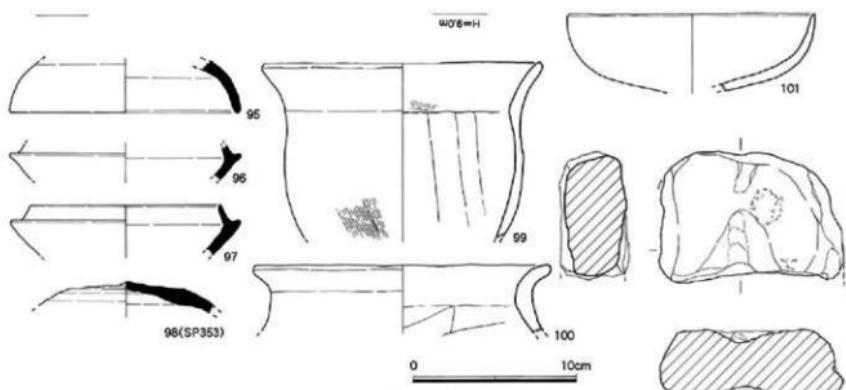
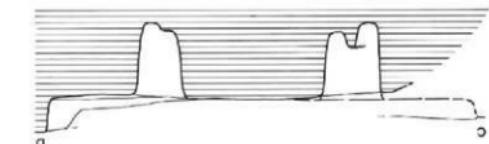
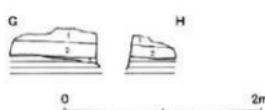
S C049(第29図)

S C1008に北側を切られる。埋土はやや茶味を帯びた暗褐色土で、東壁の状態から当初2棟の切り合ひの可能性を考えて掘り下げを行ったが、甕の白色粘土の広がりや主柱穴の状態から1棟と判断した。甕は煙道を外部に張り出すもので、横断面上層から袖部分を確認し、焼成部床面には被熱痕跡が認められ、この上面には高坏が倒置され支脚として転用されていた。高坏はすでに脚部が失われていた。4本主柱で、床面東半分には混合土による貼り床が行われている。また床面から10cm程浮いたところで、上部1/3が破損した脚付き短頸甕が正置で出土した。掘り方は確認できなかったが、

H=9.0m



1. 白色粘土
2. ロームブロックを含む暗褐色粘土
3. 粘土層と堆土層が多い



第31図 SC1006及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

102

住居に後出する埋納遺構と考えられる。8世紀代のものと考えられ、SD036との関わりも考えられる資料である。その他土師器・須恵器が出土しており、小田編年Ⅲb～Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物（第29図） 86・87は須恵器蓋である。86は屈曲部に沈線を巡らし、天井部はこの沈線まで回転ヘラ削りを行う。87も天井部外面は回転ヘラ削りである。88は壺内から出土した土師器高坏である。脚部は欠失し、外底面は回転ヘラ削りを行う。須恵器蓋に似る形態・調整を有する。89は90の壺とセットになる蓋の1/3破片である。天井部は平坦でヘラ切り未調整である。口縁端部は僅かに外方に引き出している。90は脚付き短頸壺である。胴部上位に最大径を有し、この部位から下には回転ヘラ削りを行う。また頸部から最大径部位までは自然釉が付着する。脚は八字上に広がり、下端面は僅かに瘤んでいる。91は石器未製品であろうか。

S C050（第30図）

調査区東側で検出する。SD001に大きく削平されており、南西コーナー部分が残存するのみである。埋土はやや茶味を帯びた暗褐色土で主柱穴等は確認されていない。遺物は少量で小破片のみである。須恵器の出土は見られない。

S C1003（第30図）

調査区北東隅で確認する。攪乱等で住居の西側が残存するのみである。南北長3.8mを測り、検出面からの深さ15cm程度である。埋土は褐色土で、土師器・須恵器の小破片が出土している。古墳時代後期に位置付けられるものと考えられるが、主柱穴・竈等の施設は確認されていない。また住居の南西コーナー壁に添ってやや歪な長方形の掘り込みが行われている。平面1.6×2.3m、深さ50cmを測る。埋土はロームブロックを多く含む暗褐色土である。SC1003のコーナーラインと一致する掘り方で、住居に伴うものと考えられるが、この土坑中からは須恵器は出土していないことなどから、先行する掘り込みである可能性ものくる。

出土遺物（第30図） 92はSC1003埋土中から出土した須恵器壺身である。立ち上がりは低く内傾している。93・94は土坑中から出土した遺物である。93は僅かにレンズ底を呈する變底部である。94は壺頸部である。外面に赤色顔料が残る。

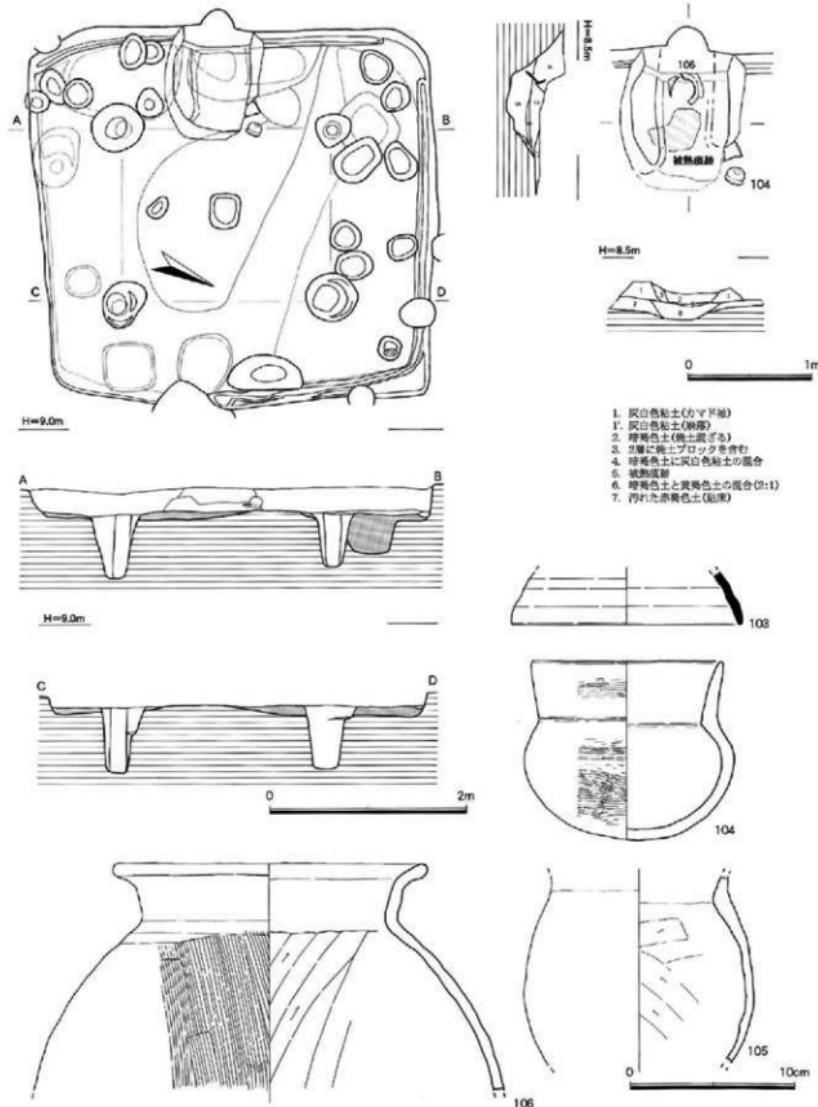
S C1006（第31図）

調査区北端部で検出する。SC042・1009に近接して確認される。SD037に北西側を削平される。4.1×4.4mの平面略方形を呈し、4本主柱となる。西壁際床面上には厚さ20cm程の白色粘土が広がり、この部分が竈になるものと考えられるが、袖部分や燃焼部の被熱痕跡は確認できていない。埋土は暗黒褐色土で、埋土北半を中心白色粘土が多く混合していた。このことから住居廃棄時に竈の破壊が行われたものと考えられる。出土遺物から小田編年Ⅳ期に位置付けられる。

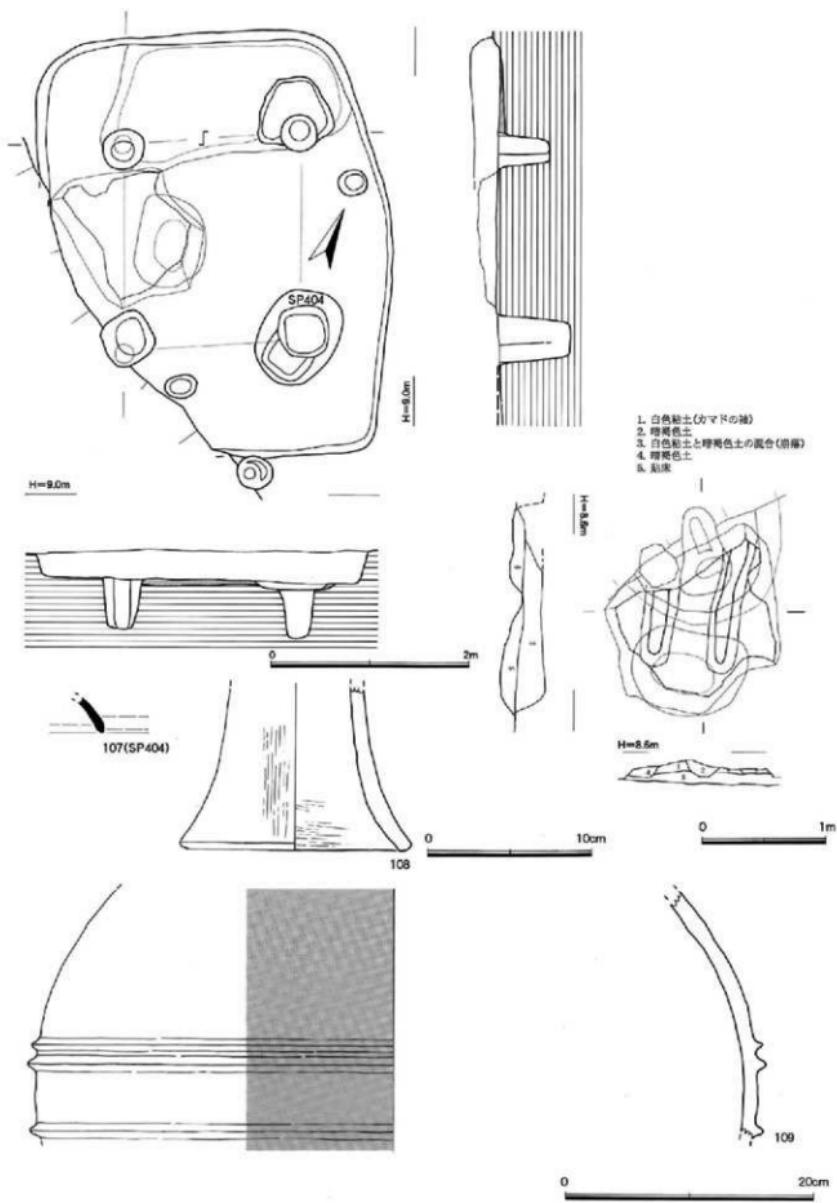
出土遺物（第31図） 98がSP353出土、他は住居埋土出土である。95～98は須恵器壺身である。98は天井部外面ヘラ切り未調整である。99・100は白色粘土部分から出土した土師器變である。いずれも強い2次焼成を受ける。101は土師器碗である。摩滅が進み調整は不明である。102は砂岩製の石鍤である。聚綿痕跡の溝が残る。

S C1008（第32図）

調査区北東側で検出する。SC048→SC049→SC1008となる。平面3.8×4mの略方形を呈し、4本主柱となる。埋土は暗褐色土で、床面には中央部分を除いて赤褐色土との1:1混合土による貼り床が行われる。また西壁中央に竈が設置される。竈は煙道部分が屋外に張り出すものである。袖部が残り、燃焼部床面には被熱痕跡が認められる。竈燃焼部の奥には下半を割取った甕（106）を貼り床に埋め込む様にして据えているが、この際燃焼部側も割取っており、燃焼効率を考えたものである。



第32図 S C 1008及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 1/3)



第33図 SC1009及び出土遺物実測図 (1/50, 1/40, 107・108は1/3, 109は1/4)

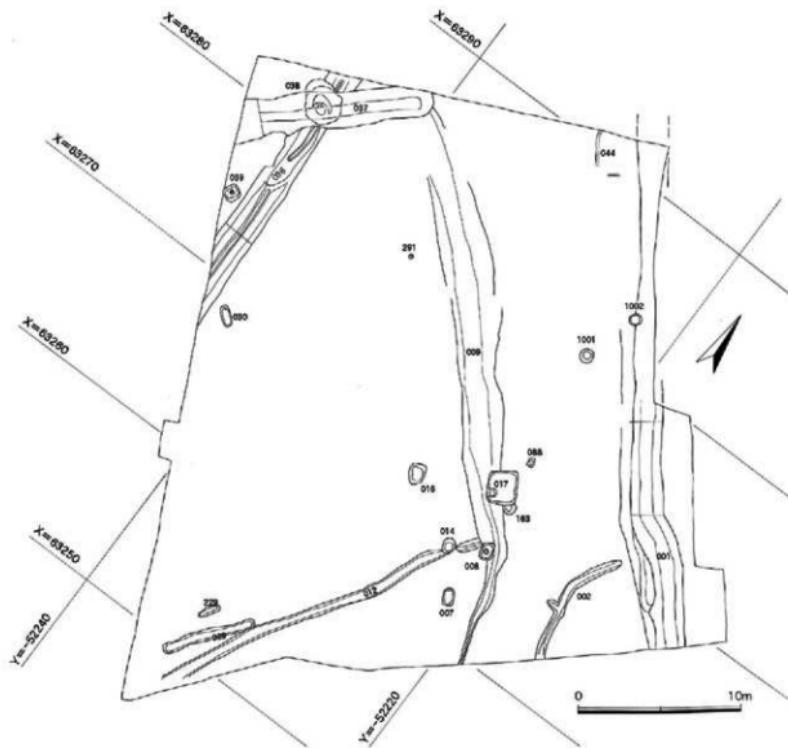
うか。罐前面から完形の甕（104）が出土している。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第32図） 103は須恵器壺蓋である。104は完形の土師器甕である。器面の剥落もあり調整は不明瞭となるが、外面には横方向にヘラ磨きが行われる。105は土師器甕で内面ヘラ削りを行う。106は罐内出土の甕である。胸部外面は縦刷毛、内面は縦方向のヘラ削りを行う。

S C 1009（第33図）

調査区北端部分で検出する。3.5×4.3mの長方形を呈し、4本主柱となる。埋土は暗褐色土で、北側壁添いに一部貼り床を行う。西壁際に罐が設置されている。搅乱溝により橈道方向が失われているが、袖部は確認できている。袖部先端には深さ10cm程の浅い掘り込みが認められる。また袖部粘土を除去すると、この部分の床面上に被熱赤変部分が確認できる。この甕に伴うものとは考えにくく、罐の作り変え等が考えられる。古墳時代後期に位置付けられる。

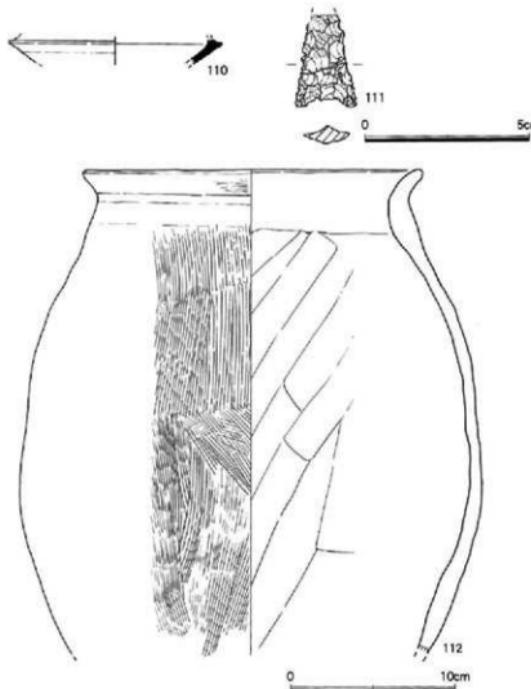
出土遺物（第33図） 107はS P 404出土の須恵器蓋口縁部破片である。108は器台破片である。109は丹塗り甕の胸部である。108・109は混入品と考えられる。



第34図 土坑・井戸・溝配置図 (1 / 300)



第35図 SK007・008・014・016・017・030・039実測図 (1 / 30)



第36図 SK014・017出土遺物実測図 (110・112は1/3、111は2/3)

ていないため明確な時期は不明だが、この北側を切るピットからは弥生時代後期の土器破片が出土している。黒色の埋土などから弥生時代中期後半の遺構群に対応する可能性を考えておきたい。

S K014 (第35図)

調査区南東側でSK007の北側で検出する。長軸0.9m、短軸0.7mを測る隅丸長方形の掘り方を呈する。壁は直立し床面はほぼ平坦である。埋土はSK007同様ロームの混合土によるものである。出土遺物は少量で須恵器蓋坏の破片1点が含まれる。規格・埋土・遺物の類似性などからSK007と対応する柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物 (第36図 110) 110は須恵器坏身である。小破片でかえりの部分も欠失するが低く短いかえりがつくものと考えられる。小田編年のIV期に対応するものであろう。

S K016 (第35図)

調査区中央南東よりで検出する。長軸1.3m、短軸1mを測るやや歪な隅丸長方形の掘り方を呈する。壁はやや内側に傾斜し床面はほぼ平坦である。出土遺物は少量で示し得る遺物はない。須恵器の出土がなく上層黒色土の埋土色調などから弥生時代の可能性が考えられる。

S K017 (第35図)

調査区中央東よりで検出する。SB018を切る土坑である。長軸2m、短軸1.8mを測る略方形の

3) 土坑 (SK)

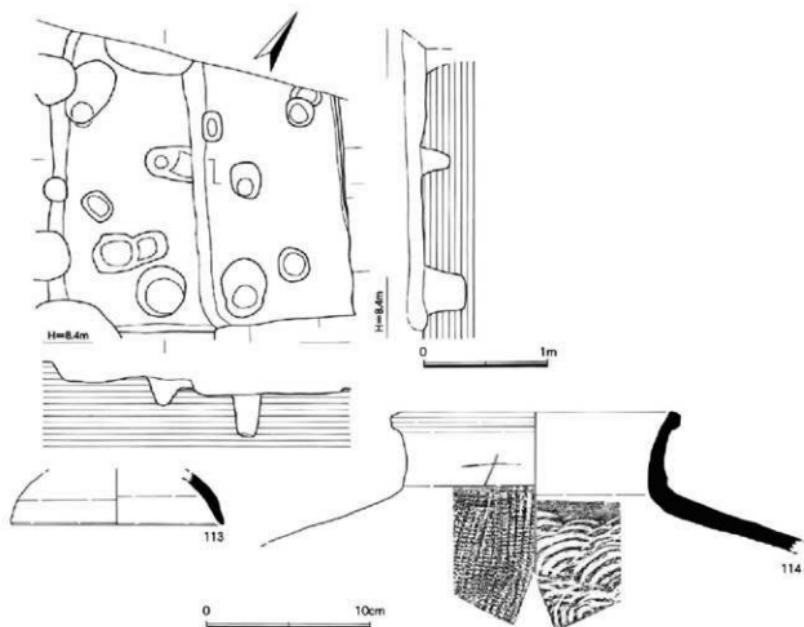
この項で報告する遺構の中には掘立柱建物の柱穴と形状・時期などが類似するものもあるが、建物の柱穴として対応するものがなく一応土坑として報告しておく。

S K007 (第35図)

調査区南東端、SB019範囲内で検出する。長軸1.1m、短軸0.6mを測る隅丸長方形の掘り方を呈する。壁は直立し床面はほぼ平坦である。埋土はロームの混入具合から人為的な埋め立てが想定できる。出土遺物は少量で弥生土器の小破片のほか、須恵器蓋坏の破片1点が含まれる。埋土の色調などから古墳時代後期以降のものと考えられる。

S K008 (第35図)

調査区南東側で検出する。長軸1.1m、短軸0.8mを測る隅丸長方形の掘り方を呈する。壁はやや内側に傾斜している。床面はほぼ平坦で、中央に径20cm、深さ10cmの柱痕跡のくぼみが残るが土層観察では柱痕跡は確認できていない。遺物は出土しない。



第37図 SK044及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

掘り方を呈する。埋土はロームブロックを多く含む黒色土で、これを除去すると貼り床を施した平坦な床面を検出した。床面南側には径50cm、深さ30cmの掘り込みがある。また貼り床土は汚れた黄白色土でこれを除去すると不規則な凹凸が著しい掘り方となる。出土遺物には土師器・須恵器があり古墳時代後期の遺構と考えられる。

出土遺物（第36図 111・112） 111は黒曜石製の石鎚である。112は長軸でやや下彎れとなる土師器甕である。口縁部は短く屈曲させている。体部外面は縦刷毛、内面は斜め上部に削り上げている。

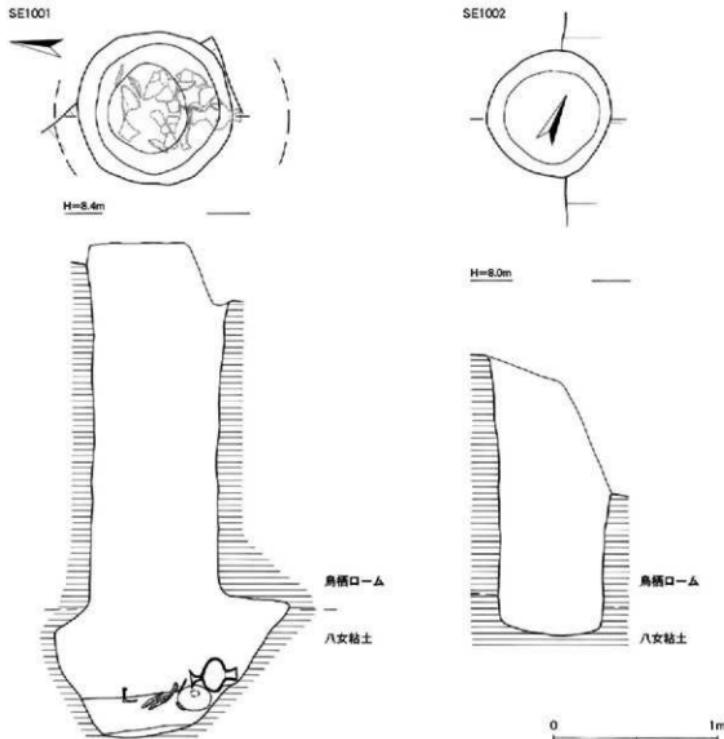
S K030（第35図）

調査区西端中央で検出し、S C041を切る一辺90cmの方形の掘り方を呈する。1mほど掘り下げた後底面中央にさらに径30cm、深さ40cm程の柱状の掘り込みを有する。埋土は検出面から0.4mはややしまりのない漆黒色土、0.9mまでは褐色土（ローム小粒を含む）、以下は黒褐色土である。出土遺物は極少量で細片4点のみであるが須恵器の出土はない。

S K044（第37図）

調査区西隅で検出し、S C041を切る一辺90cmの方形の掘り方を呈する。1mほど掘り下げた後底面中央にさらに径30cm、深さ40cm程の柱状の掘り込みを有する。埋土は検出面から0.4mはややしまりのない漆黒色土、0.9mまでは褐色土（ローム小粒を含む）、以下は黒褐色土である。出土遺物は極少量で細片4点のみであるが須恵器の出土はない。

S K044（第37図）



第38図 S E1001・1002実測図 (1/30)

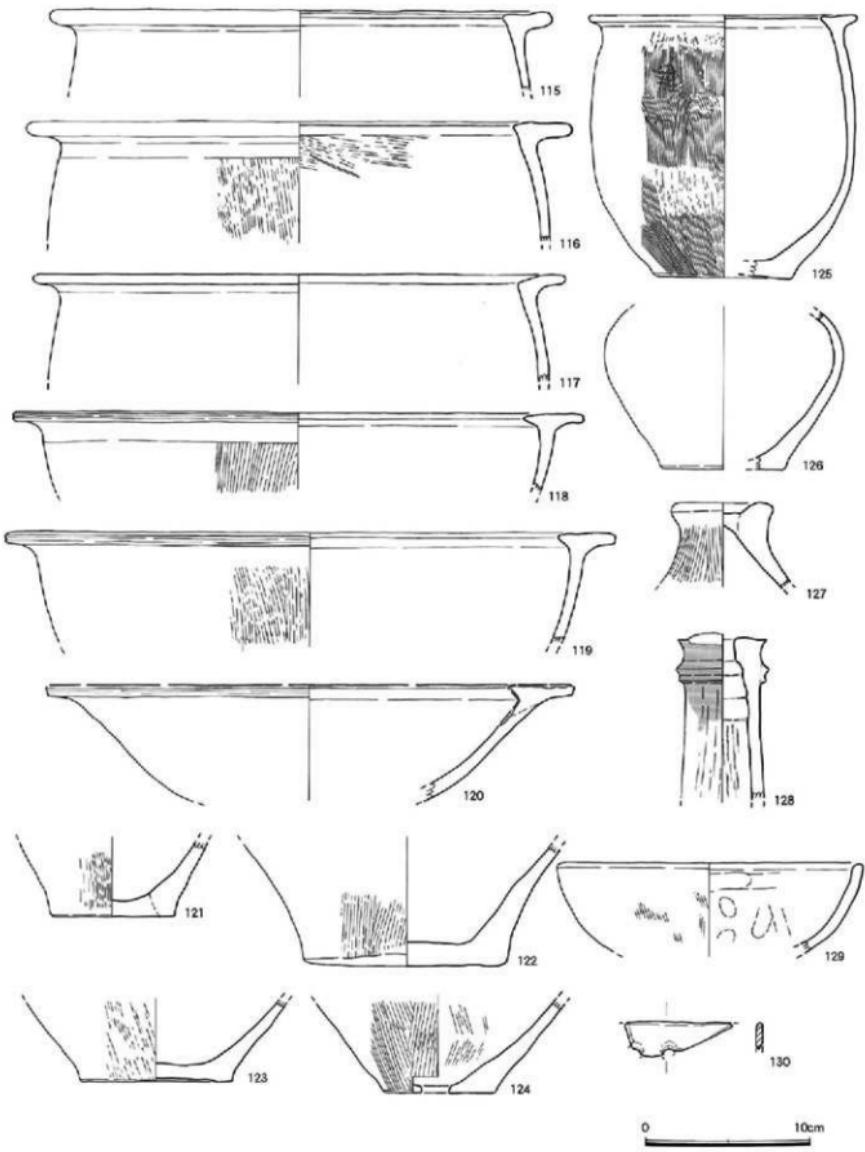
調査区北東隅で検出する。調査区際に位置し、SD001の削平もあり形状は不明瞭である。埋土はしまりのない褐色土で搅乱の可能性も考えたが、新しい遺物も認められないため土坑として報告する。床面上に高さ10cm程の段を有し、SD001近くで僅かな立ち上がりを確認する。この立ち上がりが掘り方の壁になるかは不明である。床面は細かな凹凸が多い。また床面検出のピットはいずれも同様の埋土である。土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第37図） いずれも須恵器である。113は坏蓋口縁部の破片である。114は甕である。胴部外面は擬格子叩き、内面には青海波の當て具痕が残る。

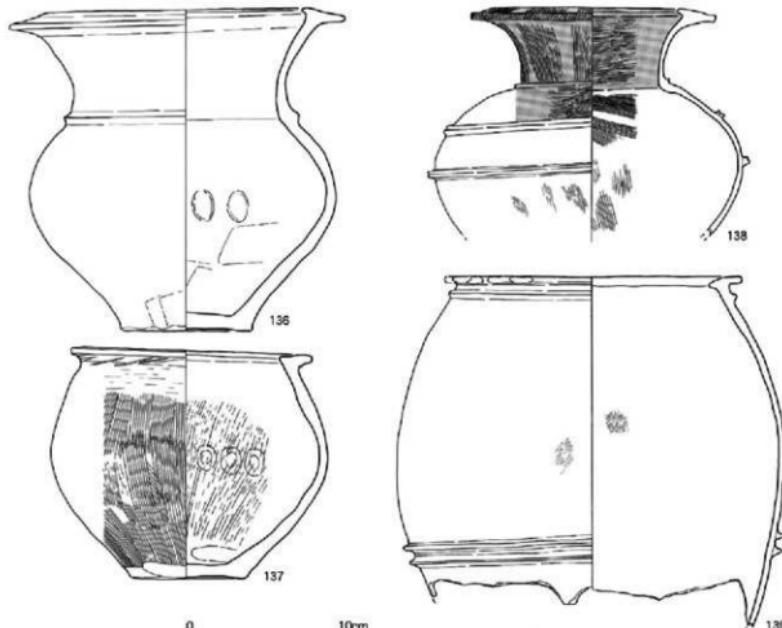
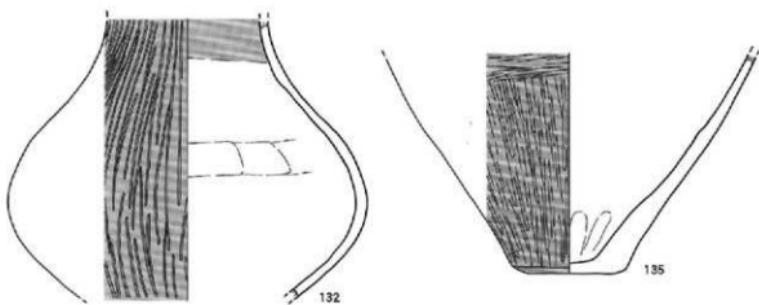
4) 井戸 (S E)

調査区内では3基の井戸を検出している。2基は弥生時代、1基は中世前半代に位置付けられるものである。弥生時代の井戸は8次調査地点で2基、24次調査地点で1基が確認されている。

S E1001 (第38図)



第39図 S E1001出土遺物実測図1 (1/3)



0 10cm

第40図 SE1001出土遺物実測図2 (131~137は1/3、138・139は1/8)

0 20cm

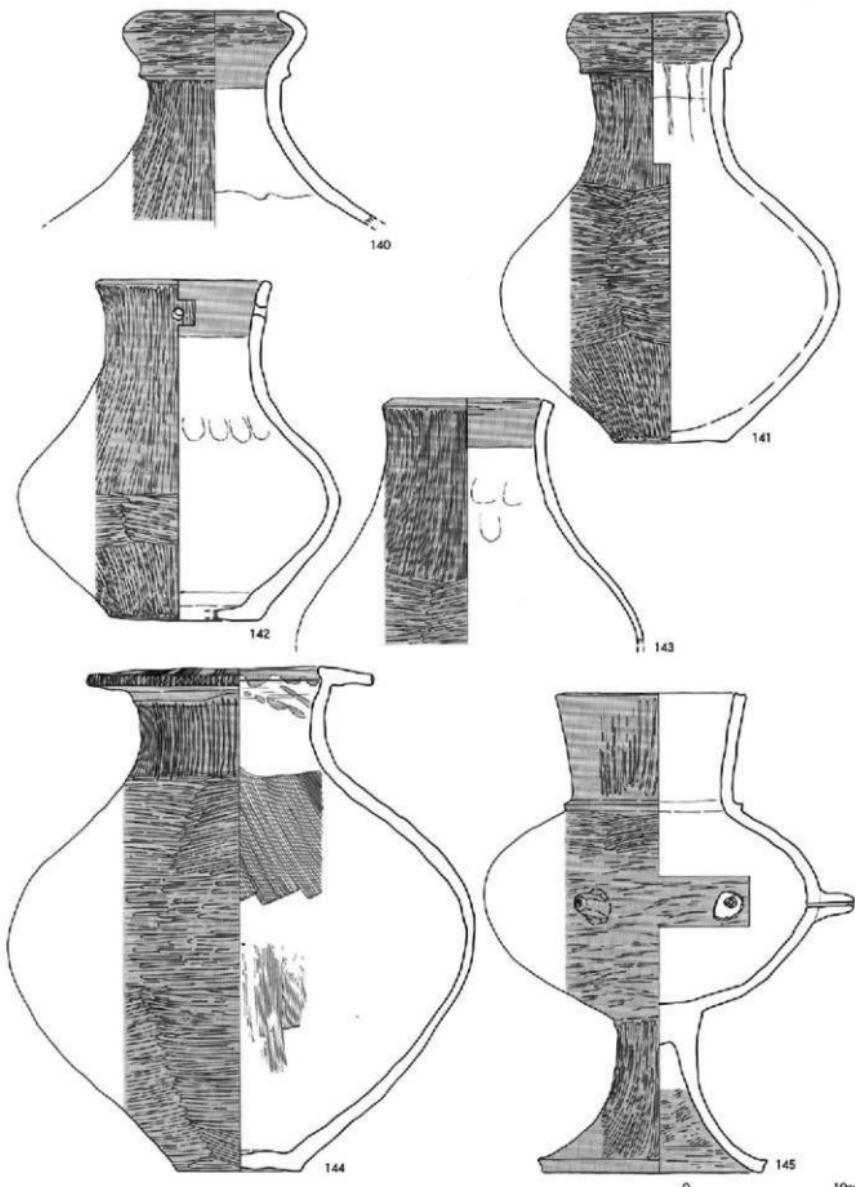
調査区東端中央部分で検出する。平面は径90cmの円形を呈し検出面からの深さは3m(底面標高5.2m)を測る。掘り方はほぼ真直ぐ掘り下げられ、標高6mの鳥居ローム層と八女粘土層の境で40cmほど抉れている。埋土は標高5.5m程まではしまりのない黒色土(上層)で、以下は漆黒色土(下層)が堆積している。なお底面から10cm程は漆黒色土に八女粘土が混合している。下層土の上面で土器群を検出している。平面的には全面に破片・完形品が広がっており、図示し得たのは土器群の上面に広がっていたもののみである。この他にも下層埋土からは丹塗土器などが多く出土している。また甕棺の破片や底面直上からは石斧1点が出土している。出土遺物は総量でコンテナ9箱分である。弥生時代中期後半に位置付けられる。

出土遺物(第39~42図) 115~135は抉り込み部分までの上層埋土出土、136~147は抉り込み以下の埋土出土である。115~119は甕の口縁部破片である。口縁部断面は逆し字もしくは内面に張り出した筋状を呈する。116・118・119外面には縦刷毛が残り、116内面は板状工具による横ナデが行われる。120は高坏の坏部である。121~124は底部破片である。いずれも平底を呈し、外面は縦刷毛を行う。124には底部外側より焼成後の穿孔を行う。125は完形に復元できる甕である。胴部は下膨らみで、底面径が広くなる。外面は縦刷毛の後、口縁下に横ナデを行う。内面は全面ナデ調整である。126は壺である。内面には指項痕跡が残る。外面は上半横ナデ、下半は縦方向主体のナデである。127は蓋の天井部分である。128は筒部である。赤色顔料の大半が剥落している。129は椀である。外面には粗い縦刷毛、内面はナデを行う。130は石包丁の破損品である。131~135は丹塗りの壺である。131は突帯以下に縦方向の暗文状の磨きを行う。132にも131に類似した暗文が施される。133は筋状の口縁部である。134は如意形の口縁部である。外面に縦方向の磨きが残る。135には縦方向の磨きを行う。

136は筋状口縁部を有する壺である。頸部に突帯を有し、外面上半部までは横ナデを行う。下半部には板状工具による横ナデの痕跡が残る。137はほぼ完形に復元できる。口縁部は筋状を呈し、底部はやや上げ底である。胴部は内外面に縦方向の刷毛目が残る。138は胴部下半を欠失する大型の壺である。頸部に1条の三角突帯と胴部に2条のM字形突帯を貼り付ける。胴部上段の突帯から頸部内面までに丹塗りを行う。頸部外側及び口縁部上面に暗文状の磨きを行い、口縁端部には刻み目を施す。内面は頸部が横方向の磨き、胴部上半は刷毛目が残る。139は甕棺である。頸部に1条、胴部に2条の突帯を貼り付け、胴部突帯以下は欠失する。内外面丁寧なナデが行われるが、部分的に刷毛目が認められる。140~146は丹塗り土器である。140・141は袋状口縁壺である。袋状口縁下に突帯を有する。外面は全体に細かな磨きを行うが、口縁部横方向、頸部縦方向、胴部上半横方向、下半縦方向というように細かく磨き分けている。142・143は直口壺である。142には口縁部に相対する2方向から焼成前の穿孔が行われている。外面磨きは口縁端部から胴部までは縦方向、胴部最大径付近は横方向、下半部は縦方向で行う。143は横磨きが最大径より上部から行われる。144は外傾気味の筋状口縁を有する。口縁端部には刻みが施される。口縁部上面と頸部には暗文状の磨きを行い、胴部は全体に横方向の磨きを行っている。145は脚付き注口壺である。口縁部は直口となり外面に縦方向の暗文を施す。胴部との境には突帯を貼り付け、胴部には横方向の磨きを行う。脚部にも縦方向の暗文が施されている。注口部は胴部最大径位置に2箇所に取り付けられる。注口部間は約8cmで、現状で一方は注口部が欠落しており、胴部の穿孔部分が露出している。146は高坏である。口縁部上面に暗文を施す。147は石釜である。

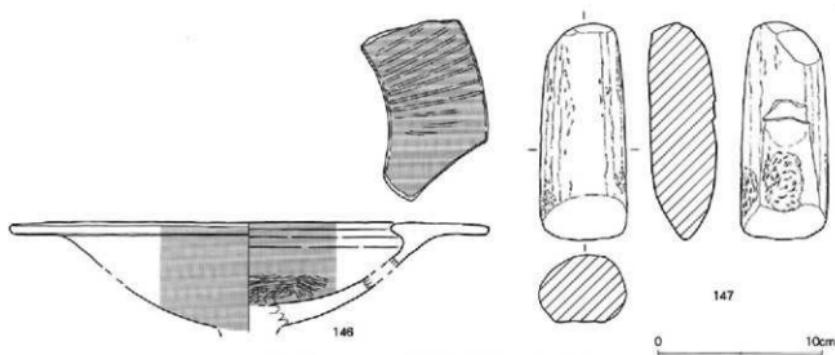
S E1002(第38図)

調査区東端中央部分S E1001の北側で検出し、SD001に上面を削平される。平面は径80cmの円

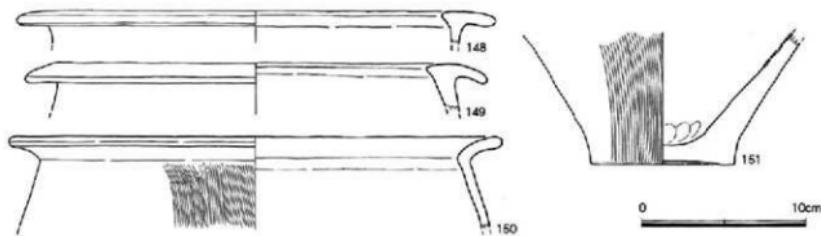


第41図 SE1001出土遺物実測図3 (1/3)

0 10cm



第42図 SE1001出土遺物実測図4 (1/3)



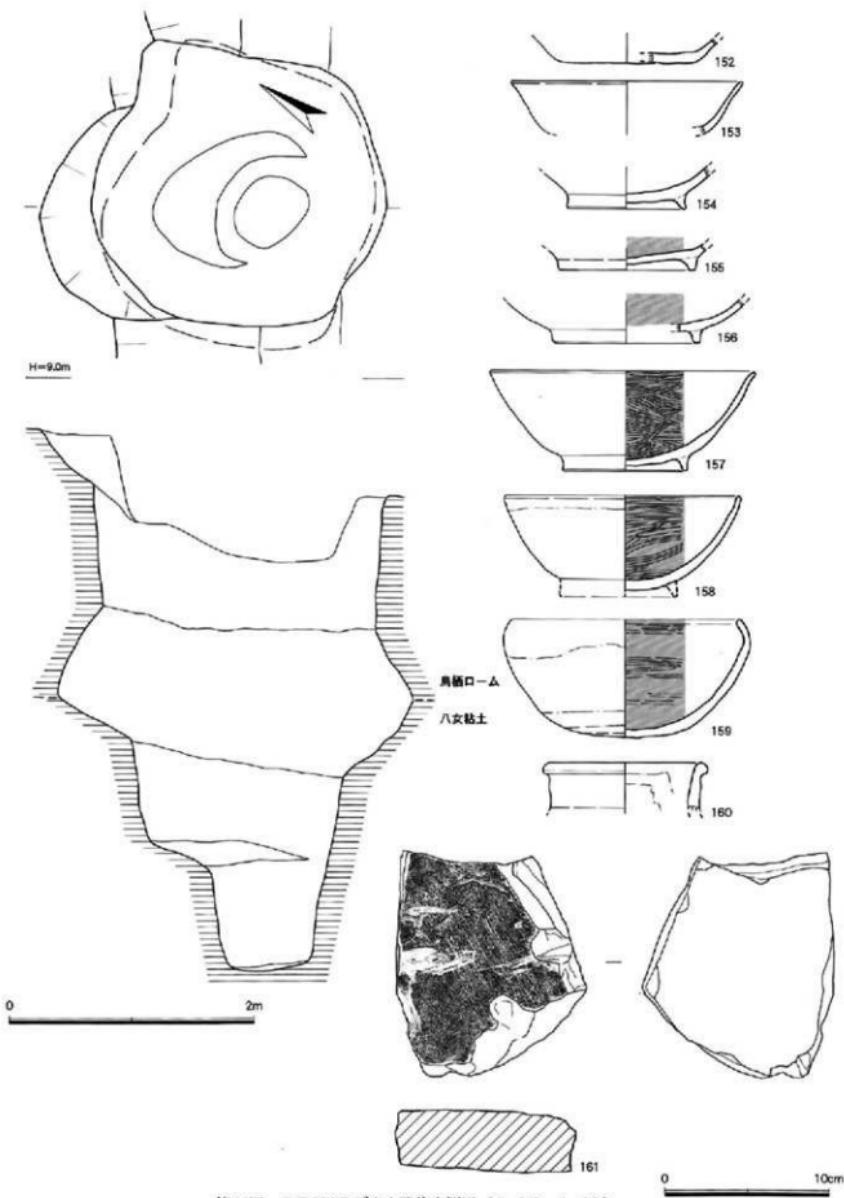
第43図 SE1002出土遺物実測図 (1/3)

形を呈し検出面からの深さは1.8m（底面標高5.8m）を測る。掘り方はほぼ真直ぐ掘り下げられ、鳥柄ローム層と八女粘土層の境から20cm程削除されている。埋土は検出面から1mまではローム小粒を含む黒褐色土、1~1.4mまでは汚れた黄白色~橙白色土、以下底面までは粘性の強い黒色土（ローム混じらない）である。遺物は比較的小量で丹漬土器を含む甕・壺の小破片が出土している。SE1001同様、弥生時代中期後半に位置付けられる。

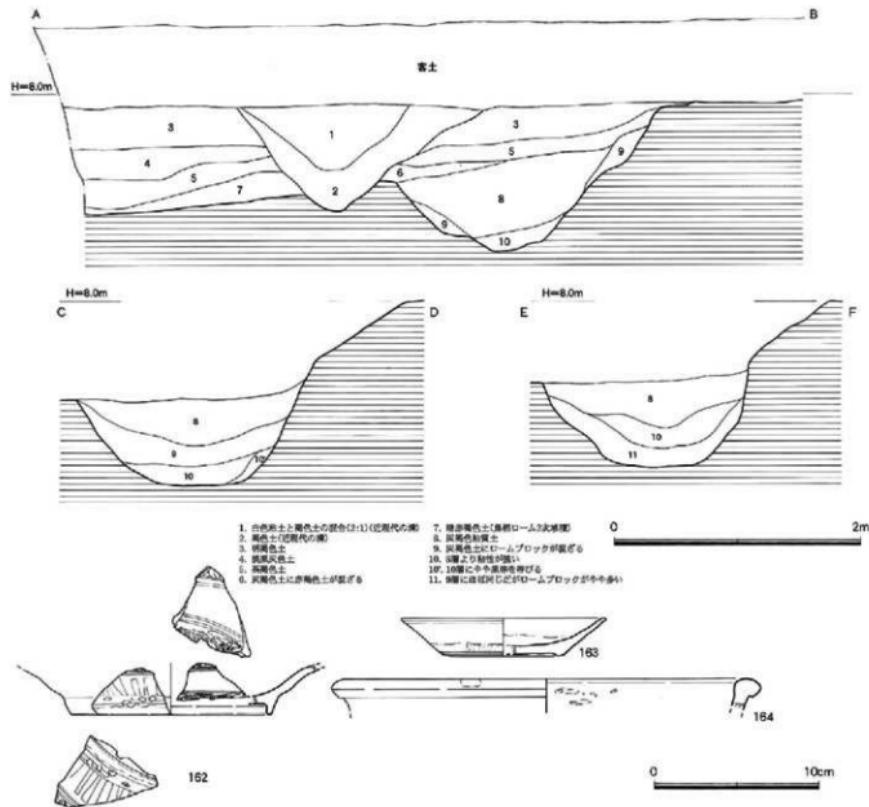
出土遺物（第43図） 148~150は断面「く」もしくは「L」字状を呈する甕の口縁部である。150は胸部外面に綴刷毛を行う。151は甕の底部である。外底面は僅かに中央部が畳んでいる。外面は綴刷毛、内面にはナデを行う。

S E038（第44図）

調査区西隅で検出し、SD037に掘り方のほぼ全面を削平される。SD036→SE038→SD037の関係となる。平面は $2.2 \times 2.8\text{m}$ の歪な略方形を呈し検出面からの深さは4.4m（底面標高4.15m）を測る。掘り方は上半 $3/4$ までほぼ真直ぐ掘り下げられ、底面から1mほど上部で平坦面を有する。また鳥柄ローム層と八女粘土層の境で40cmほど抉れている。埋土は検出面から85cmほどはロームを含まない灰褐色土（上層）で、以下は灰褐色土と赤褐色土の混合土（下層）である。遺物は小破片



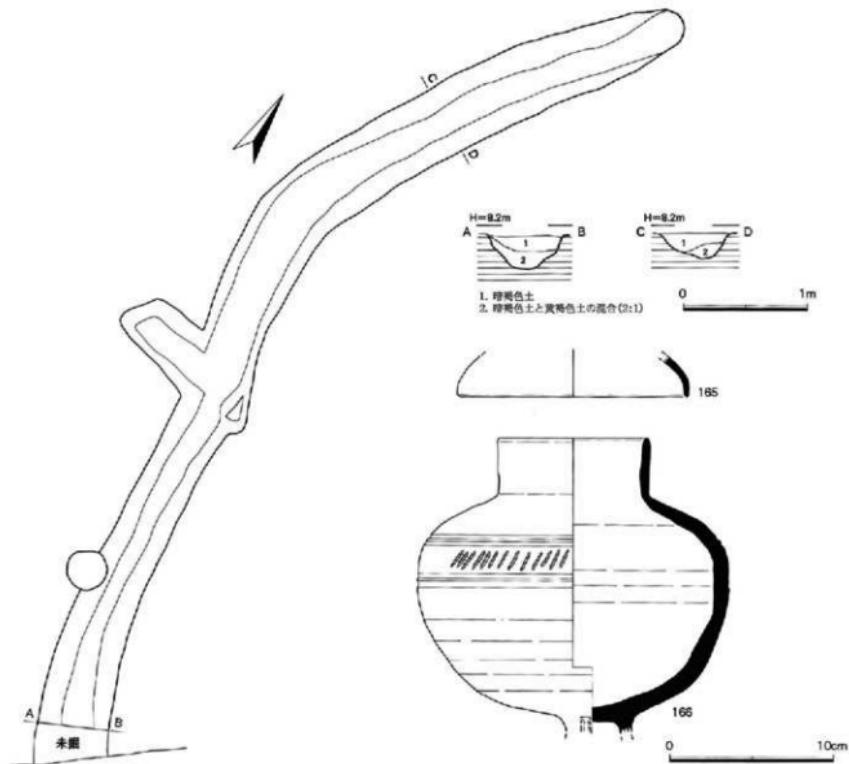
第44図 S E 038及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第45図 S D001土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

が主体でコンテナ1箱程度である。また掘り方の平坦面から以下はほとんど遺物は出土していない。土師器・須恵器・黑色土器のほか越州窯系青磁碗小破片等が出土している。平安時代前期に位置付けられる。

出土遺物 (第44図) 152・153は土師器皿・坏である。調整は不明瞭であるが外底面へラ切りを行っているようである。154は高台を有する土師器碗である。155～159は内面を焼し焼きにより黒化処理した内黒の黒色土器である。155～158は高台付き碗である。157は胴部外面は横ナデを行う。内面は横～斜めの磨きにより光沢を有する。158は高台部分が剥落している。胴部～口縁部の丸みが157より強くなる。159は鉢状の器形である。口縁部は袋状に内傾する。内面全体及び口縁部外面が



第46図 SD 002及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

黒化する。外面下半は回転ヘラ削りを行う。160は褐色釉を施す陶器壺口縁部である。胎土は灰色を呈する。161は板状石材である。片側の平坦面に刃物状の条痕が残る。

5) 溝 (SD)

SD 001 (第45図)

調査区東端で検出する。調査区にはほぼ平行して南東～北西方向にほぼ直線的に延びる。調査区内の安全確保のため南半部分では完掘しているものの北半部分では上面の掘り下げにとどめている。また北側に隣接する第24次調査区においてこの延長が確認されている。周辺の本来の地形は対象地の東出土遺物は側に隣接する道路部分で丘陵を縱断する鞍部が形成されている可能性が高く、この溝は鞍部にかかる東側の斜面沿いに掘削されているものと考えられる。溝幅は約2.5mを測り、検出面からの掘削深は1.3～1.5mで溝底の標高は南端で6.4m、中央部分で6.7mとなり北側に向かってやや高く

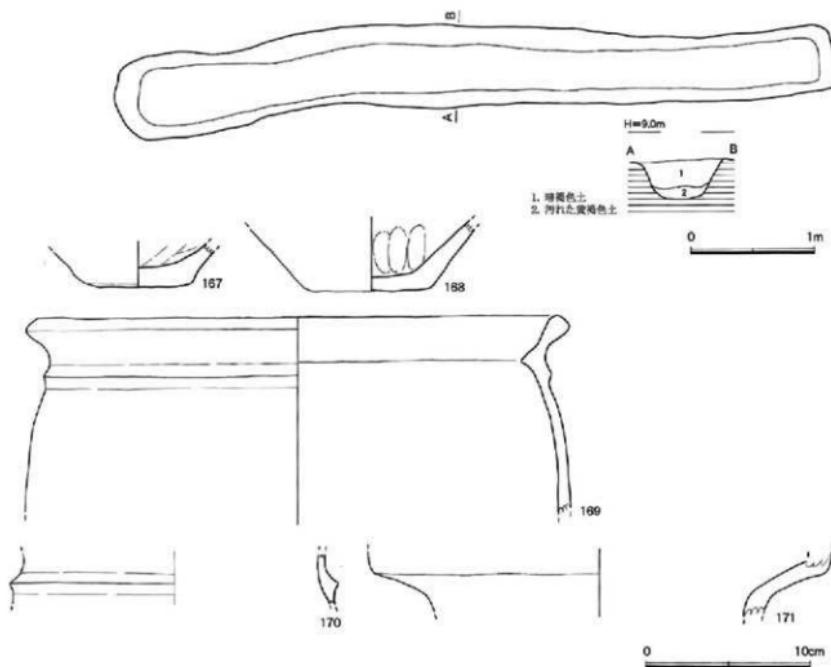
なっている。土層図から8~11層が溝の埋土と考えられ比較的粘性の高い埋土のためある程度の滯水状態が想定できる。また砂性土の堆積はなく流水の状態を伺うことはできない。また3~7層は後世の埋め土である。遺構の機能は不明であるが区画を意図した可能性が高い。出土遺物は土師器、須恵器、染付、白磁の小破片のみで時期的には不明瞭であるが、中世後半期に位置付けられる。

出土遺物（第45図） 162は染付皿である。高台型付き部分の釉を剥ぎ取る。外面は縦方向に彫り込んだ上から施釉している。163は白磁皿である。内外面下半以下は共に露胎となる。164は陶器口縁部破片である。端部を折り返して丸く仕上げている。緑褐色釉を施す。

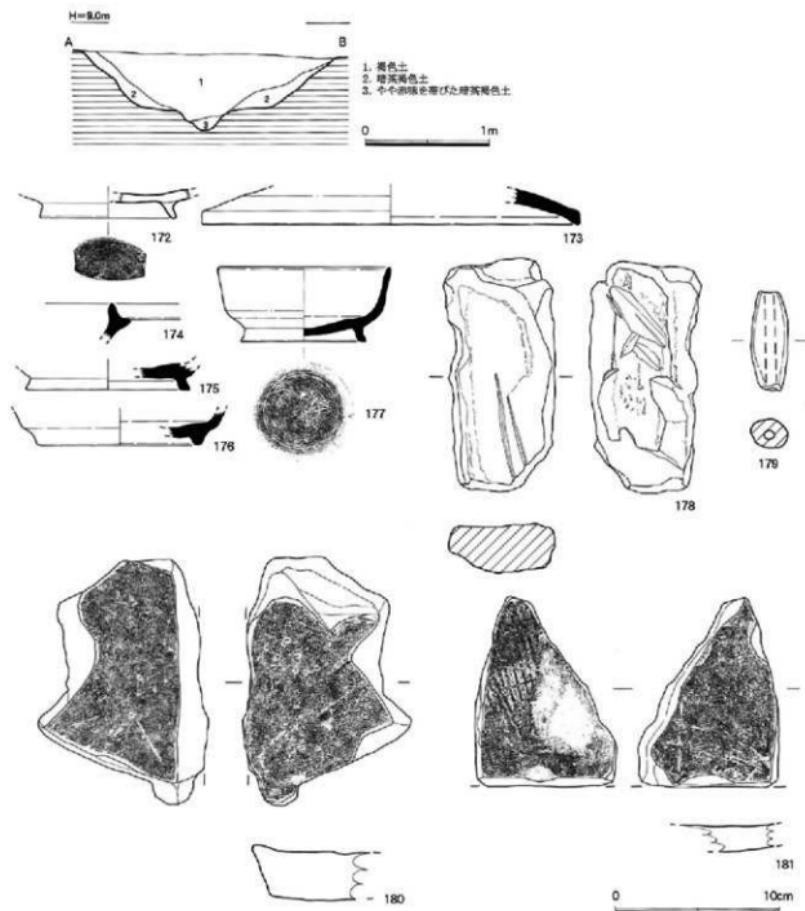
S D002（第46図）

調査区南東端で検出する。東側に弧状に延びSD001の西側で自然に立ち上がる。幅50~60cm、検出面からの深さ20~30cmを測る。中央部分に長方形の張り出し部分があり、切り合い関係を確認したが、埋土の状態・床面の形状などから差異を見出すことができず、一連の遺構と判断した。溝の東側には遺構も散漫で機能等は不明である。土師器・須恵器の細片が出土しており古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第46図） 165は須恵器壺蓋である。166は須恵器脚付き直口壺である。脚部分は失わ



第46図 SD002及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

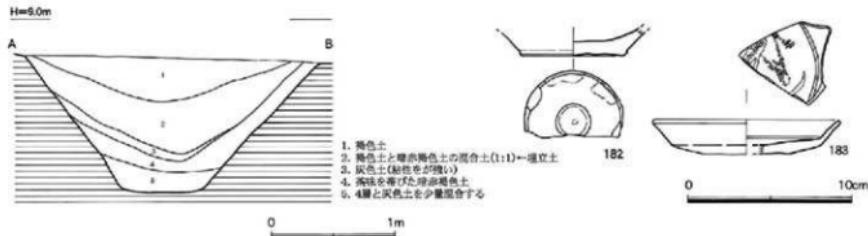


第48図 S D036土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

れているが、切り込みの痕跡から3方向に透孔を有するものと考えられる。壺下半は回転ヘラ削りを行い、胸部上部には2条1組の沈線を2組施し、その間に刺突文様を施す。

S D009・012 (第4図)

S D009は調査区中央を南北に延びる溝である。南端部分では幅20cm、深さ5cm弱であるが、北側では幅3m、深さ30cm強で断面直状を呈する。S D012は調査区南端で検出し幅70cm、深さ15cm程度の溝である。いずれも理土はしまりのないふわふわの褐色土で近世以降の埋め土と考えられる。出土遺物には染付の小片が含まれる。



第49図 SD037土層図及び出土遺物実測図（1/40, 1/3）

S D029 (第47図)

調査区南隅で検出する。長さ5.9m、深さ30cmを測る直線的な溝で、端部の立ち上がりはしっかりしている。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土の特徴から検出時にはSC031を切るものとして掘り下げるが、出土遺物の検討を行った結果これに先行するかもしくは非常に近接した時期の可能性も考えられる。出土遺物には弥生時代中期後半～終末期の壺・壺破片がある。

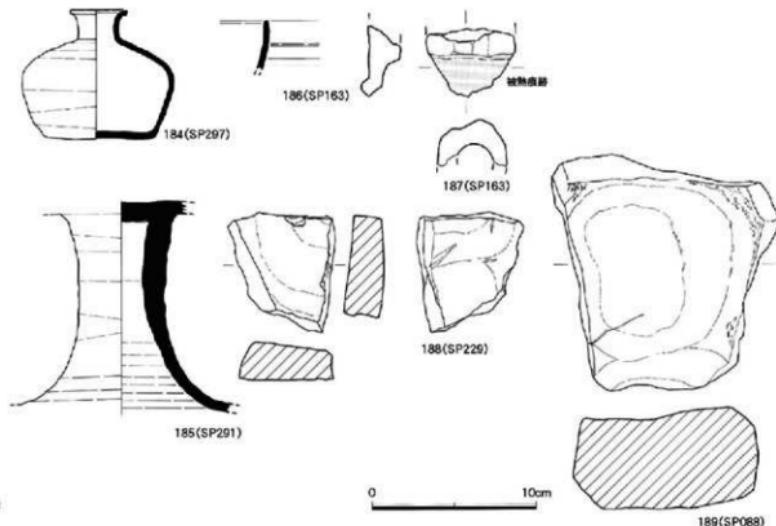
出土遺物 (第47図) 167・168は底部破片である。167はレンズ状を呈している。169は口縁部が内湾し、端部を肥厚させる壺である。頸部下には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。170は三角形突帯を有する頸部破片である。171は複合口縁を有する壺である。接合部分で剥落しており形状が不明瞭となる。

S D036 (第48図)

調査区北側隅で検出する溝で主軸方位をほぼ真北にとる。掘り方規模は幅2m前後、深さ60～70cmを測る。断面は基本的に逆台形を呈し、底面中央に幅30cm、深さ15cm弱ほどの溝状の掘り込みを有する。土層観察から中央の小溝が埋まつた後自然な埋没過程をとどめたものと考えられ、埋土にはロームブロックがほとんど混入せず均一な土層をなしている。同様の溝が隣接する8次調査地点のほか32・62・63次調査地点でも確認されており形状・方向などから一連の溝と考えられる。またやや位置がずれるが、第75次調査地点でも関連が考えられる溝が確認されている。いずれからも8世紀台に位置付けられる瓦が溝遍なく出土しており注目される。

区画等を規制するものと考えられるがこれに関連する遺構についてはいまだ不明瞭である。土師器・須恵器・瓦・土鍬・砥石が出土している。また接合できないため図示していないが口縁部を欠く須恵器の大甕破片が1個体分出土している。8世紀代の遺物が主体であり、これまでの結果を追認するものである。また隣接する8次調査地点では8世紀後半～9世紀初頭に位置付けられる井戸から「寺」の刻書が入る壺が出土しており、該期の状況を考える上で示唆的な遺物である。

出土遺物 (第48図) 172は土師器高台付き壺である。高台は細く「八」字形に開く。173～177は須恵器である。173は蓋である。口縁部は断面嘴状を呈し、天井部外面は回転ヘラ削りを行う。174は蓋受けを有する壺身である。175～177は高台付き壺である。176は高台断面は四角形を呈する。175・177は高台がやや高く端部を外方に引き出している。底部外面は回転ヘラ削りを行う。178は堆積岩製砥石で、刀先研磨状の痕跡が残る。179は新錘形を呈する土鍬である。180・181は平瓦である。焼成は軟質で橙色を呈する。摩滅が進んでいるが共に凹面には布目が残る。181の凸面は叩き



第50図 その他の出土遺物 (1/3)

痕跡が残る。

S D037 (第49図)

調査区西隅で検出し、主軸方位をN-53°-Eにとる溝である。S E 038を切る。8次調査地点から続き本調査地点中央部分で立ち上がる。幅2.4m、検出面からの深さ1.1mを測る。断面は逆台形で床面はほぼ平坦である。遺物量は少ないが青磁片が出土しており、中世前半代に位置付けられる。S D037は方向的に S D 0 0 1 にほぼ直交するため関連も考えられるが、出土遺物から見る限りでは時期差が存在するようである。しかし調査区周辺は「堀ノ内」の字名が残る場所であり居館が存在していた可能性は考えておきたい。

出土遺物 (第49図) 182は蛇の目高台を有する越州窯系青磁碗の底部である。黄緑色釉を全面に施す。183は同安窯系青磁皿である。内面に櫛描文を施す。

6) その他の遺物 (第50図)

184は口縁部を僅かに欠くが、ほぼ完形の須恵器小壺である。外底面はヘラ切りである。185は須恵器高壺である。186・187はSP 163出土である。186は小型高壺の壊部であろう。187は羽口先端部である。先端は溶融ガラス化し内孔全面に垂れ下がる。188・189は砥石である。188は砂岩製、189は花崗岩製である。

7) 小結

今回の調査成果を簡単にたどりまとめに変えたい。本調査地点は南側に鞍部が存在し、東側は現況で切り通し状の道路となっている。この部分については、SD 001土層図に見える地山の緩傾斜や、東隣駐車場の工事の際に道路面でピットが見られたとの立会い結果が知られていることなどから、自然の鞍部が形成されていた可能性が高いと考えられる。また遺構の残存状態から畠地・宅地開発等に

より削平が進んだものと考えられるが、特に古代の直線溝（SD036）や中世の大溝（SD001・037）の存在などから、古代以降の造成も考慮に入れるべきであろう。

遺構・遺物は弥生時代中期後半～末のものから確認される。なお鞍部を隔てて東側に位置する第67次調査ではこれ以前の環濠・貯蔵穴等の遺構が確認されているが、これから西側に広がってはいないようである。この時期は竪穴住居跡2棟、掘立柱建物8棟、井戸2基が主な遺構である。掘立柱建物は1×2間のものを主体とするものと考えられる。後期～古墳時代前期には竪穴住居跡6棟が確認されている。時期的なまとまりは見られず散発的な状態である。この中で後期中頃に位置付けられるSC041から内行花文鏡が1面出土している。詳細は報告の項に掲られたいが、時期的には福岡市西区阪氏遺跡群3次調査II区7号墳古墳と同時期であり注目される。

古墳時代後期には竪穴住居跡が飛躍的に増加する。時期の明らかになったもので15棟、これに掘立柱建物1棟が確認されている。竪穴住居跡は調査区北側に偏っている。また時期的には小田編年のIV期に大部分が収まるものであり、この中で2～3棟の切り合いが多く認められることは、該期の集住度を知る上でも、IV期の編年上の位置付けを考える上でも重要であろう。IIIb～IV期は那珂遺跡の南側を中心としたほぼ全面に竪穴住居跡群が広がり、一部には大型の掘立柱建物群が一般集落と離れて確認される地点も存在する。V期以降には生活遺構が減少しており、この後VI・VII期を中心としてSD036が機能している。この時期の後半には隣接する8次調査において「寺」の刻書が見られるように、官衙関連の遺構群が展開していると考えられるが、実態については不明な点が多い。なお8世紀代には比恵・那珂遺跡が位置する丘陵の東端～低地部分をいわゆる水城東門ルートが造られ、機能していたものと考えられる。遺構群の有機的関連の解明が課題となるであろう。また平安時代前に位置付けられる井戸SE038がある。

中世にはSD001・037があるが、時期的には差異があり、各時期においての遺構の広がりは明らかでない。特に堀ノ内という字名から中世居館の存在も想定できるが、ピットから該期の遺物はほとんど出土しておらず、具体的な状況は不明である。



写真1 調査区より南を望む（上方は那珂八幡古墳）

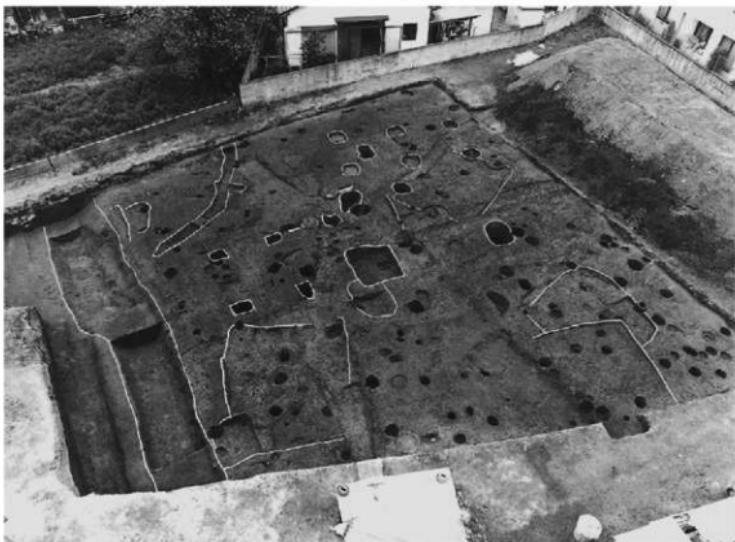


写真2 調査区南東部分全景（北から）



写真3 調査区南西部分全景（北から）



写真4 調査区北半全景（東から）



写真5 調査区北西部堅穴住居跡群（東から）



写真6 SB018（西から）



写真7 SB019（西から）



写真8 SB028（北から）



写真9 SB028-SP022（北から）



写真10 SB028-SP023（北から）



写真11 SB028-SP023土層



写真12 S B028—S P024土層



写真13 S B028—S P025土層

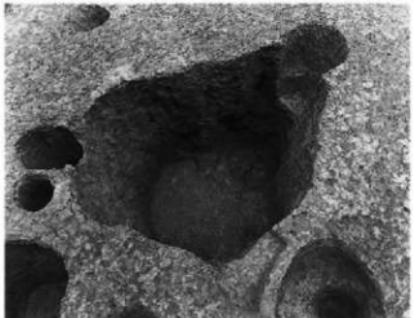


写真14 S B028—S P026（西から）



写真15 S B028—S P027（北から）



写真16 S B1012（北から）

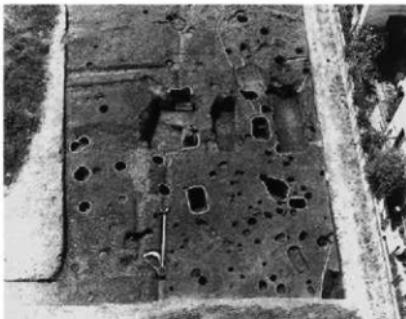


写真17 S B028・1012全景（北から）

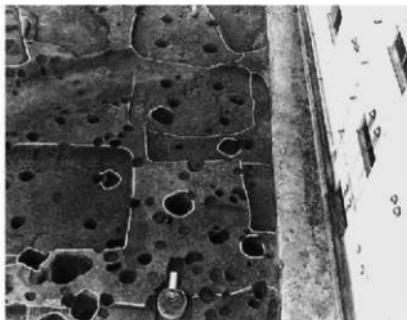


写真18 SB1014（東から）

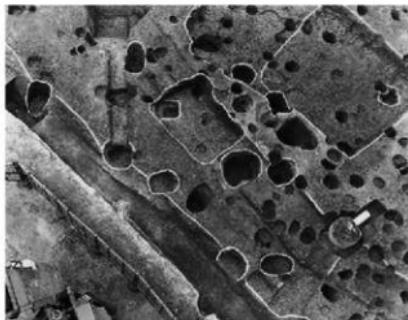


写真19 SB1015～1017（北から）



写真20 調査区北端部掘立柱建物群（東から）



写真21 SC005（北から）



写真22 SC005上層貼り床除去後（北から）



写真23 SC005階段状遺構（東から）



写真24 S C005階段状造構下層貼り床除去後（北から）



写真25 S C005階段状造構下層貼り床除去後（東から）



写真26 S C010（南から）



写真27 S C011（東から）



写真28 S C013（東から）



写真29 調査区南端部（北から）

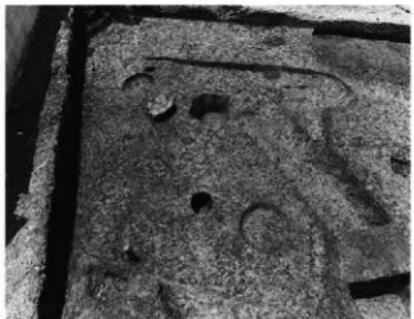


写真30 S C031（東から）



写真31 S C031貼り床除去後（北から）



写真32 S C032（北から）



写真33 S C032内壺破片出土状況（北から）



写真34 S C032土層



写真35 S C033~035（南から）

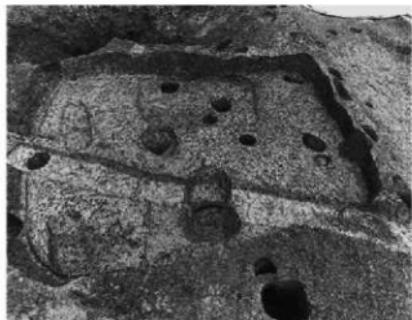


写真36 SC040（南から）



写真37 SC041（北東から）



写真38 SC041貼り床除去後（北東から）



写真39 SC041床面遺物出土状況（西から）

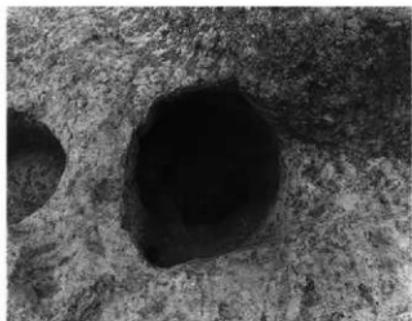


写真40 SC041内SP1011（北から）

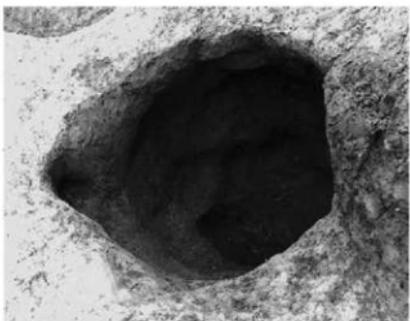


写真41 SC041内SP1011（西から）



写真42 SC042（西から）



写真43 SC042内躰跡（西から）



写真44 SC1007（北から）



写真45 SC043（南東から）



写真46 SC045（南から）



写真47 SC046・1009（東から）



写真48 SC 048・049（西から）

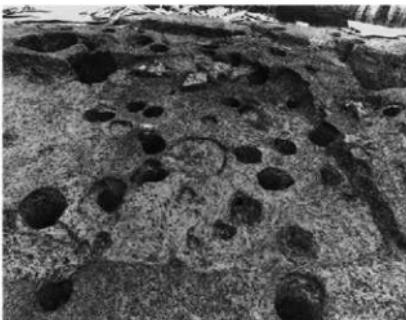


写真49 SC 049（西から）

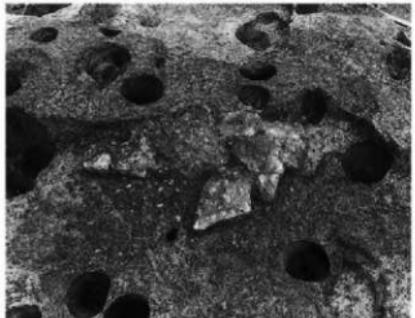


写真50 SC 049竪跡（西から）



写真51 SC 050（東から）



写真52 SC 1003（東から）



写真53 SC 1006（東から）



写真54 S C1008（南から）

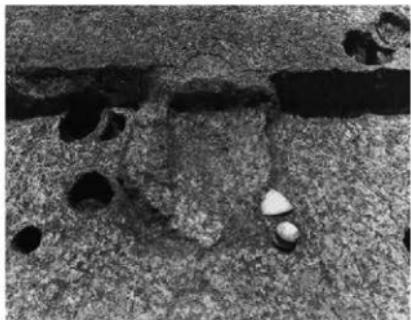


写真55 S C1008竈跡（東から）



写真56 S C046・1009（南から）

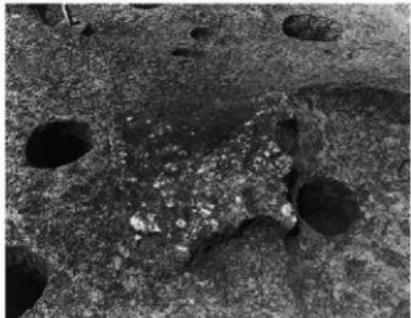


写真57 S C1009竈跡（東から）

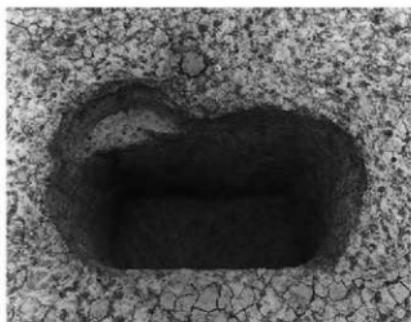


写真58 SK007（西から）



写真59 SK008（東から）

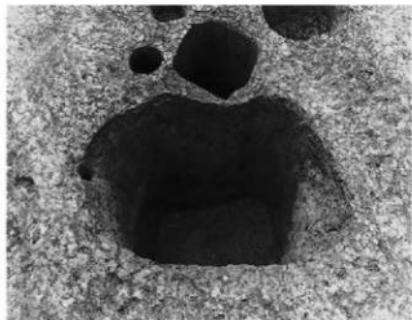


写真60 SK016（東から）



写真61 SK017（北から）



写真62 SK017貼り床除去後（東から）



写真63 SK030（東から）



写真64 SK039（西から）



写真65 SK044（西から）

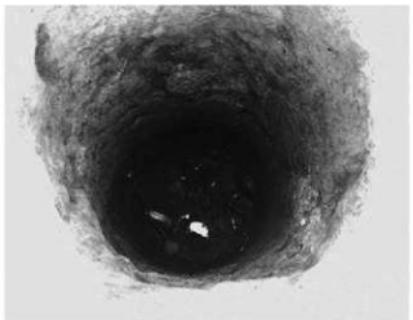


写真66 SE1001出土状況（東から）

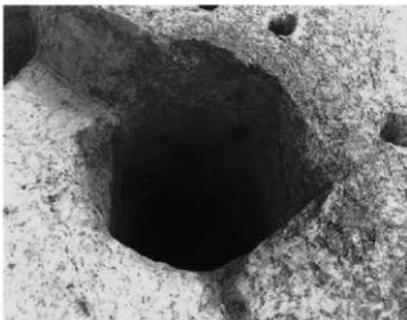


写真67 SE1001（南から）



写真68 SE1002（東から）



写真69 SE038（東から）



写真70 SD001土層1



写真71 SD001土層2



写真72 SD 036土層



写真73 SD 036（北から）



写真74 SD 037土層



写真75 SD 037（東から）



写真76 出土遺物

付編1

福岡市那珂遺跡から出土した内行花文鏡の鉛同位体比

東京国立文化財研究所保存科学部 平尾良光（現別府大学文学部）
鈴木浩子

1 はじめに

福岡市教育委員会より那珂遺跡から出土した後漢鏡に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。本調査は当研究室における「弥生時代青銅器の産地推定」という研究の一環として、十分に研究協力する価値があった。そこで、遺物の材料となった鉛について鉛同位体比法による産地推定を行った。

2 資料

資料は、福岡市博多区那珂遺跡群第69次調査の豊穴住居跡（S C041）から出土した内行花文鏡1点である。この鏡は雲雷文内行花文鏡と呼ばれるもので、中国後漢時代に製作された鏡と考えられている。出土遺構の時期は弥生時代後期中頃とのことである。

資料の写真と試料採取箇所を写真1に示した。なお分析用試料の採取は福岡市教育委員会で行われ、提供された。

3 分析法

1) 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した^{1,2)}。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクロgの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錫部分でも、同位体比は変わらないと示されているので、資料からは錫を微量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の原料産地の推定に利用することを試みた。資料から錫の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した³⁾。

2) 鉛同位体比の測定

資料から微量（1mg以下）の錫を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。錫試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2μgの鉛をリン酸シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自动表面電離型質量分析計 Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200°Cに設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

4 鉛同位体比の結果と考察

1) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表1で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した(図1)。

縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図を仮にA式図と呼ぶ。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした^{*6-7)}。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは多鋸細文鏡が分布する領域の中央線として示され、朝鮮半島産の鉛と推定される。またaは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。

縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図をB式図と呼ぶ。この図の中でA'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

2) 考察

那珂遺跡から出土した後漢鏡の鉛同位体比測定値を表1から、図1にプロットした。内行花文鏡はA式図においてA領域に位置した。B式図においても同様である。このことから、この内行花文鏡は中国華北産の材料を用いている可能性が高い。

これまでの研究から、前漢鏡は中国華北産(A領域)、後漢鏡は中国華南産(B領域)の材料が用いられているケースが非常に多い^{*4-6)}。しかし、例えば方格規矩鏡・内行花文(連弧文)鏡・線彫式獸帶鏡など、型式によっては前漢時代から後漢時代にかけて製作されたと考えられている銅鏡があり、それらの鉛同位体比は図2に見られるように、華北産から華南産へ材料が移行していることがわかる^{*8)}。

今回の資料が内行花文鏡の一種であり、華北産の材料を示したことから、使用していた材料が華北産から華南産へ転換していく時期に製作されたと考えられる。それ故、この内行花文鏡は最盛期に作られた後漢鏡よりも早い時期に作られた可能性を示唆する。また、この資料が出土した遺構の時期は弥生時代後期ということであるが、鉛同位体比が弥生時代後期青銅器に多く見られる規格化された鉛(a領域)に近いところに位置したことも、興味深い。

5 引用文献

*1) 平尾良光：古代日本の青銅器；

M.A.C.サイエンス, 4, No.2, 22-33(1990), Material Analysis Company

*2) 平尾良光：古代日本の青銅器の原料产地を訪ねて；計測と制御 28, 681-688(1989)

*3) 平尾良光,馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；
保存科学 28, 17-24(1989)

*4) 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370, 4-10(1982a)

*5) 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比から見た銅鏡の原料；考古学雑誌 68, 42-62(1982b)

*6) 馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；
MUSEUM No.382, 16-26(1983)

*7) 馬淵久夫,平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-；
考古学雑誌 73, 199-210(1987)

*8) 馬淵久夫,平尾良光,西田守夫：鉛同位体比法による本邦出土青銅器の研究；
古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,文部省科学研究費特定研究, 388-408(1984)

表1 那珂遺跡から出土した内行花文鏡の鉛同位体比

測定番号	遺跡名	資料名	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$
HS-801	那珂遺跡	内行花文鏡	17.727	15.548	38.354	0.8771	2.1636
		誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006



博多区那珂遺跡群69次調査(NAK-69) SC041出土後漢鏡(雷文内行花文鏡)

写真1 那珂遺跡から出土した内行花文鏡
(福岡市教育委員会)

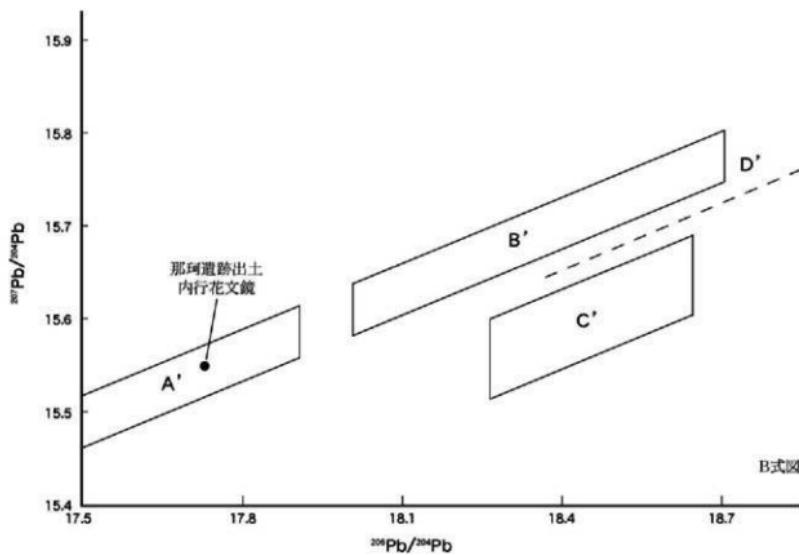
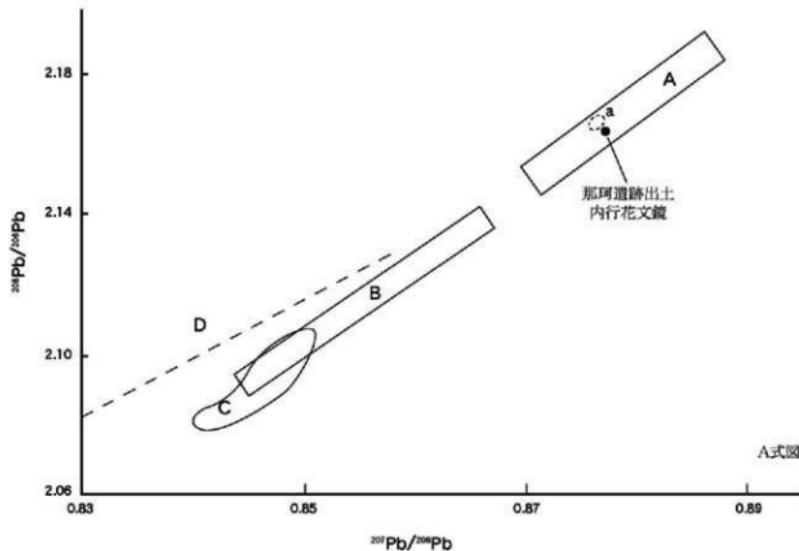


図1 那珂遺跡から出土した内行花文鏡の鉛同位体比

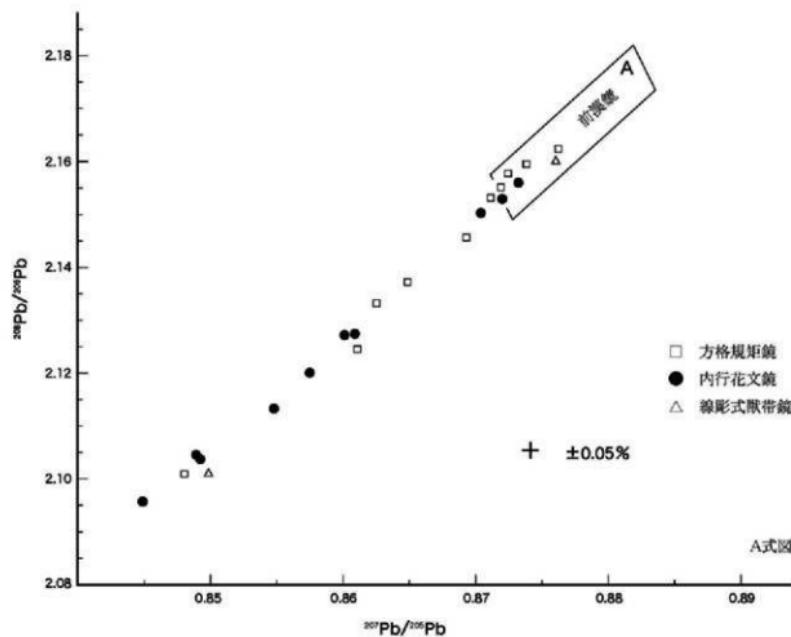
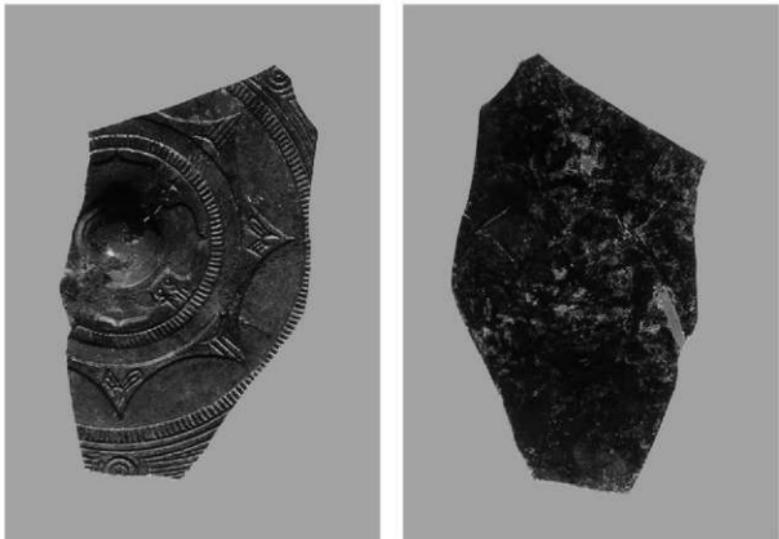


図2 方格規矩鏡、内行花文鏡、線形式獸帶鏡の鉛同位体比
(引用文献(8))



付編2

福岡市那珂遺跡から出土した内行花文鏡の保存科学的処置について

福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎

出土青銅鏡について行った保存科学的処置について報告する。作業の流れは下図の通りである。

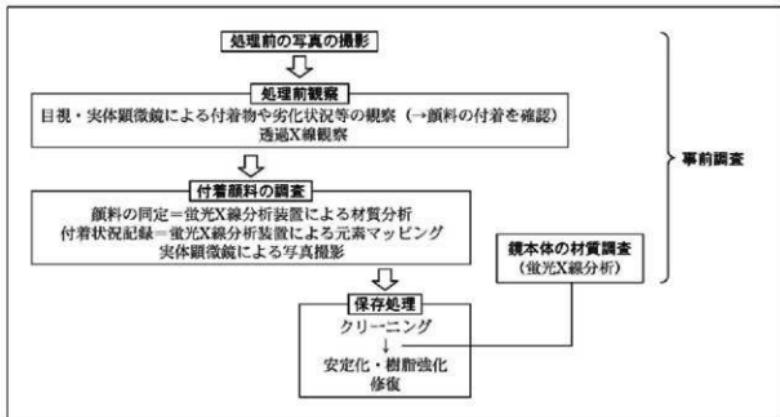


図-1 那珂69次出土青銅鏡保存処理の流れ

以下、各工程の内容と、そこで得られた知見等について記す。

作業着手前の資料は鏡面部分4片と鉢部分の小片に割れ、若干埋土が付着しながらも、一見表面的な腐食は見られず部分的に黒光りし、本来の外觀を保っているように見られた。しかし詳細に観察すると、特に鉢の破損部分などで破断面が白緑色の粉状に変質するなど、いわゆるブロンズ病の症状が現れていた。過去に取り扱った青銅器類でも、表面的には残りが良さそうに見えて内部で腐食が進行している場合があり、今回の資料でも予断を許さない状況が想定された。実際、透過X線による事前調査でも、この状況が裏付けられるかのように肉眼的には認められない斑状の濃淡が観察され、遺存状況が部分的に異なっていることが推測された（写真2）。

また肉眼観察でも赤色顔料の付着が見られたが、これは実体顕微鏡による観察でより明瞭となった。顔料の残存は重複付近に特に顕著であるが、それ以外でも文様の凹んだ部分において僅かな付着が認められる部分も少なくない。しかし、いずれも鏡背面に限られているようである。この状況は、まず実体顕微鏡下で写真撮影（デジタル）を行い記録にとどめた。顔料は顕微鏡観察で見ると、いずれも非常に鮮烈な赤色で、粒子が光を反射して輝いている（写真3・4）。

次に付着顔料の種類を同定するために、蛍光X線分析装置を用いた分析調査を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線（特性X線）を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。今回は顔料の付着範囲が限られており、顔料部分のみをねらった分析を行うために、X線の照射面積を0.3mmにまで絞った微小領域用装置を用いた。装置の動作条件は次の通り。

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製/Eagle μ probe）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：40kV・100μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間300秒

これまでに知られている弥生～古墳時代の赤色顔料には、酸化第二鉄(Fe₂O₃)を主成分とするベンガラと、硫化水銀(HgS)の結晶である朱の二種類がある。蛍光X線分析では、事前の観察等により対象資料が明らかに顔料であることや、複数種の粒子の混在がないことの確認を前提として、鉄(Fe)もしくは水銀(Hg)の検出により両者を判別することとなる。

調査の結果、後に詳述するが、銅、鉛、錫など鏡本体の成分の他に、水銀の強いピークが観測された。鉄も検出されているが、顕微鏡観察では單一種類の顔料粒子のみしか確認されておらず、また同時に珪素やアルミニウムなど土壌の成分も現れていることから、土壌に含まれる鉄分と見られる。

更に、水銀の検出範囲を二次元的に確認することを目的として、同じ装置のマッピング機能を用いた調査を行った。その結果は写真5に示す。これによれば肉眼的に付着が確認できる範囲以上に水銀が検出されており、当初は、より広い範囲で顔料の付着していた可能性が考えられる。

また破断面の一部に赤色の部分が認められ顔料の付着が疑われたが、この部分の分析では水銀の検出や鉄が飛び抜けて強く現れるということではなく、強いていえば鏡本体の主成分である銅が強いことが挙げられる程度である。顕微鏡観察でも赤色粒子の付着ではなく、鏡が部分的に赤色に発色しているように見受けられ、これらのことから銅の酸化物（cuprite : Cu₂O）による発色が考えられる。

この他、顕微鏡観察では纖維の付着などは認められなかった。

以上、事前調査の所見に基づき、クリーニング作業に移った。この作業は付着埋土の除去により、展示や今後の調査研究などに際し、より活用しやすい状態にすることを目的とするが、顔料の付着残存という貴重な情報まで取り除いてしまうことを避けるため、顕微鏡下で表面状態を確認しながら、筆とアルコールを使って最低限の範囲で実施した。

クリーニングが完了した段階で再び事前調査の作業として、鏡本体の材質調査を実施した。事前調査は本来、保存処置作業に先行して行われるべきものであるが、非破壊で実施される出土文化財に対する蛍光X線分析の場合、出土直後の状態で行えば表面に付着した埋土の情報までデータに含まれることとなる。クリーニング作業によって埋土の除去が100%完全に行われるものではないが、余分な情報をできる限り除去する意味で、クリーニング後の実施が望ましいと考える。逆に、処理工程が進み、保存処理が完了後に分析を行うと、その影響の度合いは別として、保護用に使用する合成樹脂の影響なども考慮する必要が生じてくる。

材質分析は赤色顔料の調査と同じ装置で、設定も電圧・電流値を任意に設定した以外は同条件で行っている。作業は微小領域用装置の特性を活かし、腐食など表面の状態が異なる複数の部分を選んで行った。また、今回は完全非破壊で定量値を補正するための標準資料も用いていないことから、結果は主要成分である銅のX線強度を100とした場合の各検出元素の相対強度で数値化している。分析結果は別表に示すとおりである。定性的には銅、銀、鉛を主成分とする青銅で、他に微量成分として砒素、銀、アンチモンを含む。これらは過去に示されている弥生時代青銅器の分析結果と矛盾するものではない。結果を見ると、肉眼的に差がない表層部分ではデータにも大きな差異は認められないが、著しく腐食が進んだ部分（point5）では銅のX線強度が弱くなり、相対的に他の元素の強度が強くなっている。またpoint5に隣接する表層部分（point6）では今度は銅のX線強度が強くなり、逆にそれ以外の元素が弱くなっている。分析箇所が少なく傾向を見出すことは困難であるが、腐食による元素比率の変化が看取される。村上隆氏による出土青銅鏡断面の詳細な分析調査では、表層に近い部分で

は銅が溶出し鉛が拡散して銅が顕著になっているが、それより内部では鉛が顕著な層や銅が豊富に見られる層が存在するなど複雑な腐食の様相を呈していることが明らかにされており（村上他2003）。今回の分析結果もこれと似たような状況を示しているものと思われる。このことからも完全非破壊による出土文化財の表面分析で得られた、定量値の取り扱いに対する注意が再認識される結果となっている。なお、表中の鉄は残留する土壤にも含まれる成分であり、鏡本体に由来するか否かの判断は困難であるが、参考のため数値を示す。

分析 Point	分析部の状況	分析条件	鉄 Fe-K α	銅 Cu-K α	砒素 As-K β	鉛 Pb-L β	銀 Ag-K α	銅 Cu-K α	アンチモン Sb-K α	主要元素の X線強度 (cps)
1 : 鏡面光り部分	40 kV uA	7.73	100.00	1.08	15.04	0.30	18.65	0.10	327.29	
2 : 鏡面光り部分	40 kV uA	7.37	100.00	1.03	16.28	0.26	22.00	0.20	319.99	
3 : 鏡面黒ずみ・凹線上	40 kV uA	12.99	100.00	1.29	14.23	0.36	30.34	0.21	274.80	
4 : 鏡面内円形文平坦部分	40 kV uA	12.21	100.00	1.15	14.34	0.29	20.25	0.22	344.59	
5 : 脱欠損タグ・キーイング部分	40 kV uA	7.54	100.00	4.83	49.19	0.79	44.41	0.43	187.81	
6 : 脱欠損外輪縁部	40 kV uA	2.67	100.00	1.16	3.99	0.17	7.45	0.14	714.96	
7 : 鏡面黒ずみ部分	35 kV 80 uA	1.11	100.00	0.15	1.35	0.04	0.97	0.01	1140.59	

結果は鏡のX線強度を100とした場合の各元素のX線強度比で示している。

鉛の強度はK β 強、鉄はL β 強により求めている。

表-1 萤光X線分析の結果

その後、保存処理作業に戻り、鏡本体の安定化と保護、強化を目的としてアクリル樹脂（バラロイドB-72）5%のトルエン・アセトン溶液にベンゾ・トリ・アゾール（BTA）3%を混ぜたものを含浸。この際、50cmHg程度の減圧を行い、内部への浸透を促した。樹脂含浸後は自然乾燥させ、表面に残った余分な樹脂分はある程度溶剤で除去している。本資料のように表面の残存状況が良好な青銅鏡は、鋳造や仕上げに際しての研磨痕などの重要な情報を多数含んでおり、余分な樹脂塗膜はこれらの観察を阻害する要因となる。しかし資料の保護、強化と情報取得の妥協点を見出すのは困難であり、今回も詳細な観察に足るほどの除去は行いきれていない。これについては可逆性のある材料を使っているので、必要に応じて対応するしかないと考える。

最後に修復であるが、破片の接合は資料がそれほど大きくなく、重量的な負荷はあまり掛からないと考え、可逆性を優先してセルロース系接着剤を用いた。また鉛部分や破片間に生じた大きな空隙には、可逆性という性質を統一する意味で、セルロース系接着剤に滑石微粉末（タルクパウダー）を混ぜたもので補填。着色は水溶性アクリル絵の具を用い、実物部分と違和感なく判別できる色調で補彩。これにより一通りの作業を完了した。

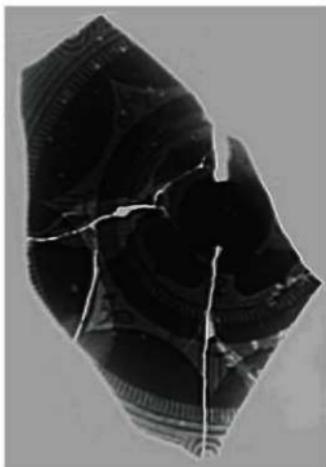
出土文化財の保存処理は、資料の保全は勿論のこと、そこに含まれる様々な情報をも残し、伝えることが必要となる。鏡に残る情報を全て引き出し得てはいないものの、将来的に改めてそれを取り出すことは十分可能なはずである。今回の処置により資料が健全な形で残り、より活発に活用されることを望む。

（参考文献）

- 村上隆・山崎一雄2003「椿井大塚山古墳出土三角鏡神獸鏡の金属学的キャラクタリゼーション」『文化財保存修復学会第25回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会



1. 着手前の状況



2. 透視X線像



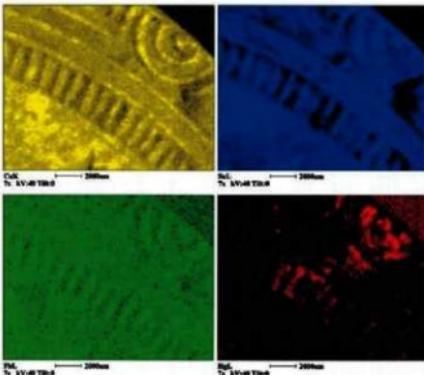
3. 風料の付着状況



4. 同左



5. 風料付着部分の元素マッピング



上 可視光鏡像

右 黄色:銅
青色:鉄
緑色:鉛
赤色:水銀

書名ふりがな なかさんじゅうよん
書名 那珂34
副書名 -那珂遺跡群第69次調査報告-
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 800
編監者名 長家 伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20040331
作成法人ID 810-8621
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな なかいせきぐん
遺跡名 那珂遺跡群
所在地ふりがな ふくおかしはかたくなか1ちょうめ 590の1 602の1 605の1
遺跡所在地 福岡市博多区那珂1丁目 590-1 602-1 605-1
市町村コード 40132
遺跡番号 37-0085
北緯 33° 34' 20"
東経 130° 26' 8" (世界測地系)
調査期間 19990408-19990628
調査面積 1088
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生 古墳 古代 中世 近世
遺跡概要

	建物	住居	土坑	井戸	溝
弥生	8	3+α	2	2	1
古墳	1	16+α	5		1
古代				1	1
中世					2
近世					1

弥生土器 破鏡（内行花文鏡）
須恵器 土師器
須恵器 土師器 黒色土器
青磁 白磁
染付

特記事項 弥生後期の住居から内行花文鏡の破鏡が出土する

福岡市埋蔵文化財調査報告書第800集

那珂 34

-那珂遺跡群第69次調査報告-

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

2004年(平成16年)3月31日

☎092(711)4667

印刷 株式会社ハザマ印刷

福岡市南区那の川1-20-23

那
珂

34

—那珂遺跡群第69次調查報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第800集

2004

福岡市教育委員会